おぐにまち

山形県立小国高等学校
地域文化研究班

目　次

１．小国町の概要

①　位置

②　土地と面積

③　人口と世帯

２．羽前小国郷の地図

３．集落と大字名

４．集落名の由来

５．方言集

６．言い伝え集（かるた読み札）

７．語り部さんの語り

８．言い伝え集（ものがたり）

①　北部

②　本町

③　南部

付　録

大里峠の大蛇伝説

（平成２１年度レポート「小国町の昔物語を探る」より）

小国町の峠街道

（平成２２年度レポート「昔物語から探る小国町」より）

１．小国町の概要

① 位置

小国町資料より

② 面積と土地

小国町の面積は 737.55k ㎡、東京 23 区（621k ㎡）の面積より広大で、山形県総面積の 7.9%を占めています。そんな広大な土地の９４％が森林が占めています。原野も２％も残って、それに対し住宅地や工業用地はわずか０．４％となっています。

森林については多くが、※白い森　と呼ばれているブナをはじめとする天然の落葉広葉樹林が多く、国内有数の森林資源を有しています。（※冬は雪の白さ・夏はブナの木肌の白さ）

	統計	森林	農用地	原野	住宅用 工業用地等	その他
面積(k ㎡)	737.55	696.47	13.99	13.59	2.78	10.72
構成比	100%	94%	2%	2%	0%	1%

小国町資料（平成 18 年）より

③人口と世帯

ｉ．人員の推移

	昭和 30 年	昭和 35 年	昭和 40 年	昭和 45 年	昭和 50 年	昭和 55 年	昭和 60 年	平成 2 年	平成 12 年	平成 17 年
人口(人)	18366	17787	15983	13999	12649	12221	12096	11315	10262	9742
世帯(戸)	3267	3520	3589	3447	3345	3325	3337	3217	3209	3277
世帯人数	5.62	5.05	4.45	4.06	3.78	3.68	3.62	3.52	3.20	2.97

小国町史より

ⅱ．旧小国町の世帯数と男女の推移

		世帯数(戸)	総人口(人)	男	女
津 川 村	大正 9 年	382	2523	1316	1207
	昭和 61 年	380	1248	608	640
小国本村	大正 9 年	790	4389	2215	2174
	昭和 61 年	2439	8551	4245	4306
南小国村	大正 9 年	229	1453	727	726
	昭和 61 年	239	854	408	446
北小国村	大正 9 年	300	1793	901	892
	昭和 61 年	353	1528	747	781

日本国勢調査（大正９年）より

ⅲ．人口構造

	昭和 25 年	昭和 50 年	平成 2 年	平成 7 年	平成 12 年	平成 16 年
年少人口	39.3	21.4	17.2	15.9	14.5	13.8
生産年齢人口	57.4	69.4	63.8	60.8	57.9	55.6
老年人口	3.3	9.2	19.1	23.4	27.6	30.5

総務省統計局国勢調査（平成 16 年）より

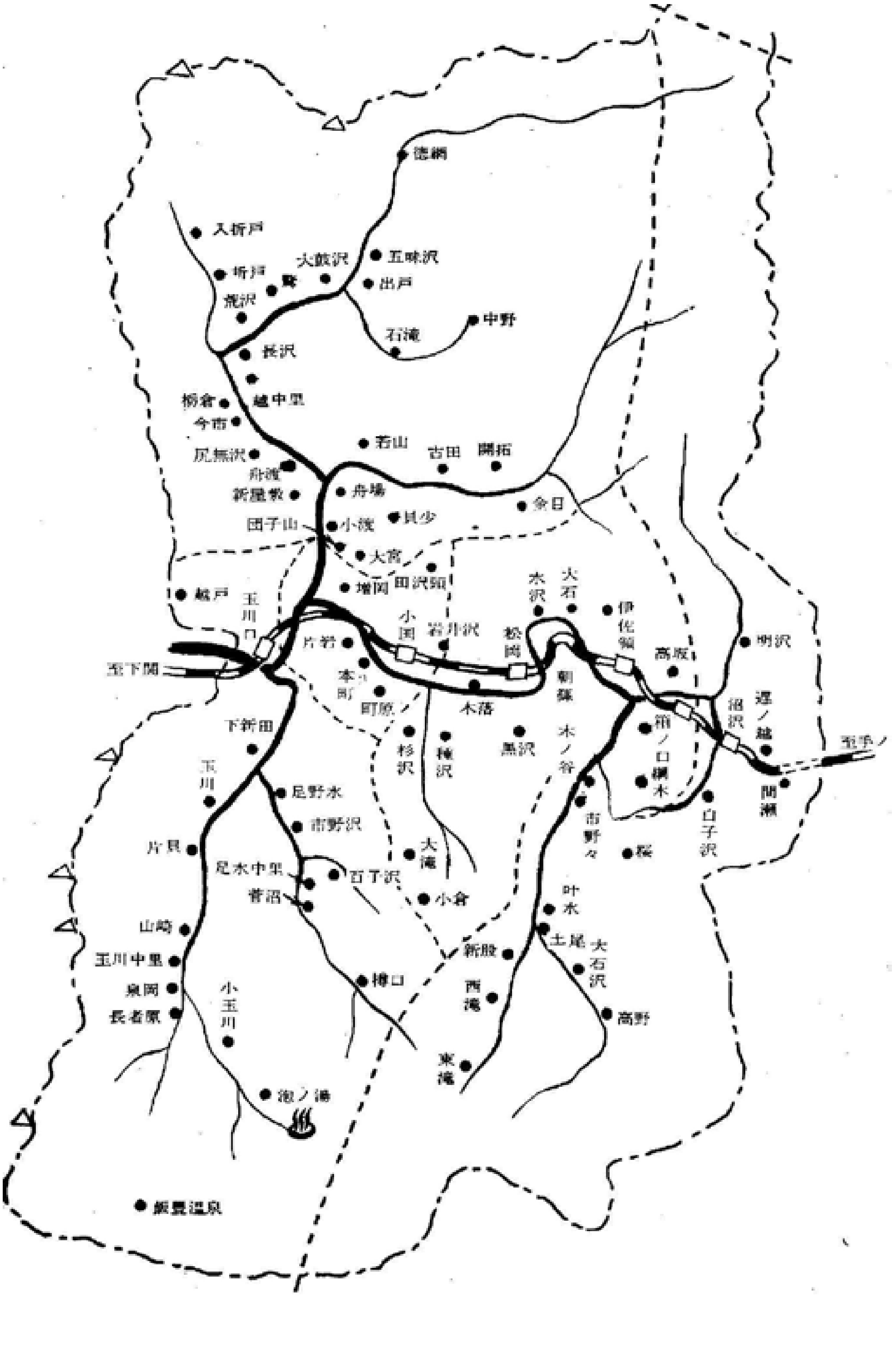
※【年少人口（15 歳未満）】・【生産年齢人口（15 歳～64 歳）】・【老年人口（65 歳以上）】

ⅳ．世帯構造

１世帯あたりの人数	１人	２人	３人	４人	５人	６人以上
平成　７年（%）	15.3	24.3	18.8	15.8	10.5	15.2
平成１２年（%）	17.5	25.9	18.8	15.3	9.7	12.8

小国町資料より

２．羽前小国郷の地図



羽前小国郷の歴史より

３．集落と大字名

北部地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
徳網	とくあみ	五味沢	中里	なかざと	舟渡	松崎	まつさき	松崎
樋倉	ひぐら	五味沢	上平	うわだいら	舟渡	尻無沢	しりなしざわ	尻無沢
五味沢	ごみさわ	五味沢	入山	いりやま	舟渡	網代瀬	あじろせ	網代瀬
出戸	でと	五味沢	蟹沢	かにさわ	舟渡	入折戸	いりおりと	入折戸
石滝	いしだき	石滝	宮ノ崎	みやのさき	舟渡	樋ノ沢	ひのさわ	樋ノ沢
中野	なかの	石滝	窪	くぼ	舟渡	中島	なかじま	中島
栃倉	とちぐら	栃倉	焼山	やけやま	焼山	長沢	ながさわ	長沢
驚	おどろく	驚	荒沢	あらさわ	荒沢	小股	おまた	小股
越中里	えっちゅうざと	越中里	折戸	おりと	折戸	太鼓沢	たいこさわ	太鼓沢
今市	いまいち	今市						

本町地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
金目	かなめ	金目	若山	わかやま	若山	大宮	おおみや	大宮
開拓	かいたく	吉田・金目	舘	たて	若山	湯ノ花	ゆのはな	湯ノ花
長萩	ちょうはぎ	古田	舟場	ふなば	増岡	北	きた	北
古田	ふるた	古田	団子山	だんごやま	増岡	二本柳	にほんやなぎ	北
小渡	おど	小渡	下林	したばやし	増岡	高稲場	たかいなば	西
玉川口	たまがわぐち	小渡	横道	よこみち	増岡	田沢頭	たざわがしら	田沢頭
越戸	こえと	小渡	増岡	ますおか	増岡	新屋敷	しんやしき	新屋敷
貝少	かいしょう	貝少	沖	ますおか	増岡	針生	はりう	針生
片岩	かたいわ	小国小坂町	小芦	こあし	小国町	町原	しんばら	町原
腰巻	こしまき	小国小坂町	緑町	みどりちょう	緑町	木落	きおとし	町原
小坂町	こさかまち	小国小坂町	栄町	さかえまち	栄町	杉沢	すぎざわ	杉沢
小国町	おぐにまち	小国町	岩井沢	いわいさわ	岩井沢	新原	しんばら	新原
大滝	おおたき	大滝	朝篠	あさしの	朝篠	請向	うけむかい	伊佐領
小倉	こぐら	小倉	水沢	みずさわ	朝篠	伊佐領	いさりょう	伊佐領
種沢	たねざわ	種沢	大石	おおいし	伊佐領	古屋敷	ふるやしき	綱木箱ノ口
松岡	まつおか	松岡	向大石	むかいおおいし	伊佐領	箱ノ口	はこのくち	綱木箱ノ口
黒沢	くろさわ	黒沢	蠑池	いもりいけ	伊佐領	高坂	たかさか	綱木箱ノ口
綱木	つなき	綱木箱ノ口						

南部地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
下新田	しもしんでん	玉川	泉岡	いずみおか	泉岡	滝倉	たきぐら	滝倉
玉川新田	たまがわしんでん	玉川	古屋敷	ふるやしき	小玉川	菅沼	すがぬま	菅沼
玉川	たまがわ	玉川	長者原	ちょうじゃはら	小玉川	足野水中里	あしのみずなかざと	足野水中里
片貝	かたかい	片貝	川入	かわいり	小玉川	百子沢	ひゃっこさわ	百子沢
向片貝	むかいかたかい	片貝	六斗沢	ろくとざわ	小玉川	北山	きたやま	百子沢
中田山崎	なかたやまざき	中田山崎	小玉川	こたまがわ	小玉川	市野沢	いちのさわ	市野沢
山崎	やまざき	中田山崎	樽口	たるくち	樽口	足野水	あしのみず	足野水
玉川中里	たまがわなかざと	玉川中里						

津川地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
木ノ谷	きのだに	市野々	西滝	にしだき	西滝	高松	たかまつ	白子沢
市野々	いちのの	市野々	大石沢	おおいしだ	大石沢	森残	もりのこし	白子沢
叶水	かのみず	叶水	胡桃平	くるみだいら	大石沢	沼沢	ぬまざわ	沼沢
才ノ神	さいのかみ	叶水	高野	こうや	大石沢	百子沢	ひゃっこざわ	沼沢
土尾	つちお	叶水	赤沢	あかさわ	大石沢	明沢	みょうざわ	沼沢
二渡戸	ふたつど	叶水	豆納	ずのう	大石沢	遅ノ越	おそのごえ	沼沢
山崎	やまざき	叶水	桜	さくら	白子沢	間瀬	まぜ	沼沢
新股	あらまた	新股	沢中	さわなか	白子沢	綱川	つながわ	沼沢
河原角	かわらずの	河原角	白子沢	しらこざわ	白子沢	屋敷	やしき	沼沢
東滝	ひがしだき	東滝						

４．集落名の由来

栃倉	白山姫神社の境内に、根元から二股の栃の大木が生い茂り、その面積３反歩に広がったという。栃の木の実から蔵でも建て豊かな村があったのか栃蔵という地名であったのが現在の栃倉に変わったのではないかとの集落のお年寄りの話である。今なお栃の木の株元があるそうです。
尻無沢	集落の中心部に西の山合から小沢が流れ出しているが、当集落が出来始めた頃は沢の出口付近一帯が芦の湿原で、沢の行き先が確認されなかったために、「しりのないさわ」ということで、尻無沢と呼ばれるようになったと伝えられている。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員長　栗田寛美氏）より
網代瀬	集落の古老に聞いても、地名の由来については不明であるが網代（あじろ）というのは川の瀬に、竹で編んだ網を仕掛け魚を獲る漁のことをいい、この地区の人々は昔、その漁を業いとしていたことが推察できる。また、この地区は昭和の初め頃まで、荒川を渡し舟で渡り、川向いの若山地区と行き来していたそうである。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員長　栗田寛美氏）より
舟渡	承久の変（西暦１２２１年）によって、佐渡に移された順徳上皇がひそかに彼の地を脱出し、越後より荒川沿いに上り、当時の通路である八ツロ・越戸を通り、沖庭峠を越えて小渡に至り、さらに舟渡・越中里をすぎ朝日岳を越えて、村山方面に出られた。そして、北村山郡の御所山に行かれたと伝えられている。その時、上皇が荒川を渡渉（お渡り）せられたことにちなんで小渡（元、御渡と書いたという）の地名が生まれ「舟でお渡り」なされたことから舟渡地名が生まれたといわれる。 （小国町史　順徳天皇に関する伝説）より 上皇が通ったといわれる裏づけとして、上皇は観音様と天神様をご信仰されており、お供の者に２つのご神体を持たせてこられたが、いずれも小国で紛失された。その１つが針生吉祥寺の長田の観音様（聖観音で小渡地内長田という田の中から発見されたもの）であり、他の１つは越中里の蕗（ふき）の葉の葉天神（蕗の下より発見されたという金刻の神像）であるといわれている　（小国伝説集）より
貝少	その昔、貝少地区は水が冷たく、つぶや、たにし等の貝類が良く育たなかったという。また海の貝類の化石が少なかったことから名前がついたものと思われる。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　木村俊三氏）より
舘	字の如く「やかた」と称されるが、大昔に、城とまではいかない舘があり、高貴な人が住んでいたのではないかと、古くからいい伝えられてきた。地形的にも、人の住む場所としては、住みやすい場所であったに違いない。周囲から、石器、土器などが多数発見されていることから、考古学的にも間違いのない、生活の場であったと思われる。集落の歴史として推定されるのは、最も古い家で６代目くらいであるから、およそ２００年～５００年と思われる。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　舟山数夫氏）より
新屋敷	昔、河原だった所を新しく耕して集落をつくった所なので、新屋敷（しんやしき）といわれている。当時は２０戸程あったといわれる。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　和田一枝氏）より
壁田	昔々、赤茶色の粘土質の土地があり、付近の人々は、家を建てるときの壁材料として、その赤茶色の粘土を使用していた。どの壁土の採取地でもあったし、田も畑も一帯が粘土質の地形であった。その土地柄から壁田の地名が俗称となり、後に地名になったといわれている。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　金　正美氏）より
小渡	順徳天皇が沖庭峠を越えて、荒川をお渡りになったと伝えられており、それにちなんで御度（おど）といったのが、後に小渡となったといわれている。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　金　正美氏）より
越中里	昔、人々の一つの集団が小国町に住んでおり、その人々が今の生活よりもっとよい生活環況があるかも知れないと思い集団移住することにしました。そしてその人々は現在北部といわれている所によい場所はないかと求めていき、美しい山々を眺めたり、山菜をとったり清き荒川のせせらぎを聞きながら北上していくと、とてもながめのよい所に出ました。そこは荒川の対岸で魚は豊富にすみ、山は近く、生活する場所としては申し分なく、荒川の真中には中州（中島）があり、それを越えて対岸に渡りつき、この土地に自分達が住むことを決めました。荒川の中島を越えて、新しい土地を求めたというところから「越中里」といわれるようになった。　（小国郷の伝説集）より

５．方言集

【あ】				
あおもの	山菜		あったげ	有る限り
あがっぱら	（赤っ腹）赤痢		あっちぇ	暑い・熱い
あがぐなった	明るくなった、夜明け		あっじさえ	有るそうだ
あがれ	家へ招き入れる		あだまがじ	頭でっかち
あがんな	物の上に乗るな		あだまやみ	心配事
あぎやじ	さけ		あどさま	仏様
あげず	トンボ		あどおい	泣きわめく子供
あぐど	かかと		あなぐら	かまくら
あぐどかけ	じんべ（冬季の藁ぐつ）		あにさ	兄
あぐどなぐりに	すぐに		あにゃ	兄
あぐ	灰・にがり		あねさ	兄嫁
あぐし	あぐら		あぶね	危ない
あげいしょ	赤衣裳　よそ行きの衣裳		あぼう	争う
あさふあん	朝食		あまごい	甘い
あさんかた	朝方		あさでっかり	朝晴れ
あしたに	そのうちに		あざぐ	漁る
あぢけわい	（味気悪い）後味が悪い		あめる	薄くなる
あづらえる	注文する		あじつける	思い出す
あっけなえ	あっという間		あぐだい	悪態
あいしょらう	相手にする		あだげる	騒ぐ
あいふぁ	相手		あでがう	合わせてみる
あいまぢ	怪我		あでぎ	炉縁
あお	大きな木槌		あでずっぽ	当て寸法・いいかげんな
あおのけ	仰向け		あでご	よだれかけ
あえま	（会う間）たまに		あだり	その辺
あっか	赤ん坊		あじこど	心配事
あおしし	かもしか		あっちゃえげ	あっちへ行け
あおらじ	アオダイショウ・蛇		あっぱぐち	口あけて呆然
あえぶ	歩く		あぱとぱて	慌てた様子
あえべ・あべ	一緒に行こう		あげつぼ	雪解けの水路口
あおぱ	野菜・木の葉		あらぎこぎ	がむしゃらな男
あおらあおら	元気がない様子		あんて	のんき
あごみち	吹雪の雪道		あんばえみ	味見

【い】	
いあん	案配がよい
いいぱぐっだ	言いそびれた
いがっだ	よかった
いぐずかだる	文句をいう
いぐずわい	調子が悪い
いどまごい	おいとまの挨拶
いじくされ	意地悪な人
いさばや	魚や干物の行商
いじがいに	いっぺんに
いしゃ	おまえ
いしょうり	呉服屋
いだましい	惜しい
いづら	いつもの顔つき
いだば	やっていたら
いなばじまい	稲収穫終わり
いまっと	もっと
いまちと	もう少し
いっきび	いい気味
いって	痛い
いっぺ	たくさん
【う】	
うだる	紛失する
うがえる	水がいっぱいになる
うまがんべ	おいしいでしょう
うむ	熟す
うむれる	蒸し蒸しする
うらえだ	天井
【え】	
え	家
えがろえ	いがらっぽい
えぇだい	絶対
えぇそら	いい状況
えぇがった	よかった

【え】	
えじる	もてあそぶ
えづい	目がちかちかする
えっきになる	得意になる
えであったべが	ご在宅でしょうか
えなげだ	へんなこと
えらんねべっちぇ	居られないでしょう
えびづたがり	ひねくれもの
えごで	いいですよ
えんげ	向こうへ行って
えんまに	あとに
えんばいごぎ	ご機嫌とり
【お】	
おがる	成長する
おがだ	奥さん
おぎっが	起きようか
おしょる	折る
おしょうしな	ありがとう
おだじ	もう一膳差し出す
おだもじかしぇる	おだてる
おっかね	怖い
おどっこ	男の子
おどでな	一昨日
おながに	共有して使う
おなんこ	女の子
おもっしぇ	面白い
おそ	動物捕獲の仕掛け
おにへぇたげる	大人気ない
おやげね	情けない
おらえ	自宅
おっかえし煮	雑多煮
おぼご	赤ん坊
おらだ	俺たち
おんつぁれる	叱られる

【か】			【き】	
かえし	糞		きおう	はしゃぐ
かえっちゃ	服の裏返し		きかずやろ	無鉄砲な人
がおる	弱弱しくなる		きびわい	不気味
かがっぽい	眩しい		ぎごちねぇ	しっくりこない
がぎこ	いたずらっ子		きめる	すねる
がすもぐ	ごみ		きもむ	焦る
がってもね	つまらない		きちろ	来なさい
かだっぽ	片方		きずい	刺激が強い
かだらせ	靴の左右履き違え		きっつぇ	窮屈
かづねる	肩にかつぐ		ぎっつりした	満腹などで身動きできず
がっでしね	弱音を吐かない		ぎっちょ	左利き
かもな	構うな		きびえごど	いい気味
がさ	量		ぎす	キリギリス
かっぽごす	壊す。分解する		きどい	フキノトウ等の味を表す
がっでもねぇ	ナンセンス		きんびづ	高価な木製の道具箱
がめる	こっそりかすめ取る		きんにゃわね	気に入らない
がめづい	けちんぼ		きんか	耳が聞こえない
かぶだれくう	川に落ち衣類を濡らす		きんな	昨日
かもな	構うな			【く】
がんがぐ	面倒をみる。介護する		くいだぢ	食後すぐ仕事をする
がいろぺ	おたまじゃくし		くたまにしね	苦にしない
かなしぇがり	不精		くたびっちゃ	疲れた
かどい	機敏・敏速		くわる	埋もれる
かなえじゅう	家族全員		くったぎる	かみつく
がげすぽ	雪庇		くど	焚き口
かまこ	やかん		くべる	焚火に木を追加する
かます	かき回す		くらつける	殴る
かめ	肝臓		くらんけ	回転・逆さま
かんご	桑の実		くらそま	暗がり
かんづける	責任転嫁する		くろ	田んぼの畦
かんじる	冷え込む		ぐんぐど	気を揉ませる
かんにぇ	食べれない		けぶたい	煙っぽい
がんごら	空洞		げんどくさい	胡散臭い

【こ】			【し】	
こいしょいかご	背負い籠		しゃえっこ	おせっかい
こしゃう	作る		しゃなる	大きな声で呼ぶ
こがえに	こんなに		しゃっぽ	頭にかぶる物
ごだみごり	濁流		じゃみる	だだこねる
こちょくったい	くすぐったい		じょさね	容易
こっぴどぐ	大変ひどく		しょだれ	よだれかけ
こわえぇ	疲れた		しょうしぃ	恥ずかしい
こずげな	こんなもの（蔑視）		しきたれ	臆病者
ごっしゃぐ	怒る		しんぽれ	枝の末端
こっぺ	余計な口出し		【す】	
こっぱやぐ	朝早く		ずほこく	嘘をつく
このげ	眉毛		ずべら	でたらめ
こだえる	耐える		ずぐなし	不器用
こんげに	こんなに		すっこかぶり	頬被り
こればり	これっぽっち（少量）		すこだま	いっぱい
こんげに	こんなに（多量）		すっかい	すっぱい
こんびん	あたま		するすびき	籾摺り（農作業）
こげだ	凍みる		ずんぼげる	落水し腰下が濡れる
こんもりこ	子守り		【せ】	
【さ】			せつけなもの	そんなもの（卑下）
さすけね	かまいませんよ		せんどな	この前
さっけな	先ほど		【そ】	
さんぴん	からかった子の呼び方		そばえる	甘える
ざんま	様子		そらね	甲斐がない
【し】			そらほど	そんなに
しゃえっこ	世話焼き		そんげなもの	つまんないもの
しくれんじ	傷物		そねむ	うらやましがる
しっきたれ	根性なし		そだす	損傷する
しったぎ	唾		そんぴん	ひねくれ者
しな	死米		【た】	
しゃっぺ	おませな		だいきり	全く
しゃます	もてあます		だいもじ	建築用の木を山から運ぶ
しやぎはる	迷惑なお調子者		たがぐ	持つ

【た】			【の】	
だで	うっとしい、嫌		のんべに	度々
だっか	段		【は】	
たがじょう	地下足袋		はぎる	仲間に入れない
だみ	葬式		ばっこ	糞
【て】			ばぐさる	何もせず漠然としている
てごご	補助する		はらくっちぇ	満腹
でっこに	最初に		ばんきり	いつでも
てまだれ	手間つぶし		【ひ】	
でほだれ	でたらめ		ひしゃみづける	はたきつける
てんぽ	嘘		びじゃ	水溜り
【と】			びったらごぃ	平べったい
とぎな	たわし		びっじゅぐだがり	臆病者
どごさが	不明な場所		ひして	一日中
とっかばす	取り返す		ひっこじる	捻挫
とっき	慌てる		ひょえら	不意に
どだっぱい	不恰好で暖を取る		【ふ】	
とっぱじげ	手違い		ぶさだ	粗末
どふら	雪の落とし穴		ぶっつぐ	倒れ着く
とろぺづ	だらだらといつまでも		ぶっちげたっちげ	互い違いに
【な】			ふんごぐる	蹴る
ながまる	長々と寝る		ぶんむぐる	まくり転がす、こぼす
なじょだ	どうですか		ふんぬげ	まぬけ
なしてや	どうして		【へ】	
【に】			へずる	斜面を水平に移動する
にしゃ	お前さん		へんくさ	カメムシ
にげ	苦い		【ほ】	
【ぬ】			ほだ	そうだ
ぬれびっちょ	ずぶ濡れ		ほだわら	雪原
【ね】			ほえど	物乞い
ねくたれ	ばかげたこと		ほごる	遊び騒ぐ
ねそける	寝そびれる		ほだら	そうしたら
ねっちょ	凝り性		ほだぞ	本当だよ
ねぶかき	居眠り		ほして	そして

【ほ】	
ぼっこす	破壊する
ほろける	ボケる
ほろぐ	叩く
ほまじ	へそくり
ぼいだす	追い出す
ぼんこ	背中を丸める
【ま】	
まえす	ごまをする
まきこき	一生懸命
ままなぐ	どもる
まよう	弁償する
まるぬげ	そっくりそのまま
まっと	もっと
【む】	
むさずる	いたずらする
むじる	曲がる
むじれる	人見知りする
むぐす	失禁する
むごさえ	健気に、可哀想に
めめず	みみず
めねぐした	おねしょした
【も】	
もうまい	気が動転する
もっける	物が倒れる
もぞかだる	意味不明な事を話す
もごせ	健気に、可哀想に
もんぼれる	痴呆症になる
【や】	
やいぐりむごう	ずいぶんと遠く
やんだ	嫌だ
【ゆ】	
ゆっつばぐ	結いつける
【よ】	
よっぴで	夜通し

【よ】	
よぐたがり	欲張り
よござった	よくいらっしゃいました
よわり	夜勤
【わ】	
わっさする	いたずらにいじる
わらわら	大急ぎで
【ん】	
んめ	うまい
んだ	そうだ
んだばよ	それならば
んだら	それでは
んでね	そうじゃない
んだがした	そうかなあ

はじめ小国町の方言と限定していましたが、その検証が難しく、置賜地区という枠での調査となりました。年の離れているご年配の方を中心にお聞きしたので、はじめ自分たちはあまり分からないかもしれないという不安があったのですが、話している内に「それ方言だよ」などと指摘され、普段意識せずに使っている言葉がいくつもあり、あまりにも生活に溶け込んでいることに驚きました。

とくに「ん」で始まること言葉がいくつもあることに興味が沸きました。そして、場所や仕草など細かい条件のもとで限定されて使う珍しい言葉もあり楽しく方言を収集することができました。小国町は山間部ということもあり山菜が豊富です。夏はワラビが育ち、秋にはキノコを収穫できます。そのせいか山（天気）に関するものや食に関する言葉が多いように感じました。ある言葉の代わりになるだけではなく、その状態と状態の中間といった意味合いを指すような方言も存在し、奥深さを知ることができました。

６．言い伝え集（かるた読み札）

	生活の言い伝え（上段） かるたの読み札（下段）
あ	夜、爪を切る時は「たかのつめ」を３回言わないと不幸が訪れる。 【合言葉　夜のつめ切り　たかのつめ】
い	朝の蜘蛛は逃がしてよいが、夜の蜘蛛は成敗する。 【いい予感　朝蜘蛛逃がして　ラッキーディ】
う	上の歯が抜けたら家の（縁の）下に投げる。 【上の歯が　抜けたら下に　投げましょう】
え	カラスの羽を見たら「えんがちょう」を３回すると幸せが訪れる。 【えんがちょう　カラスの羽を　見たらする】
お	新しい靴は葬式の時に履き下ろす。 【お葬式　靴の新品　履いていい】
か	からすが夜鳴くのは不吉である。 【カラスらの　夜鳴きは不吉だ　注意せよ】
き	集合時の写真撮影などの際、真ん中に入る人は短命になる。 【気をつけろ　写真の真ん中　あぶないよ】
く	夜に黒猫を見ると不吉なことが起こる。 【黒ねこだ　縁起が悪いぞ　すぐ逃げろ】
け	椿はお見舞いに持っていってはいけない。（花（首）がとれる） 【決してね　お見舞いに椿は　持ってかない】
こ	ごはんを残すと（食べ物を粗末にすると）目が見えなくなる。 【ごはんをね　残すと天罰　目が見えない】
さ	アジサイやあやめが咲くと梅雨に入る。 【咲いている　アジサイ・あやめは　梅雨サイン】
し	新聞や紙を踏むと足に怪我をする。 【新聞を　足でふむと　ケガするぞ】
す	ねぎを食べると頭が良くなる。 【スーとね　頭が冴える　ねぎ食べよ】
せ	カレンダーを踏んではいけない。 【ぜったいに　踏んではいけない　カレンダー】
そ	葬式の家の前を通る時は、親指を隠さないと親不孝になる 【葬式に　親指隠さず　親不孝】
た	お墓で団子を食べると風邪をひかない。 【団子をね　お墓で食べると　風邪ひかない】
ち	朝茶は２杯飲む。 【茶を飲むは　朝にかぎり　お代わりを】
つ	つばめが低空飛行をすると雨が降る。 【ツバメがね　低く飛ぶと　雨が降る】
て	災難よけに梅干しを食べる。 【出かけるの？　災難よけに　うめ食べろ】
と	鳥の羽根を見たら「３回まわってごめんなさい」をする。 【鳥の羽根　見たらみまわり（３回り）ごめんなさい】
な	南天は縁起がいい。 【南天は　なんだかとても　縁起がいい】
に	午後から新しい靴を履く際には、靴を鍋の底に擦りつけてから履く。 【ニューシューズ　アフタータイムは　鍋すりよ】
ぬ	下の歯が抜けたら屋根の上に投げる。 【抜けちゃった　下の歯だったら　屋根の上】
ね	猫が耳をこすると天気がいい。 【ねここ（猫たち）がね　耳をこすると　晴れちゃうぞ】

の	土曜日は土いじり（農作業）してはダメ。
	【農作業　土曜日しては　いけません】
は	ハチに似た虫が出ると雪が降り始める。
	【ハチに似た　虫が出ると　雪が降る】
ひ	冷たい水にお湯を入れてはいけない。
	【冷や水に　熱湯入れちゃ　ダメダメよ】
ふ	怪我をした所が痛くなると次の日雨が降る。
	【古傷が　悲鳴をあげたら　雨前兆】
へ	へんくさ（カメムシ）が多い年は雪が多く降る。
	【へんくさが　多い年は　雪多い】
ほ	蛇の夢を見るとお金が集まる。
	【本当に？　夢に蛇出る　お金持ち】
ま	朝の虹を見ると雨が降る。
	【マジですか？　朝虹見ると　雨が降る】
み	ミミズの皮は解熱作用がある。
	【ミミズスキン　煎じて飲むと　熱下がる】
む	飯豊山の雪形が牛の形になると種を蒔く時期。
	【昔から　飯豊山見て　種を蒔く】
め	夜爪を切ると、親の死に目にあえない。　（夜爪→世詰め→短命）
	【目が点だ　夜の爪切り　親不孝】
も	妊婦の腹がとがっていると男の子。妊婦の腹がまるまっていると女の子。
	【盛り上がり　おなかの形で　男女別】
や	カラスがしんみり鳴くと人が亡くなる。
	【やな予感　変な鳴き方　人が逝く】
ゆ	雪が少ないと山菜があまり取れない。
	【雪少ない　大好きな山菜　取れないよ】
よ	夜、口笛をふくとドロボーと蛇が出る。
	【夜笛でね　ドロボーとへびを　プレゼント】
ら	吾妻山の雷は雨を持たない。
	【雷雲は　雷落とすが　雨降らず】
り	妊婦の顔が険しいと男の子。
	【凛々し顔　たぶん赤ちゃん　男の子】
る	女の人が（トイレを）掃除すると綺麗な女の子が生まれる。
	【ルームケア　産むと綺麗な　女の子】
れ	猫が顔をこすると雨が降る。
	【歴然だ　猫の洗顔　雨降らす】
ろ	幼児にミルクと果物（ジュース）を一緒に飲ませてはいけない。
	【論外だ　幼児にジュースは　飲ますのは】
わ	障子戸や畳などの仕切りは踏んではいけない。
	【わーダメダメ　畳の仕切りは　踏んじゃだめ】
を	葬式の時、朝茶は一杯だけ飲む。
	【輪を乱す？　葬式の際は　茶は一杯】
ん	仏壇に生臭いものはあげない。
	【んっ？臭い　生もの仏壇　にはあげない】

７．語り部さんの語り

話　後藤弘子さん

きつねのほうしょうの玉
昔あったけど。やれ昔、越後の安田ていう所に「せんにむ」という家あったけど。じいと、ばばの二人暮らしであったど。 　ある日、爺は山さ木切りにいって、昼飯食って一服していたば向うの方から、きつね何か白い物くわい【咥えて】でくるから、じさ【爺】は木の陰さ隠れて待っていたどやれ。じさの前さ来た頃、「やあっ」といってじさとび出はった【飛び出た】じもの。そうしっど【そうすると】、きつねのちくしょうたまげて、【小狐は驚いて】「くわぇーん」と一声吼えて、とび上がったど。その時、きつねは、口さくわえっだ物おどして【咥えていたものを落として】、一目散に山さにげで【逃げて】いってしまったどやれ。 　じさ、その白い物拾ってみだば、何だが毛のかたまりのような物だじもの。 「これこそきつねのほうしょう玉だなあ・・・」 と思って家さ持って来て、ばばと二人で、誰にも見せないで、しまっておいだど。 　きつねの方では、大事な玉をなくして、人をだます事もできなくなってしまって困ったじもの。うまいあんばいにばけらんなくて【上手に化けることが出来ずに】、どうしたらいいがど、二、三日考えだど。そのうちに考えついだじもの。じさの娘に子供生まれる事さ気づいたきつねは、村の若いもんにばけて安田の家さ来たど。そして若い者の言うには「じさじさ娘子お産始めだど。なかなか難産で、子供もてないがら占ってもらったば、これは、じさの持っているきつねのほうしょうの玉をなめさえすればすぐ子供は生まれるって言わっだがら、はやく、それ持って行ってくれ。じさ足がおそいがら、おれ、それ持って先に行くから、じさ後からゆっくり来いちゃ。」ていうど今まで誰にも見せた事のない、ほうしょうの玉を出してきて、「はやく、はやく、走って行ってくれ。おれど、ばば、ゆっくり行くから。これなめさせたら、おら行くまでに、孫が出ているがら。」と言って、べろりきつねにだまされでしまって、宝物はなしてしまったじもの。じさとばばは、娘の所さ行ったば、たまごに目はな付けたようなめんごい子【かわいい子ども】が生まれたといって、大喜びのところであったど。 「早く、じさだいてみれ」【じいさん抱いてみろ】 っていうがら、じさがら先にだいて、こんどは、ばばにだがせだど。ばばは、 「じさそっくりだ。」って言うじもの。「いや、いや、この子は、ばばそっくりだ。」 って言って二人でやるから、とるやら【代わる代わる】何べんもしている内に、子どもだち来たじもの。一人の子供は、橋の下をのぞくと、じさとばば二人で、まるこい石をやったりとったり、「じさににた」「いや、ばばににた」と言っていたけど。 　あんまり子供にわらわっだば【笑われ】、はっと目がさめたようだけじか、橋の下にいで、石ころ、やったりとったりしていであったど。 　「やれやれ、きつねにあだかえされた」【仇をかえされた】 と言って、家さ帰ったば、ほうしょうの玉がながったど・・・。 　きつねのあだがえしって、まことにおそろしい。 　トンピンカラリン虫くった。

小豆婆さ（あずきばばさ）

昔あったけど。

北国の折戸っていうところに私はずっと木々掃いていて、そしてそこに、そこから三面（みおもて）っていうとこさ通じる道あったんだ。そこの途中に、朴ノ木（ほおぬき）沢っていう沢あって、その沢の辺りは、おっきい木があるからいつ行ってもうす暗くて、日が照ってても暗い不気味なとなんだ。

したら、あるとき村の人たちが

「なんだかこの頃よぉ変な噂聞いたども、おめぇ聞かねが」ってこういうんだ

「いろんな噂だ」っていう

「あのよ、朴ノ木沢の辺りさ行くどよ

「うち米あるとも小豆ねぇ」っていう声聞こえるんだぜぇって言うなんだとさ

「うち米あるとも小豆ねぇ、小豆くれぇ」って言うんだとさ

そういう声がだーーっと聞こえてくるんだとさ、そしたら

「いやぁ、おらも聞いてらった」

「おらも聞いてらった」

そんな噂がずっといっぱい広まったなかで、子どもたちが夕方暗くなるまで遊んでいると

「小豆とぎ（研ぎ）ばばさ、くっぞ（来るぞ）」

っていうと皆、家の中さ入んなんだけ。

そんなことをしていたある日、旅人がずっとその道来たんだけ、そうしたら、朴ノ木沢とこさ来たら、沢のとこに小豆がぽろぽろ落ちてくるので不思議だなと思ったど。

なんでこんなとさ小豆あるんだべなと思っていたら、小豆がひゅるひゅると、動くなんだとさ、そしたらするすると動くもんだから、旅人はその小豆を追っかけて行ったら、草の中に入っていった。

変に思って覗くと、ちょうど入っていったとこに石像があった。気持ち悪いと思い、くるっと後ろ向きになって逃げようとしたら、小豆が旅人を追いかけするすると来るんだとさ、旅人がはっと後ろを振り向くと、ピタッととまるんだと。いやぁ、おっかねおっかね、どっか隠れっとこねぇかなと思っていると、ちょうどそこさ、小屋こやっこがあったんだけ、その小屋っこさ、たたたっと入っていったど。

ピタッと戸を閉めて、そこさ隠れたっけ、すると、ガタガタガタっガタガタガタっと音するんだとさ。いやぁおっかねなと思っていたっけ、そのうちにピタッと音がしなくなった。

あれ、小豆いねくなったかな？と思って、そうして旅人が、戸を少し開けたら、小さい小屋の周りさ、ピカピカピカピカピカっと、いっぱい小豆が光るんだど。

いやぁ、おっかねぇと、また戸をばたっと閉めると、小豆とぎばばさの声が聞こえてきたんだ「小豆とごぉか米とごぉか、それとも蛇を出す気にしとこうか」っていう。

さぁ、おっかないおっかないって思っていたら、また、戸がガタガタっとなったかと思ったら旅の人を小豆とぎばばさが食べてしまった。食べらっていうことはつまり殺されてしまった。ってことだな。

そんな話がギイッと噂になっていたんだど。そしていたらそんな噂があって、そこは「誰も通りたぐねぇなあ」とみんなが思っていた。

ある時、折戸の若い人一人、母親と若い人二人暮らしだったど、若い人に、母ちゃんが、

「ごめんよ、西表さ小豆届けねばなんねなんよ、西表さ小豆届けねばなんねから、お前まず、あずきとどてきてくんねが。」って頼んだど。そうしたら若い人が

「困ったなあ」と思ったども

「やんだ」っていってらんにぇ、母ちゃんのために「やんだ」って言わんねがら行かねばなんねなあと思って、そして

「じゃあ、母ちゃん、いってくっがぁ」って言って、小豆しょって、暗ぐなんねうちに早く来るようにと思って、どんどんどんどん行ったど。

ちょうど、朴ノ木沢の近くさいったば、ついにあの声が聞こえてきたど

「道の木とごうか小豆とごうか小豆まえー、小豆くれー」って。

その音が本当に聞こえてきたと知って

「ああっ、聞こえてきた」と思って

「おっかね」

その若い人は村一番の臆病者の若い人じゃったけど、そうしたら小豆をぽーんとそさ投げて、どんどんどんどんと、家の方さ走って帰って来た。そして折戸の人たちさ、みんなさ

「あの噂はほんとだ、今、俺聞いてきたもの」といった。

次の日、折戸の人みんな総出で行って、朴ノ木沢の所で、その若い人が投げた小豆は、ひとっ粒もなかったど。あったのは、豆を入れていた袋だけが、ぽかーっと口をあけて、あったっけどそれからというもの、小豆とぎばばさがどっかにいっから

「夜は早く寝て、夕方はいつまでも外にいらんねぞ」

と折戸の子どもたちに言って聞かせたとさ

トンピンカラリン虫くった。

「だいてんばこ」の石

昔あったけど

あるお寺の近くに大きな大きな沢が流れていた。川まで大きくないから、沢なんだ。すこーし小さいですけども、それでも普通の沢としては大きい方。そこに木の橋が架かっていて、橋のたもとでね、しくしくしくしく泣いている女の人がいたんですって。

「はぁ、なんで泣いているんでしょう」とそのお坊さんが聞いたんだって

「あなたはどうしてここで泣いているんですか」って、

「私は旅をしてここまで参りました。この沢を渡って向こう岸に行きたいんだけども、とてもこの細い橋を渡ることが、私にはできない」ってさてどうしよう。この女の人は橋を渡ってどうしても向こうへ行かなくてはいけない、自分は渡してあげたいけれども修業の身ですから、お坊さんは昔は女性と手を触れたり、それから女の人をおんぶして向こう岸に渡すなんて事はとてもできない。そこでよく考えました。自分はいろんな所を回って歩いてきました。そしてその場所場所でみんなに世の中のいろいろなことを説教しては悩みを解決してまいりました。そして今、向こう岸にどうしても行かなくてはならないという女の人がここにいる。

「自分はこの女の人を助けるっていうことが使命だ。」と、この修業僧は衣に女の人をすっかりと包んで、そして自分で背負って渡してあげました。すると女の人は

「ここから、今来た道を戻らなければいけないと思っていました。本当にありがとうございました。」とお坊さんにお礼を言いました。

お坊さんは、

「自分は本当はそういう事をしてはいけなかったんだけど、人の悩んでいること、助けてあげることが自分の使命だと思って。」と告げ、女の人と別れました。

あの人はとても綺麗な人であった。また心の優しい人であろうと思いました。それからというもの、修行をしていてもずっとその女の人のことを考えるようになっていました。「今、あの女の人はどこへ居るんでしょうか」「今どうしているんでしょうか」と

だいてんばこと言う場所に来ては毎日悩んでいたそうです。それはもう来る日も来る日もずっとですよ。

そうして悩みつづけていたら、ついにお坊さんの思いが石になってしまったんですって。お坊さんは石の神様になってしまったんだとさ。

トンピンカラリン虫くった。

８．言い伝え集（ものがたり）

玉川太郎と慶次之助
昔、津川村（現在小国町大滝の丸山）というところに、背は小さいが、とても足の速い慶次之助という若者がおりました。もう一人、玉川に住んでいる玉川太郎という、とても気が短い若者がいました。この２人は、互いに強いばっかりにいつもけんかばかりしていて、仲が良くありませんでした。 ある日、二人はばったり出会いました。いつも口が早くて、けんかの種を作るのは玉川太郎のほうでした。「やい、慶次之助、お前はなんと小粒なんだろう。そんな身体でよく豪傑だなんていわれるな。」怒った慶次之助は、「なんだと！お前はバカにでっかいのぅ！しかし身体ばかり大きくてなんにも役に立たないのう。」こんな事から、またまたいつものとおり、けんかが始まりました。 そして、二人が数時間問答をしているうちに、とうとう取っ組み合いのけんかを始めました。たちまち二人は着物を脱ぎ丸裸で勝負を争いましたが、どちらも無双の豪傑なので容易に勝負はつきませんでした。気の短い玉川太郎は「えい面倒くさい、どちらが強いか見せてやるわい」といってそばにあった大きな石を目よりも高く差し上げ慶次之助に投げつけようと相手めがけて投げました。 慶次之助は「なんだ、こんな石」とひょいと受けてそれを受けるな否や「それ、お返しだ」と小さな体で投げ返しました。玉川太郎はぶんぶん怒ってまた「これでも喰らえ」とふた抱えばかりもある大石を慶次之助めがけて投げつけました。慶次之助は「なんだこんな石」とひょいと受けたが、あまりの大きな石に少しよろめきました。 それでも「それお返しだ」と玉川太郎に投げ返しました。生まれつき、怒りっぽい玉川太郎はカンカンに怒って今度は３抱えばかりの大石を「うん！」と高く差し上げました。それを見た慶次之助は「これはたまらん」と逃げ出しました。「こら慶次之助。逃げるとは卑怯だぞ、まて」と玉川太郎は大石をかかえて後を追いかけました。 でも足の早い慶次之助にはとても追いつくことはできませんでした。そうしているうちに二人の間隔は数町離れてしまいました。火の玉の様に怒った玉川太郎は、遥か遠くから大石を力一杯投げつけました。大石は唸りをたてて飛んで、逃げる慶次之助のすぐ後ろで「ドシン」と落ちて地にめり込んでしまいました。 今も滝集落の入口にある１寸５尺程の石が、玉川太郎の投げた石だと言われています。そして慶次之助は丸山の麓にある奥行が百間あろうかという岩穴の中に隠れたので命は助かりましたが、それ以来慶次之助は玉川太郎を恐れてその岩穴から一生出なかったと言われています。その岩穴を「慶次の穴」と呼んでおり、その前には慶次之助を奉った神社が今も残っています。 そして滝集落の丸山の付近には。藤と萩が１本も生えないのは、このけんかの際に慶次之助が穴へ逃げ込むとき、あまりに慌てて走ったので山の中の藤という藤、萩という萩に足をひっかけて全部根こそぎにしてしまったということです。それ以来、丸山には藤も萩も生えないと言われています。

高鼻峠の大蛇（蛇）

小国町から杉沢へ行く街道に高鼻峠があって、その南口に小阿弥陀という所があります。昔、この田畑一帯を「丸屋」の家号で耕作していました。ある年の春、田んぼで働いている若衆のところへ、女中が昼食を届けに行こうと高鼻峠のヨシ沼のそばを通りかかると、若くとても素敵な美男子な男がいて、「ここで遊んでいかないか」と引き止めました。

女中は急ぐからと言って断ったけれども男は、ちょっとでいいからと言って聞きませんでした。仕方なしに帰りに遊んで行くからと言って逃げようとすると男は「約束の印として何か置いていけ」と言うのでした。女中は別に何とも思わないので自分の被っていた豆絞りの手拭いを渡し、すっかり道草をくってしまったと大急ぎで小阿弥陀へ向いました。

弁当を届けた女中は、さっきの約束事をすっかり忘れて沼の側を通ろうとした時、やぶの中に大きな蛇が、さっき自分の渡した豆絞りの手拭いを頭にのせ、とぐろを巻いてぐうぐう眠っているのを見つけました。すっかり驚いた女中は、小阿弥陀まで一目散で逃げ帰り、若衆に今までのいきさつを話しました。それを聞いた若衆は、手に手に鍬や鎌を持って沼にかけつけ、大蛇を退治してしまいました。若衆は、一番近くにある経塚山に大蛇を埋めることに決めたものの、あまりに大きくて運ぶ事が出来ないので、７つに切って背負い上り埋めたと云われています。

現在も経塚山には、その大蛇を祭った社があります。高鼻峠のヨシ沼の主は、夫婦蛇であったが男蛇が殺された後、女蛇は百子沢のある沼の主の許婚（いいなずけ）に嫁いだという。雨のしとしとと降る夜、蛇の目傘をさして行く大蛇の嫁入り姿を杉沢の人々は見て、その翌朝大蛇の通った道の草が倒れていたと言われています。

五色の大蛇（蛇）

昔、町原の金昆羅山に八木九郎右エ門という豪族が住んでいた。又、松岡の字金右ェ門沢の山には九郎右エ門の甥にあたる畠金右エ門という者が住んでいて、長く勢力を争っていた。

ある年の春、畠家の住んでいた山が、七日七晩山鳴りがして地割れをおこし、崖が崩れた。その時山の上にあった畠家の大きな石の祠堂の屋敷鎮守がくずれ落ち、麓に出来た深い地割れの中へすっぽりと入ってしまった。するとその中から五色に輝いた美しい大蛇が現れて、近くの三光田沢へ登って行った。　当時このあたりは深い林で、沢水の量も豊であった。大蛇はこの沢の奥の黒岩滝の下まで登ったが、行く手が高い岩にさえぎられているので、しばらく落ち込む滝水と岩の間に身を隠していた。そこへ、松岡の谷四郎というものが通りかかり、滝壺が異様に輝いているので、不思議に思って中を覗くと、五色の大蛇が居るのを見つけた。驚いて松岡に下り、大勢の村人を連れて再び来てみると、大蛇は死んで滝壺にさらされていた。大蛇は人に姿を見られたので昇天の術を失い、天に昇って竜になることができなくなったから死んだのであると言われています。村人は、大蛇の死骸を滝壺からわずか下った沢のほとりに葬った。

この事があってから、谷四郎は発狂してしまい黒沢の沢の中で死んだ。今もその沢を谷四郎と呼ばれ、死んだ後もこの一家には不幸な事ばかり続いたので、大蛇を葬った場所に碑を建て水神様とし祭った。今でも大蛇が死んだ５月５日には、五色の梵天と赤飯を供えてお祭りをする。五色の大蛇が出てから畠家の勢は衰え、金右エ門は八木家の手下に殺されてしまったそうです。

伊佐領の熊（熊）

伊佐領字箱の口集落の南東にある丘に「山の神」神社が祭られています。その近くに、高橋家によって祭られた「熊の神」という石碑があります。これは、その熊の神に伝わる物事です。

昔、箱の口の高橋家の一人が猟人をしていました。このころ熊射ちをする時には、何日も山奥にとどまり熊のいそうな所を、回って歩かなければなりませんでした。ある時、この猟人が集落から相当離れた山奥へ一人で熊射ちに出かけました。猟人が山に来てから三日にもなるのに熊はおろか足跡さえも見つかりません。三日目の日も何の獲物もとれないうちに、その日も暮れようとしていました。「ああ今日もだめか、それでは今夜泊る場所でも捜して、寝ることにするか、くたびれたわい。」と猟人は一人ごとを言いながら、その場に「どっこい」と腰をおろしました。とその時です。突然、カサカサと何かの歩くような、走るような物音を耳にしました。経験から猟人は、とっさに「獲物だ」を悟り反射的に置いてあった鉄砲に手をかけました。猟人は、目をキラキラ光らせながら鉄砲を持って身がまえ、その音のする方向にじっと目をすえていると、何とそれは、今までに見たことのない立派な大熊が目の前の尾根をゆっくりと登っているのではありませんか。猟人は、「これはしめた」とばかり引き金を引こうとした時もことです。自分は鉄砲で狙われていることを感じた大熊は、別に慌てた素振りも見せず、じっと猟人の方を睨みつけました。さすがの猟人も、その目の鋭さには、全身がブルブルと震えだしました。猟人は「何くそ、こん畜生」とじっと睨みかえしました。

その時この大熊は、どうしたことか猟人に見てくれと言わんばかりに両手を挙げてその場に二本足で立ったのです。それを見た猟人は「おっ」と驚きの声をあげてしまいました。それもそのはず、その熊はつま白だったのです。つま白という熊は両手の手の平の部分が真白になっており、当時の人々や猟人仲間では、山の神の使いとして撃つことを固く禁じられていたからです。そしてこの熊は人間には決して危害を加えないと信じられていました。

これを見てしまった猟人はどうしようかと迷ってしまいました。連日の不猟で、いらだっていた猟人に良心が「せっかくの獲物だが、つま白では殺せない。次の獲物を待とう。」と言いました。すると心の中の悪魔が「何言っているんだ。こんな見事な熊を見逃してしまったら二度とチャンスはこないだろう。だから思い切って撃ってしまえ。」と囁きかけるのでした。

良心・悪魔は猟人の頭の中でぐるぐる回るのでした。このような場合、人間はともすると悪魔のいいなりになりそうなものですが、この猟人もその一人でした。「そうだ、今ここでこのつま白を撃ったところで、どうせこんな山奥だ。誰も見ているはずがない。殺してからその場でつま白の部分の皮をはぎ取れば、誰も気がつくまい。」と、とうとう悪魔の誘惑に負け、撃つ決心をしました。鉄砲の引き金に力を入れると「ダーン」と暮れかかった山々にこだまして猟人の撃った弾丸は、見事熊に命中しました。その時撃たれた熊は、一瞬猟人を睨みつけたかと思うと「ウオー」と一声あげるやいなや下の谷川に転がり落ちていきました。

猟人は体をのり出して谷川の滝つぼに落ちた熊を見届けると「これはしめた」と高鳴る胸を押さえながら谷川へ走るようにして下っていきました。

息を切らんばかりにしてたどり着いてみると何と不思議な事に、そこには熊の姿はもちろん熊の落ちた形跡一つありませんでした。ただ澄み切った水が何事もなかったかのように流れている

ばかりでした。

猟人は半分恐ろしくなって「こんなバカなことがあってたまるものか。この目でしかと見届けたのだ。」と自分の目を疑うようにして、辺りを何回も見回しました。しかし幾度見ようとも、熊の姿は見当たりませんでした。

その時猟人はある物を見てハッとしました。それはさっき落ちたはずの滝つぼの美しい水の中に、つま白の熊と非常によく似た小さな石が一つコロンと転がっていたからです。恐る恐る近寄って、その石を手にした猟人は、見る見る中に顔の色を失ってしまいました。見れば見るほどその石は、自分が撃ったはずの熊に見えてくるのです。

猟人はヘナヘナとその場にしゃがみ込み「ああ、俺は何てことをしてしまったのだろう。撃っては悪い熊を殺したので、神様がこの石を熊の身代わりにしたに違いない。後できっと祟りがあるだろう。ああ俺はどうすればいいんだ。」と何かにすがりたい気持いっぱいつぶやくのでした。

しばらくしてこうなったら、いさぎよく神様に謝ろうと自分に言い聞かせ「山の神様、山の神様、どうぞ愚かな私をお許し下さい。私は本当に悪いことをしてしまいました。自分の良心に勝てなかった男です。せめてもの罪滅ぼしに、この石の熊を一生大事に奉ります。そして以後、猟人をやめ熊の肉は一切食べないことを誓います。ですからどうぞ私をお許し下さい。」と何回も何回も同じこと繰り返して深く頭を垂れるのでした。

その翌日さっそく猟人は、その石を持ち帰り、現在の「山の神」神社の近くに埋めて熊の神として奉りました。この熊の神は、石碑が立てられており、高橋家では、今もって年に一度必ずお祭りをしているそうです。

それ以降、高橋家では集落で熊狩りがあってもそれには参加しないで、集落でとった熊も家の中では絶対食べないということです。代々そのように伝承されてきたからであり、いまだに高橋家にこの伝説が信じられているからです。

長者原の大蛇の話し（蛇）
（三角山）別名（雨乞い山）の麓にある長者原は、今でこそ人が住み米の実のなる田んぼが多くあるが、その昔は大きな大きな沼だったそうです。 その池は限りなく深く、青黒くよどんだ水の中からは時々白い角を持つ大蛇が頭をもたげ、里人からは「沼主」と恐れられていました。 その辺にはよし草が茂り、苔のむした大岩がゴロゴロ横たわり、誠に気味の悪い事はこの上なく誰一人として足を入れたことのない所でありました。 里人達が最もこの白い角を持つ大蛇を恐れるのは、秋の取り入れの時です。 里人がせっかく苦労して実らせた稲に、ごろりと横のなって昼寝をしたり又、昼寝から目をさましては人家に頭をつっこんで家ごと持ち上げたりして遊んでいたのです。 遊び疲れて腹をすかすと、こんどは手当たり次第に赤ん坊や子供を飲み込んでしまい、とにかく里人達はおちおち仕事をしている事ができませんでした。 ある時どこから来たかわからないが、（小玉川）へ行くという旅人が一人道に迷ってこの沼のあたりを歩いていました。するとこの沼の主、白い角を持つ大蛇が十重二十重にとぐろを巻いて昼寝をしているのにぶつかりました。 すっかり驚いて逃げようとすると旅人を丁度目を覚した大蛇が、昼寝後の腹ごしらえとばかり猛然と襲いかかりました。 肝をつぶして驚いた旅人はもうだめだと思い、日頃信ずる飯豊権現様にせめてもの御祈りをしようと手を合わせて目を閉じました。 すると不思議なことに大蛇は襲いかかるのをピッタリとやめ「オレは生まれながらにしてタバコのヤニが嫌いなのだ。お前を助けてやるからこのことは誰にも話すなよ。もし話せば命はないぞ。」と言いそのまま沼の中へごボゴボと入ってしまいました。危い身をのがれたのも飯豊の権現様のおかげと後に１週間山に籠り、社の土台を直してやったそうです。旅人は道々を考えて、「こんな恐ろしい大蛇が住んでいる限り世の中の人々は幸せに暮せない。」と思い、今大蛇に聞いた一番嫌いな物というタバコのヤニのことを小玉川の村の衆に語って聞かせました。 小玉川にはそのずっと昔から腕ききの狩人が十１３人も住んでいて、 「何とかして大蛇を仕とめたい。しかしただ弓を射て、まともに向かっただけでは敗けてしまう。何かいい方法はないものか。」 と手ぐすねひいていた。旅人からその話を聞くと、「しめた」と思い、 「よし、ひとつオレ達がその白い角をもつ大蛇を退治してやろう」ということに決まりました。 そこで１３人の狩り人達は、タバコのヤニを沢山背負い勇んで村を出発しました。沼の辺に着くと、さっそくたき火をして待つこと一昼夜、沼の水面は相も変わらず青黒くよどんでいました。ついに、七日七晩交代で寝ずの番をし、今か今かと待っていました。そしてその７日目の晩に、突然ガボガボと水面を割って沫を上げ白い角をふりたてた大蛇のかま首がガッキと持ち上げられました。それっとばかり１３人の狩り人は、タバコのヤニのベットリついた矢をつがえ、きりきりと弓を引きしぼり一勢にヒュツと放ちました。さすがに白い角をもつ大蛇でも、１３人のしかも一番嫌いなヤニのついた矢を射こまれたのではたまったものではなかったのです。

しめじ（山菜）

昔、小国の国蔵様を通る道（現在では松岡を通る道）をさらに奥に進むと山の麓に三軒の家がありました。その中の一軒の家には、とても親孝行の息子とその母親の二人が貧しいながらもたいへんつつましく暮しておりました。

ところがある日、突然その家の母親が、今までの苦労が重なり倒れてしまいました。息子は必死になつて母親の看病をしましたが、容体は良くなるどころか日増しに悪くなるばかりでした。

息子は心配で夜もろくに寝ないで、つきっきりであつかいました。そのため、家には食べ物らしいものは何もなくなってしまい、困り果てた息子は、近所に食べ物を少しでいいから分けてくれるよう何度も頼みましたが、親切に与えてくれる人は誰一人としてありませんでした.

かねがね息子は、山の奥に行くと沢山の茸の出る場所があることを聞いていました。しかし、その場所は、村人達の噂によると大きな角のある白い大蛇が常に横になって寝ていてその場所に近づくと大蛇に食われてしまうと言われていました。

誰もが大蛇を恐れてその場へ近寄りませんでした。息子は、「このままの状態でいたら二人とも餓死してしまう。けれども、そこへ行けば大蛇に食べられてしまう。ああ、私はどうしたらいいのだろう。」と一人で迷っていました。さんざん考えた末に、自分は何も食べなくとも、せめて病気の母親に食べさせないといつになっても病気は治らないと、息子はついに大蛇のいる場所に茸を採りに行くことを決心しました。翌日、まだうす暗いうちにこっそりと家を出ました。どこまで歩いてもその山は見当らず、半分あきらめに似た気持ちでとぼとぼと歩いていたが、腹の空いたのも手伝ってとうとう歩けなくなり、その場にしゃがみ込んでしまいました。日は遠慮なしに暮れようとし、その美しい夕日だけが息子を慰さめるかのようにいつまでも輝いていました。息子は母のことを気づかいながらもその美しく照り映えた夕日にじっと見とれていました。

しばらくして息子は、何の気なしに足元に目を落してびっくりしてしまいました。何とそこには、一面にじゅうたんを敷いたかのように、見事な茸がいっぱい生えているではありませんか。今までの疲れはどこへやら、息子は息をはずませながら一生懸命に採り続けました。

そのうちに手元が暗くなり気づいてみると日はとっぷりと暮れてしまい、家に帰る道さえわからなくなってしまいました。息子は「こんなにたくさん採ったのに家に帰れなくなってしまった。お母さんは心配してるだろうなあ」といいながらどうしようもなく、そこに野宿する事に決めました。くたくたに疲れて寝たものの母を心配するあまり夢を見ては幾度となく目を覚まし眠れないままに夜を明かしてしまいました。「さて今日はもう少し採ってから暗くならないうちに帰ろう」と思いながらまた上った時、驚きの声をあげてしまいました。

目の前に列を作って大きな立派な「しめじ」が自分の目を疑うほど沢山生えていたからです。息子は、今までの茸を捨てこの立派なしめじを採れるだけ採って大喜びで家に帰りました。

早速親にその茸を食べさせました。母親は涙を流して我が子に感謝し、病気もすっかり良くなって親子そろってささやかながらも、幸福に暮したと言われています。

村人の見た白い角のある大蛇とは、この立流な茸の群れだったのです。

神様はこの茸の群れを村人には大蛇に見えるようにして親孝行の息子には茸のある場所に導いてくれたのだと言われています。

石ませ（馬）

昔、山また山に囲まれた金目集落の夜の出来事。夜もふけ集落中が寝静まった頃、集落の一人の若者が、せっせと夜仕事をやっていました。仕事を終った若者は「どれ仕事もちょうどきりがついたから寝るとするか。」と一人ごとを言いながら、戸締りをしようと外に出た時です。若者は、なにげなく満月の光に照らされた集落の近くの山に目をやった時、突然その山の裾を、ボーと幻のように一頭の白馬があらわれました。「おや？何だろう、今頃の時刻にまさか、夢なのだろうか」。と不思議に思いながら幻のように現れた白馬をじっと見ていると、今度は、幻のようにボーと消えていくではありませんか。若者は驚きました。「これは、どうしたことだろう、白馬が現れたり消えたりして・・」と薄気味悪くなってきました。しかし、人間というものはこうなると、その正体を知りたがるものでこの若者は一層その事に興味が出てきてその附近をじっと見まわしていました。すると今度は、さきほど山のそでで幻のように消えた、あの白馬が山の項上にボーとまた幻の如く現われてきました。そして、じっと集落を見下ろしていました。さっきから見ていた若者は「これは何ちゅう事だろう、白馬が山の下に現われて消えたと思ったらこんどは山の頂上に現われて、そしてこっちを見てやがる」と一人ごとを言いながら見ているとボーと白馬は幻のように消えて見えなくなりました。若者は、今度はどこに現れるのかとあちらこちら見まわしたが、その晩は現われませんでした。

次の日若者は昨夜の不思議な出来事を、村の人々に話しましたが、村人達は「夜の夜中に白馬か現われて消えたと思ったら、山のてっぺんに現われるなどとんでもない。おまえは寝ぼけて夢でも見ていたんだろう、人を驚かすにもほどがある」と誰一人として信じてくれる者はありませんでした。だれにも信じてもらえなかった若者は、「そうだ、もしかしたらまた夜になると現われるかも知れない。」と次の晩から夜が更けてくると、じっと集落の近くの山々を見まわしつづけました。

次の日も次の日も、しかしついに白馬は現われませんでした。そして数日たって、また満月の夜、若者はじっと山を見ていると、最初の晩のようにボーと白馬が現われてきました。消えては現われ、現われては消えながら、じっと集落を見下ろしていました。若者はその白馬を見ながら「やつめ、満月の晩になったらまた現われたな。あいつの正体は一体なんだろう」とつぶやきながら見ていると、その馬は突然大声でいななきました。すると集落に突然不思議な事がおこりました。というのは今の一声で集落に飼ってある馬という馬が突然狂ったように動き出し、馬屋から飛び出す始末です。

そして狂ったように飛び跳ねながら、さきほど音のした方へドッと走って行くのです。若者は「こりゃどうしたことだ、集落中の馬ちゅう馬が、みな走っていくじゃねえか。」と驚いて見ていると、今度は、山の項上に幻のように現われた白馬が空を飛ぶように山を下ってくるのです。

さあ集落中はハチの巣をつついたような騒ぎです。「おらの家の馬が逃げたよう」「おらの家の馬だあ」「あっちへ行ったぞ」「そら、山の上からおりてくる白い馬に向って走って行くじゃねえかあ」と集落中の人達が外に出てきました。

小屋から逃げた馬どもは、山から降りてきた幻の白馬を先頭に狂ったように田畑かまわず集落中をかけ走りました。集落の人々が見ている中を一晩中走りまわり、夜明け近くになると、今ま

で先頭になって走っていた白馬がボーと消えていきました。

するとどうしたことか、今まで狂ったように走りまわっていた馬々は、何事もなかったような顔をして自分の家に帰って来たのです。さて次の日集落の人々は大騒ぎです。夕べの白馬のおかげで田も畑もめちゃくちゃになってしまったのです。「ああ、せっかく実ったのに、相当だめになってしまった。」という声があちらこちらで聞かれました。それから後の満月の日も幻のような白馬は現われ集落の田畑を荒らしまわりました。集落の人々は、満月の度にこんなことが続いては、とんでもないことになってしまうとさっそくみんなで相談しました。その結果、いつもの馬が暴れて走りまわるところに石をならべて「ませ」を作ろうということに決まりました。次の日から早速その工事にかかり大きな石をならべて「石ませ」を作りました。

それ以後集落はこの幻の白馬からの害は免れ、再び平和がやってきました。そして、それ以後この石で「ませ」を作った場所を誰からともなく「石ませ」と呼ぶようになったと言われています。尚、現在もこの「石ませ」には大きな石がごろごろして、歩きにくくなっているそうです。

市野沢のかじかの（魚）

小国町市野沢地区に盛残川という川があります。

昔から、盛残川のかじか（川魚）は片目がつぶれている、と言い伝えられて来ました。なぜかじかの片目がつぶれたか、それにはさまざまな由来が語られています。

かつて、八幡太郎義家がこの地で戦ったことがありました。その時、戦い不利となった八幡太郎義家の軍はただひたすら逃げなければなりませんでした。当時この地方の山や野はあまりにひどい藪で、容易に逃げることができませんでした。そのため、義家の軍はこの盛残川に沿って逃げ上ったと言われています。この川に沢山住んでいた、かじかは、その際沢山の馬の脚に踏みつけられた為、とうとう片目を失ってしまったということです。

また、次のようなことも言われています。

やはり同じ時、八幡太郎義家の家来が川岸を歩いていて、１匹の大きなかじかを見つけました。彼はそのかじかに非常な興味を感じ、おもしろ半分にやりの石づきでかじかを刺しました。石づきはかじかの片方の目をついてしまいした。ところがこのかじかは、かじか仲間の大将（パパカジカ又はオバカジカというそうです。）だったのです。家来のかじか達は大将かじかが、片目になっのを大そう悲しみました。そして家来のかじか達は残らずこの大将に従って片目を落としてしまったのでした。今でも片目のない、かじかがいるのはこのためだということです。

また、このかじかについて別の言い伝えがあります。昔、源頼朝に追われた源義経が奥州に逃げて来た時でした。義経はこの盛残川を家来の弁慶と共に上ったのです。この時弁慶が手に持っていた、やりの石づきで面白がってかじかの片目をついたのだそうです。この川のかじかの片目がつぶれたのはこのためだとも言われています。

ネコまた（猫）
「ねこまた」というところは、手の子と間瀬の間にあります。そこにはこんな話が伝わっています。昔、そのねこまたに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある晩、手の子で芝居があるというので、おじいさんは見に行きました。おばあさんは１人で留守番していましたが退屈になったので、かたわらにいたネコに「じっちゃ（爺さん）は今頃、なんぼ面白がっていたんだか、なあ、三毛。」すると、ネコがおばあさんに、「ばっちゃ（婆さん）、今、じっちゃ見ている芝居とおんなじことして見せっから、誰にもゆわねでくれよ。（言いなさんな）」 と念を押して、今おじいさんがみている芝居と全く同じことをして見せました。驚いたのはおばあさんですが、誰にもいわないことをネコと固く約束しました。次の日、おじいさんが帰ってきて、その芝居の面白かったことを、おばあさんに教えようとしました。ネコとの約束を忘れたおばあさんはその芝居はこんな芝居だったのではなかったかと言ってネコに聞いた芝居の内容をうっかり言ってしまいました。おじいさんはびっくりして、おばあさんにどうしてその話を知っているか聞きました。ねことの約束を破った事に気がついたおばあさんは初めのうちはしゃべりませんでしたが、おじいさんに問いつめられ、ぽつりぽつりと話し出し全部しゃべってしまいました。その時ネコは、天井で目を光らせこれを聞いていていました。そして大雨の降るその晩、おばあさんは、ネコにかみ殺されてしまいました。おばあさんの葬式の時も、大嵐でした。 ネコは、大きな化けネコになっておばあさんの入っている、棺おけをさらっていってしまいました。それ以来、落合いのネコまたの葬式の時は、いつも雨が降るということです。

サルが城のサル（猿）
飯豊山麓、長者原の「サルが城」には、その名の通り何千匹ものサルが群れが遊んでいた頃がありました。 ある日、村の子ども達が、大勢で川原に行き、「誰か１人地蔵様になんぜ。（地蔵様ごっこ）」と言って遊んでいました。 そうしているうちに、地蔵様になって立ち続けている子供の事を、そのまますっかり忘れてしまいみんな家に帰って行きました。 まもなく「サルが城」に住むサルが大勢つれだって遊びにやって来ました。そして、「おや、ここに地蔵様がいる。」とさっきから立ち続けていた子どもを見つけて言いました。サル達は、ずっと前から、自分達も人間の様に地蔵様がほしいと思っていたので、さっそく藤づるでかごを作り、それに乗せて連れて行きました。 川をかついで帰る時、「サルの尻ぬれても地蔵様ぬれんな（濡らすな）。つんつくつん。つんつくつん。」面白いふしをつけて何回も歌いながら行きました。 サルが城に着いたら、サル達は小屋をかけ、地蔵様になった子供を置き、山からいろいろな珍しい果物を取ってきて、それでサル料理を作って与えました。「地蔵様よ。また川遊びに行ってくるから、るす番しててくれよ」といってサル達は再び川に行ってしまいました。 みんな出かけた後、地蔵様になった子どもは、目の前に与えられたサル料理をすっかり背負って家に逃げ帰りました。「おれ、サルが城さ行って、地蔵様の真似しったら、こんなにいっぱいサル料理もらって来た。」といって、近所の子どもたちみんなに見せました。そうしたら、「おれがこんど地蔵様になる。」と欲の深い子どもの１人が言い、地蔵様になりきっていると、やっぱり山からサル達が大勢連れだってやって来ました。「あらあら、おら家の地蔵様、水あそびに来った。早く連れて行け」と言いサルが城に連れて行きました。 川を渡る時、「サルの尻ぬれても地蔵様ぬれんな（濡らすな）。つんつくつん。つんつくつん。」と、面白いふしをつけて歌いながら行きました。それを聞いた欲の深い子どもは、自分が地蔵様の真似をしているのをすっかり忘れてしまって、くすくすと笑ってしまったのでした。サル達はこれを見て、「こんなもの、生き地蔵の、にせ地蔵だ。」と、バリバリひっかいて、川の中にドブンと投げてしまいました。 サル達は、こんな事をして毎日遊び暮したものだそうです。 サルが城の中腹には、その昔サルの頭が住んでいたという大きな岩穴が今もあるそうです。

百子沢の大蛇（蛇）

「百子沢」という地区には、その頃、家が百戸あったと言われています。今でこそ百子沢と書きますがその昔は「百戸沢」と書いたそうです。そこに、たいそう意地の悪い、今で言えば、ガメツイ庄屋の旦那様がいました。その旦那様が、ある時、越後に用足しに行った帰り道、「金丸」という所まで歩いていきますと若くて綺麗な一人の娘に出合いました。

「どごさえぐ？（どこに行くの？）」と開くと「どごさえぐにもあてのない身だ。おれの父親も母親も死んでしまって、今では身寄り１人いなくなってしまった。何とかして下さい。」と答えました。「ほんなら、おらの家さ来て、下女になって稼げ。」と旦那様はその若くて綺麗な娘をつれて帰りました。お花という名前で呼ばれるその娘は、たいそうの働き者でもう村中の評判になりました。

ところが、ケチな旦那様は身よりのないお花を救ったという恩をきせて、１文の給料もやろうとはしませんでした。むしろ、村の人々の評判を気にして、お花を憎むようにさえなったのです。

ある日、旦那様の庄屋に殿様から使わされた役人の客がやって来ました。その時、家宝にしていた南京焼きの１０枚１組の皿を出し、お花に盛りつけをさせ、役人を接待したのです。夕方家宝の皿をしまう時、だんな様は１０枚のうち１枚をそっと隠してしまいました。お花が、いくら教えても９杖しかないことを旦那様に告げると、主人はもうかんかんに怒って、それから毎日、お花を今まで以上にこき使うようになりました。

皿を洗う時、その１枚を池に流してしまったものと思っている正直なお花は、旦那様のひどい仕打ちにも口答え１つしないでつとめました。しかしあまりの辛さ、悲しさに、お花は、とうとう皿を洗った他の中へ身を投げてしまったのでした。旦那様は、池の前に２つ並ぶお花の草履を見つけ、ずいぶん驚き、慌てましたが、今さらどうすることもできません。村中の若者を頼んでお花の亡がらを探しましたが、そんなに大きい池でもないのに、不思議と見つかりませんでした。

その後、毎日夕方になると、「ひとつ、ふたつ、みっつ・・ここのつ、とおの皿がない。」というお花の皿を数える、もの悲しげな声が聞えるようになったのです。その声を聞く者の胸は、まるで切なくかきむしられる程だったと言います。そして、１週間それが続いた時、他の水がざわざわと騒ぎ、がばっがばっと池の淵が欠けていくようになりました。２日も経つと、旦那様の家は、他の中にぐらりと傾き、ついにめりめりっという音と共に全部沈み去ってしまったのでした。それからも、夕方になる度にお花の皿を数えるうらめしい声が村中にひびき渡り、池は相変らず、がばっがばっと欠け続けたといいます。百軒あった村はその全部が池の中に沈み、大きな大きな沼となった池には時々、直径５０センチ程の丸太のような蛇の遊ぶ姿がみられるようになりました。その後、その大蛇は自分の棲家をいつか機会があったら海に移そうと考え始めました。

宝暦七年（１７５７年）５月２７日、３メートルを越える大洪水が起り多くの人々を混乱させたことがありました。「足水川」のほとりもその例にもれず、あたりの田畑がすっかり水びたしになってしまいました。その時、足野水の三次というじいさんが、水の心配をして、家の前にた

たずんでいると、足水川の上流から、大きな丸太が１本流れて来るのを見つけました。あれあれと思っている間に目の前に来て、突然ぐにゃりとくねったかと思うと、がばっと大蛇のかま首が持ち上げられ、そのまますうっと下流に去ったということです。その後、百子沢の沼は自然に埋まっていき、今では、家も相当に立ち並ぶ集落となったそうです。しかし「大沼」と呼ばれる沼だけは今でも残っています。

百子沢の大蛇（蛇）

昔（南小国村百子沢）の成金持の家に、お花という女中がいた。お花はいくらきれいに髪を結って寝ても、夜中になると一人で髪がほぐれ、そばの障子ほどにサラサラと這い上る不思議な病気があった。

ある時、お花は、家の宝である南京焼きの１０枚そろいの皿を洗っていると、あやまって１枚割ってしまった。お花は、主人の厳しい叱りを受けるのを嫌って流し尻の池に身を投じて死んだ。

ところがその夜、池のほとりから、ガラガラと土が崩れて、家も屋敷も一夜の内に大きな沼に化してしまった。これが（大沼）である。お花は大変美しい女中であったので、主人が惚れ込んでしまい、いろいろな手をつくして、お花を我がものにしようとしたが。何としてもきかないので、ある時、お花に家宝の南京焼きの皿を洗わせ、その中の１枚を主人が隠して、そしてお花に「お前が盗んだに相違ないから、皿を返せ、それができなかったら俺の妻になる事だ。」と責め立てた。いくら責められても、お花にはそんな皿を返せるはずはなく、又主人に身をまかせることは死ぬよりも嫌だったので池に身を投じてしまった。すると、お花は蛇体になり、家屋敷を沼にしてしまった。

箱の口の人と飯豊山
箱の口集落の人が、御山に登山するときは、御山を開いた人が箱の口の人という事から、２１日間に及ぶ水垢離と禁欲生活がたった７日間で済み、かつ、精進料理はするが登山前には必ず、鰊（ニシン）の煮た物を食べる事になっていたという。それは高い山に登る時には、体力をつけて登れと特別に神様からお告げがあり、箱の口集落だけの人達が神様から許されていたという。 又、登山時に箱の口集落の人々がその一行に加われば絶対山は荒れないと言われていた。その他、箱の口集落の人が登山する時には必ず家に酒を作って登ったという。 そして、その人が登っているうちに家にいる人がその酒をあけてみると、不思議に、絶対この酒は失敗しないと言う。集落の人達はこれも農作神様のおかげだと言っていたそうである。 箱の口集落の人々が御山に登る時、必ず米を背負って行った。一行の中で疲れや、病気のため、倒れる者がいると、その人の頭に米をかける。その人はたちまち元気になり、一行に加わって登山できたという。

小国の村夫
草刈りに行った小国の村夫は、あっちの山こっちの山と歩き回って、ふと一本の細道を歩いていくと道の真中に松の木のようなものがあったので、近寄ってみると、毒蛇で背には黒い銅銭の模様は確認出たが、頭と尻尾は、藪の中なので長さは分からなかった。３～４尺の木を鎌で切って「えい、この憎い奴」と力一杯に叩くと藪の中から頭をもたげ、その頭は祭獅子ほどあった。両耳が高く突き出て、目には金がたたえてあるようで、口からは盛んに毒気を吐き出していた。彼はいまこそと頭を力一杯叩いてやろうとしたが、その頭を見てすっかり気が抜け、どうせ蛇のほうが早いに決まっている。こうなれば、と棒を持ち直して打ってかかり、ぐったりとしたところを大石でとどめをさしたときに、越後から山師がやって来て、これを見て見世物にするといって塩漬けにして持っていった。

きつねのほうしょうの玉
昔あったけど。やれ昔、越後の安田ていう所に「せんにむ」という家あったけど。じいと、ばばの二人暮らしであったど。 ある日、爺は山さ木切りにいって、昼飯食って一服していたば向うの方から、きつね何か白い物くわい【咥えて】でくるから、じさ【爺】は木の陰さ隠れて待っていたどやれ。じさの前さ来た頃、「やあっ」といってじさとび出はった【飛び出た】じもの。そうしっど【そうすると】、きつねのちくしょうたまげて、【小狐は驚いて】「くわぇーん」と一声吼えて、とび上がったど。その時、きつねは、口さくわえっだ物おどして【咥えていたものを落として】、一目散に山さにげで【逃げて】いってしまったどやれ。 じさ、その白い物拾ってみだば、何だが毛のかたまりのような物だじもの。 「これこそきつねのほうしょう玉だなあ・・・」 と思って家さ持って来て、ばばと二人で、誰にも見せないで、しまっておいだど。 きつねの方では、大事な玉をなくして、人をだます事もできなくなってしまって困ったじもの。うまいあんばいにばけらんなくて【上手に化けることが出来ずに】、どうしたらいいがど、二、三日考えだど。そのうちに考えついだじもの。じさの娘に子供生まれる事さ気づいたきつねは、村の若いもんにばけて安田の家さ来たど。そして若い者の言うには「じさじさ娘子お産始めだど。なかなか難産で、子供もてないがら占ってもらったば、これは、じさの持っているきつねのほうしょうの玉をなめさえすればすぐ子供は生まれるって言わっだがら、はやく、それ持って行ってくれ。じさ足がおそいがら、おれ、それ持って先に行くから、じさ後からゆっくり来いちゃ。」ていうど今まで誰にも見せた事のない、ほうしょうの玉を出してきて、「はやく、はやく、走って行ってくれ。おれど、ばば、ゆっくり行くから。これなめさせたら、おら行くまでに、孫が出ているがら。」と言って、べろりきつねにだまされでしまって、宝物はなしてしまったじもの。じさとばばは、娘の所さ行ったば、たまごに目はな付けたようなめんごい子【かわいい子ども】が生まれたといって、大喜びのところであったど。 「早く、じさだいてみれ」【じいさん抱いてみろ】 っていうがら、じさがら先にだいて、こんどは、ばばにだがせだど。ばばは、 「じさそっくりだ。」って言うじもの。 「いや、いや、この子は、ばばそっくりだ。」 って言って二人でやるから、とるやら【代わる代わる】何べんもしている内に、子どもだち来たじもの。一人の子供は、橋の下をのぞくと、じさとばば二人で、まるこい石をやったりとったり、「じさににた」「いや、ばばににた」と言っていたけど。 あんまり子供にわらわっだば【笑われ】、はっと目がさめたようだけじか、橋の下にいで、石ころ、やったりとったりしていであったど。 「やれやれ、きつねにあだかえされた」【仇をかえされた】 と言って、家さ帰ったば、ほうしょうの玉がながったど・・・。 きつねのあだがえしって、まことにおそろしい。 トンピンカラリン虫くった。

宝幢院について（小渡）

小渡集落の下に坊様庭敷と呼ばれる畑があるが、昔ここに宝幢院という寺があった。

ここの和尚は毎朝、貝少川の宝幢院滝（その名は今も残っている）で水垢離をすることを業にしていた。ある朝いつものように水垢離をしていると滝壷の中から河童が出て来て和尚の生き肝を抜こうと肩に手をかけた。すると和尚は河童の手を肩に固く挟み、知らないふりをしてお寺に帰ってしまった。

河童はどうしても逃げることが出来ないのでとうとう和尚に謝った。

そして、今後は決して小渡の子どもをとらないし、また川で命を落とさせるようなことはしないという証文を和尚に渡すことで、河童は川へ帰してもらった。それからというもの、小渡集落は川端にありながら子どもが川で死ぬことはなくなったと云われている。

八幡太郎の投げた石（舟渡）

舟渡集落の方にある、屏風岩山の所に八幡石という（直径６メートル余りもある）大きな石がある。その石は源八幡太郎義家という人が、自分が大力を持っていることを誇って、みんなにこの大力を示そうとこの大石を縄で背負い、舟渡集落から屏風岩山の裏側集落（現在、金丸という集落がこの集落かと思われる。）まで持って行こうとした。そして大きな縄でその石を背負い、ぐんと立って屏風岩山に登り始めた。しかし屏風岩山の頂上に着こうという寸前で、茂っていたつるにひっかかり足をたいそう痛めてしまった。（つるは直径１０センチ程の大きな葉を持ち、辺り一帯をはっていた。この葉を地元では俗に「肥っ葉」と呼ぶそうです。）足を痛めた為にその大石を二度と背負う事ができず、その大石をそこに置いて、残念そうに足を引きずりながら帰ってしまったという。この大石は今もそこに置かれてあり、源八幡太郎義家が縄をかけ背負ったこの大石には今でもその時の縄の溝がくっきりとついていると云われています。

八幡石（舟渡）

小国町と若山集落の中間に金毘羅様という山があり、この金毘羅様の川の下に、通称「釜の淵」と云われているところがあったそうです。

その淵の真中にぽっかりと浮いたように大きな岩があります。その岩は八幡太郎義家が安部一族との戦いの時、金毘羅様の頂上から、投げ落した岩と云われています。

八幡石（若山）

若山集落より約１キロメートル離れた所に大石があります。

その大石のまわりには小さな川が流れています。この大石のある側一帯が沼になっていてそれはとても深く、沼は曇った日などはいかにも悪魔が出そうな錯覚に陥りさえさせられます。鎌倉時代、八幡太郎義家が沖庭山に登って東方の山を望み自分の力をたよりに、ここの大石を向こうまで投げようとして、足をふんばり大石を持ち上げ力一杯投げました。大石は、大きなうなりをあげながら大空を魔物のように、東方の山の一番手前の今の金毘羅様の山に当るかの様に見えたが、途中この若山の現在の位置に半分以上も土にめりこんでしまったそうである。それからいく日も経ちこの小川の淵に沼の様になり現在にいたっている。

八幡石（越戸）

昔、源八幡太郎家が安倍一族と戦いをした時のことです。

安倍一族に追いかけられた八幡太郎義家の軍は越後（新潟県）の八ツロから小国町の小渡に通ずる道を、一生懸命後ろを振り返りながら逃げてきました。

そして越戸を通り過ぎる頃には、義家の軍はすでに息は、きれぎれに足は棒のようになって、とても前進出来ないような状態になりました。

越戸から少し小国側にある前坂という所に来た八幡太郎義家の軍は、後ろを何度も何度もふり返り「ここまで来れば安心だ。敵はまだ見えぬようだから、一休みして行こう。」
と近くにあった丁度いい石に腰をおろしました。

敵が来たらいつでも逃げられるようにと、多数の部下を見張りにつけ、自分も自ら敵の方向をじっと睨みつけていました。

しばらくの間そうしていると、家来の一人が、「敵がみえてきたぞ」と大声でどなりながら、八幡太郎義家の所にやって来ました。

「そらきた、皆早く準備せい。」
と八幡太郎は休んでいた石から素早く立ち上がり、そして小国の方に向って逃げました。
それ以来、この八幡太郎義家の休んだ石を人々は「八幡石」と呼ぶようになりました。

またこの八幡石をよくみると、ところどころ凹んでおり、これは八幡太郎が休んだ時に、その重さで凹んでしまったと言う人もいます。

じしゃからの木（綱木）

八幡太郎義家が奥州の豪族である安部一族を征伐するためにやってきた時のものです。

小国町大家綱木の箱の口集落の中間にさしかかった義家の軍は、この２つの集落の間にある峠を越えようとしていました。

おりしも、冬将軍が容赦なく吹き付け、義家の軍の全身は遅々として進みません。また兵隊は疲れ果て、食料は残り少なくなり、朝廷とのれん楽は思うようにいかなくなり、悪戦苦闘していました。それにもまして東北の冬は厳しいものです。特に小国地区は日本でも有名な豪雪地帯。だから八幡太郎義家を始めとする彼の部下はいかにして前進しようかと考えておりました。

しかし折からの深雪のため、ついに腰までうまり、弓を捨てるもの、脱落する兵も出てきてまったく動きがとれなくなりました。山々もうっすらと暗くなり、さすがの義家の顔にもあせりの色が表れてきました。そしてついには「ううむ、どうしてくれようか。」とため息まで出てきました。

そのような状態にみんながっかりしていると、先程から一人で何か熱心に考えていた家来の一人は、何を思ったのか突然ポンと手を打って「そうだ、これがいいぞ。」と腰の刀を抜き、自分の近くにあった、まっすぐに伸びた三尺位の木をすっぽりと切り取りました。まわりの兵隊は何をするのだろうと興味をもって、彼の仕草を見つめておりました。

木を切った家来はそれを少しずつ曲げて大きな楕円形の円をつくり、それをつるでしばり、「かんじき」を作りました。

（かんじき・・冬、雪の上を歩くときに長靴の底につける直径３０センチほどの楕円形のもの。これを履くと雪にぬかることなく歩くことができる。より、歩きやすさ・軽さを追求してつま先を中心に踵を上げる事ができる「外国版かんじき」がスノーシューという名前で市販されており、現代では冬場のレジャー（スノートレッキング）などで利用されています。これは雪の上でも走ることができるすぐれものであります。）

それをさっそく八幡太郎義家の前に持って行き、その前で足につけて、深雪の上を歩いてみました。義家が見てみると、今まで腰までもぬかって歩いていたのだが、それを履くと足首までしかぬかりませんでした。それを誇らしげにはいて歩いている家来を見た義家は「おおっ、なんといいものを考えついたものじゃのう。」と言いながら、こんどは義家がつけて歩いたところやはり中々歩き良いものでした。これはすばらしいものだと八幡太郎はすぐに家来に命じて、木を探させたくさんの「かんじき」を作りさっそく峠を登り始めました。そしていよいよ義家の軍は峠にさしかかり、「そら、もうすぐ頂上だぞ。」と最後の力をふりしぼり、おもいっきり力を入れた時です。突然八幡太郎義家の履いている「かんじき」がポキリと折れてしまいました。

生まれながらにして気の強い八幡太郎義家は、大変腹を立て「もうすぐ頂上だというのに縁起が悪い」と壊れた「かんじき」をその峠から力一杯投げてしまいました。

この時から、現在でもこの峠から小国側には、この時に使用したといわれる「じしゃからの木」は沢山あるが、この峠の向こう側（綱木）方面には「かんじき」に使う「じしゃからの木」は少ないと云われています。また、これ以後このあたり一帯で用いられる「かんじき」のほとんどが「じしゃからの木」で作られたものだそうです。

赤はげ（古田）

小国町古田集落の南方に、赤はげと言われている場所があります。この場所は、山の斜面がくずれたようになっており、山肌は赤色がかかっております。昔、源八幡太郎義家と安部一族との間に戦いがあった時に、八幡太郎義家は山向いの金毘羅様に陣取り、安部一族は、この赤はげに陣取って、弓を引き合い、刀をふりまわして、戦いをしたと云われています。戦いは、安部一族の不利となり、安部一族は、ついに逃げなければならなくなりました。その時、八幡太郎が追討をかけたところ逃げる安部一族の者が足をふみはずして、その山の上から下の川に転がり落ちたと云われています。それと同時にあまりに大勢のため、山の表面は崩れてしまったという事です。その山の上から転がり落ちた馬や人の血が、その崩れた山肌の土にすっかりしみ込んで、あの赤い土になったといわれ、それ以来この土地を誰ともなく赤はげと呼ぶようになりました。

矢種沢（矢種沢）

昔、蝦夷征伐に来た、源八幡太郎義家の軍と安部貞任一族の軍とが戦いをした時の事である。源八幡太郎義家の軍は現在の小国町若山集落と古田集落のほぼ中間に位置する金毘羅山に陣取りました。また敵の安部一族は、川（現在の金目川）をはさんで向い側の赤はげという場所に陣取りました。そして、互いに弓を引き合い、激しい戦いとなりました。敵の安部一族の打った矢がうなりをあげ、激しく空中を飛んで来ました。その時、源八幡太郎義家は驚きもせずに、軍の先頭に立ちはだかって、不思議な術を使った。すると、その時突然、ゴウゴウと強い風が吹きあれ敵の打ってくる矢は、自分の軍陣から反れて別の方向の沢の中に入ってしまい、味方の危機を救い、一箇所に飛んでいって近くの沢に落ちたと云われています。その後この沢からしばらく矢が発見されず、「矢をたねる」という意味で、弓の矢が落ちた場所を矢種沢と呼ぶようになったと云われています。尚、この沢は現在でも矢種沢と呼ばれています。金毘羅山の上の岩にある小さな窪みは義家の馬の足跡と伝えられています。

金毘羅山（古田）

古田の集落の入口の左手にある小高い山が金毘羅山である。昔この山に八幡太郎義家が立籠り、西方の山に安部貞任を迎えて戦ったことがある。その時互いに弓の射ち合いをしたが、義家が金毘羅山の上で術を使うと、貞任の軍の矢は金毘羅山からそれて隣の山の沢の中へことごとく飛んでいった。

その後この沢からしばしは弓矢が発見されたので、矢種沢と云われるようになった。

金毘羅山の上の岩にある小さな窪みは義家の馬の足跡だといわれており、義家の家来がこの地で馬に煮た豆を食わせたら、馬は藁の中へ豆をこぼした。

それから数日たってその豆を見つけたところが、豆からはすでに白い糸が立って納豆になっていた。これが納豆のおこりであると伝えられている。

納豆（古田）
昔、現在の古田集落において源八幡太郎義家と安部一族の間で戦いをした時のお話です。先ほどまでの激しい戦いも夕暮と共に次第にひっそりとして来て武士達は、ほっと一息つきました。 源八幡太郎義家は味方の陣地をゆっくりと一回りして歩きました。馬は連日の戦いで疲れてしまって、ぐったりと元気なくつながれていました。 源八幡太郎義家は馬を見まわしておりましたが、やがて馬の側に近寄ると「これは、これは、連日の戦いでさぞつかれた事だろう」と鼻づらをやさしくなでてやりました。「これ馬番、馬はたいそう疲れている様だ、可愛想にこのままでは、やせおとろえてしまうぞ。」「はい、私も大変困っているところです。どうしたら良いものでしょうか。」「ウーム、そうだな、豆でも沢山煮て食べさせて、元気をつけさせる事だな。それから、大変疲れているようだからゆっくり休ませる事だな。」 馬番はさっそく、大きななべに豆を沢山煮て、桶に入れて馬に食べさせました。馬は最高の御馳走だと喜んで食べていました。そのうち、席をちょっとしたはずみにその煮た豆を、桶もろともに、しきわらの上にひっくりかえしてしまいました。そんな事とは誰も気がつかず夜になり、そして一夜が過ぎました。 さて、次の日、馬番が馬に朝飯を食べさせようとした時です。昨日、馬がひっくりかえした豆はそのままひっくりかえっておりました。桶を見つけた馬番がなにげなく桶をおこそうとすると、その桶の下のわらの中から、何ともいえない旨そうな匂いが流れてくるではありませんか。馬番は「このすばらしい匂いはなんだろう？」と静かに桶の下のわらを広げて見ますと、それは昨日こぼれた、煮た豆だったのです。 「ずいぶんうまそうな匂いがするものだ」と馬番はその豆をそっと手に取ってみますと、ねばねばした無数の糸が豆からたっていました。鼻の近くまで持ってきて匂いをかいでいた馬番は「こんなうまそうなにおいのするもの、きっと人間が食べられないわけがない。」と一粒、口に入れてみましたが。それがまた非常に美味いのです。馬番は「これはうまいぞ」とつい大声をあげてしまいました。 突然の馬番の大声に何事がおきたのだろうと、源八幡太郎義家を始め多くの家来達が馬番の所に集まってきました。馬番からこのおいしい豆のことを聞いた源八幡太郎義家や、集まって来た多くの家来はその美味そうな匂いを嗅ぎながら、さきほどの豆を囲んで覗きこみました、みんなそれぞれ豆を口に入れました。なるほど、とても美味いのです。みんなはあまりの美味さに口をそろえて、「ナント、ナント、ナント、ナント」といって感心しました。 それからこの食物を人間が食べるようになり「ナント、ナント」と驚いたことからナントウ・ナットウと呼ばれるようになりました。 これが「納豆」の始まりだと昔から古用集落に伝えられています。それから農家では煮た豆をわらにつつみ一定の温度を保って二昼夜ぐらいおいて「納豆」を作っていたそうです

幻の馬（金目）

昔、山また山に囲まれた金目集落の夜の出来事。夜もふけ集落中が寝静まった頃、集落の一人の若者が、せっせと夜仕事をやっていました。仕事を終った若者は「どれ仕事もちょうどきりがついたから寝るとするか。」と一人ごとを言いながら、戸締りをしようと外に出た時です。若者は、なにげなく満月の光に照らされた集落の近くの山に目をやった時、突然その山の裾を、ボーと幻のように一頭の白馬があらわれました。「おや？何だろう、今頃の時刻にまさか、夢なのだろうか」。と不思議に思いながら幻のように現れた白馬をじっと見ていると、今度は、幻のようにボーと消えていくではありませんか。若者は驚きました。「これは、どうしたことだろう、白馬が現れたり消えたりして・・」と薄気味悪くなってきました。しかし、人間というものはこうなると、その正体を知りたがるものでこの若者は一層その事に興味が出てきてその附近をじっと見まわしていました。すると今度は、さきほど山のそでで幻のように消えた、あの白馬が山の項上にボーとまた幻の如く現われてきました。そして、じっと集落を見下ろしていました。さっきから見ていた若者は「これは何ちゅう事だろう、白馬が山の下に現われて消えたと思ったらこんどは山の頂上に現われて、そしてこっちを見てやがる」と一人ごとを言いながら見ているとボーと白馬は幻のように消えて見えなくなりました。若者は、今度はどこに現れるのかとあちらこちら見まわしたが、その晩は現われませんでした。次の日若者は昨夜の不思議な出来事を、村の人々に話しましたが、村人達は「夜の夜中に白馬か現われて消えたと思ったら、山のてっぺんに現われるなどとんでもない。おまえは寝ぼけて夢でも見ていたのだろう、人を驚かすにもほどがある」と誰一人として信じてくれる者はありませんでした。だれにも信じてもらえなかった若者は、「そうだ、もしかしたらまた夜になると現われるかも知れない。」と次の晩から夜が更けてくると、じっと集落の近くの山々を見まわしつづけました。次の日も次の日も、しかしついに白馬は現われませんでした。そして数日たって、また満月の夜、若者はじっと山を見ていると、最初の晩のようにボーと白馬が現われてきました。消えては現われ、現われては消えながら、じっと集落を見下ろしていました。

若者はその白馬を見ながら「やつめ、満月の晩になったらまた現われたな。あいつの正体は一体なんだろう」とつぶやきながら見ていると、その馬は突然大声でいななきました。すると集落に突然不思議な事がおこりました。というのは今の一声で集落に飼ってある馬という馬が突然狂ったように動き出し、馬屋から飛び出す始末です。

そして狂ったように飛び跳ねながら、さきほど音のした方へドッと走って行くのです。若者は「こりゃどうしたことだ、集落中の馬ちゅう馬が、みな走っていくじゃねえか。」と驚いて見ていると、今度は、山の項上に幻のように現われた白馬が空を飛ぶように山を下ってくるのです。

さあ集落中はハチの巣をつついたような騒ぎです。「おらの家の馬が逃げたよう」「おらの家の馬だあ」「あっちへ行ったぞ」「そら、山の上からおりてくる白い馬に向って走って行くじゃねえかあ」と集落中の人達が外に出てきました。

小屋から逃げた馬どもは、山から降りてきた幻の白馬を先頭に狂ったように田畑かまわず集落中をかけ走りました。集落の人々が見ている中を一晩中走りまわり、夜明け近くになると、今まで先頭になって走っていた白馬がボーと消えていきました。

するとどうしたことか、今まで狂ったように走りまわっていた馬々は、何事もなかったような顔をして自分の家に帰って来たのです。さて次の日集落の人々は大騒ぎです。夕べの白馬のおかげで田も畑もめちゃくちゃになってしまったのです。「ああ、せっかく実ったのに、相当だめになってしまった。」という声があちらこちらで聞かれました。それから後の満月の日も幻のような白馬は現われ集落の田畑を荒らしまわりました。集落の人々は、満月の度にこんなことが続いては、とんでもないことになってしまうとさっそくみんなで相談しました。その結果、いつもの馬が暴れて走りまわるところに石をならべて「ませ」を作ろうということに決まりました。次の日から早速その工事にかかり大きな石をならべて「石ませ」を作りました。
それ以後集落はこの幻の白馬からの害は免れ、再び平和がやってきました。そして、それ以後
　この石で「ませ」を作った場所を誰からともなく「石ませ」と呼ぶようになったと云われています。尚、現在もこの「石ませ」には大きな石がごろごろし歩きにくくなっているそうです。

（語り部さんの原本）

あずき取り（折戸）

　小国町北部の「折戸」に「ほうの木沢」と呼ばれる沢があります。昔からその沢には昼でさえ暗くさみしい場所と云われている所がある。ある時、折戸集落一帯に奇妙な噂が流れはじめました。「ほうの木沢を一人で通ると正体の知れないバケモノが出る」というのである。バケモノというのは通る人に、どこからともなく「モチ米あるが、あずきがない」「誰でもいいからあずきくれ」と歌うように話しかけてくるのだそうです。しかしそんな噂が流れても村人は信じることもなく噂話を聞いていました。ところが噂が流れて間もなくのある日の事。一人の若者がどうしてもほうの木沢を、あずきを持って通らなければならない用事ができてしまいました。その若者は臆病で非常に気の小さい男でした。あずきの入った袋を肩にかついで、ほうの木沢にさしかかった時には、陽はすでに暮れ、うすぐらい夕暮となってしまいました。昼間でさえさみしいといわれているほうの木沢を薄暗くなってから一人で通るのですから、なんともいえない不気味さが若者の心を誘いました。最近集落に流れていた噂を思い出しては小走りでその沢を通り抜けようとしましたが、突然山のどこからともなく「コラまてぇ」という奇妙な声がして、小走りの若者の足を止めました。若者は「そら出た」と思い、とっさにあたりを見まわしたが、なんの姿も見えませんでした。そのうちに前から、噂で聞いていた歌ともお経ともいえぬ不気味な声が流れてきました。「モチ米あるが、あずきが無い。」「誰でもいいからあずきをくれ。」「あずきをくれ。」と言っているのです。若者は驚くあまりに、あずきの袋を肩にかついだまま懸命に走って逃げようとしました。ところがいくら走っても「あずきくれ」「あずきくれ」とその不気味な声は若者を追いかけてきました。若者はどうしようもなくなり、肩のあずきを袋がらみ沢に投げ入れて「俺の持っていたあずきは、いま沢に置いたから命ばかりは助けてくれ」と大声で叫びました。すると不思議に不気味な声は、ぴたりと止まりました。若者は一層の気味悪さに一目散に逃げ帰りました。翌日この話を集落の人々に告げました。その話を聞いた村人達は若者の案内で、昨夜バケモノが出たという、ほうの木沢の場所に行ってみました。するとなんと驚いた事にその場所には、袋いっぱいに入れておいたあずきは一粒も無く、空になった袋だけが昨夜と同じ場所に投げられてあったそうです。それ以来、あずき取りの噂は村人を恐ろしくさせ、あずきを持った者は、ほうの木沢を通らないようになったということです。

樋の沢の沼さんべ（樋ノ沢）

北部の樋ノ沢に、通称「さんべ沼」と呼ばれる沼があります。そのさんべの沼の精は大きなどじょうだと昔から伝えられ。そのどじょうは水や沼の付近を荒らされることを非常に嫌っているそうです。ある時、そんなことを知らない集落の若い者達がその沼に石や土をたくさん投げ入れました。すると今まで晴れていた空が突然曇り大雨が降り始めました。どうしたことかその雨は何日も何日も降り続き、その地方一帯が大洪水になったということです。

そのため、その地方の川沿いや田畑はその年、米や穀物が全然とれなかったそうです。それ以後村の人達は「さんべの沼に石や土を投げると、さんべ沼の主の、どじょうが怒って大雨を降らせると云われるようになりました。

きゅうり（栃倉）

昔、栃倉という集落には、大変きゅうりの好きな天応様という神様がおりました。

昔から、きゅうりをいろいろな方法で食べられておりましたが、文化の発展と共に生活が豊かになってくると、人々は珍しいものだけを求めて贅沢な生活をするようなり、きゅうりなどという野菜は、以前のようには食べなくなりました。

そして栃倉集落の人々は、きゅうりを食べたとしても半分食いにして投げたり、充分熟さないうちに放って捨てたり、また長い間置き忘れて腐らせたりする。などあまりにもきゅうりを粗末に扱うようになりました。これを見たきゅうりの好きな天応様は、たいへんお怒りになり「これでは人々の生活が贅沢すぎて堕落していくばかりだ。少しこらしめてやらなければなるまい」とお考えになりました。そして天応様は、この集落にきゅうりを作ることを禁じてしまいました。

しかし栃倉集落の人々は、きゅうりを作ることを禁止されても何不自由のない平和な生活を送っておりました。それから数十年も経ち、そんな昔の言い伝えがすっかり薄れてきたある年、集落の一人がその掟を破り、畑にきゅうりの種を蒔いてしまいました。３ケ月が経ち、それはそれは、みずみずしい、とてもおいしそうなきゅうりがたくさんなりました。そしてその村人は、さっそくカゴ一杯にとってきて「これは美味しい」といって食べたところ、急に腹をかかえて苦しみ出しました、薬を飲んで寝てはいましたが、いっこうに良くならず病気は悪化をたどるばかりでした。そしてついにその人は年の暮れに死んでしまったということです。これを知った村の人々は「天応様の掟を破った祟りにちがいない」と恐れて、それ以来この村には、誰一人としてきゅうりを作る者はいなくなりました。

その後、長い間「きゅうり」の作らない時代が続き、板倉集落では他の土地で作ったきゅうりは食べて良いが栃倉集落内にはきゅうりを作ってはならないという風習が続いているそうです。

金色のにわとり（金目）

昔、金目集落は、天候に恵まれ、人々はたいへん一生懸命働いたので毎年豊作が続き、幸せな生活を長い間送っておりました。そんなある年の事です。突然あたりが暗くなったかと思うと、ものすごい大雨が降り出し、これが何日も続きました。この悪天候のために、その後虫やうじがわき出て、それがもとで悪病がはやり出しました。人々はもがき苦しみ、働くことが出来なくなったために農作物が全々とれなくなり、人々は、困り果てた末に家宝であるものを持ちより神様にそれを奉納し何度も拝みましたが何の効果もありませんでした。そしてその年はとうとう凶作で暮れてしまいました。食べ物がないために、老人や子供達は、次から次と餓死するありさまでした。そうしたある日、目も開けていられないほど西の空が黄金に輝いたかと思うと、そこには一羽の美しい黄金のにわとりが現れました。村人達は、あれよあれよと空を見守っていました。その美しいにわとりは、突然集落に舞い降り今までたくさん、はびこっていたうじや他の虫を食べてしまったということです。そのため村人の病気はすっかり回復し、人々は以前の幸せな生活をとりもどしました。集落の人達は、これも金色のにわとりのお陰であるとし、それから後に神として祀りました。それからというもの、金色のにわとりが集落全体を救ったのだと信じられ、その後、金目ではにわとりの肉や卵を食べなかったと伝えられています。（集落以外の他からもってきた卵は食べても良いといわれている。）その時祀った、にわとりを描いた掛け軸が今でも集落の家に家宝として残っているといわれています。

洛の里（金目）

平家が敗れた時、三条郷の斎藤孫右衛門と孫兵衛という兄弟が、金目川の上流、不動沢という所に隠れ住んだ。彼等は主に狩猟を営んでいたが、多少の耕作も行ったらしく、不動沢のほとりのザイショノタイラというところには畑の跡が残っているそうである。時は経ち後に不動沢から３里ほど下流の今の金目に移住し、そこを開拓した。孫右衛門は敬神家で人望もあったので、そこに家を建てる者も出てきた。集落の者は農耕と共に山の生活を営んでいたので村の神を鎮守として祀った。又、孫右衛門は、元の住家のあった所に不動院と称する祈願堂を建てた。そこの岩壁には大人ほどもある不動尊があり、金目の人たちは毎年旧の８月９日に参拝した。孫右衛門はある時、旅に出た。（キリシタンの信者の嫌疑を受けて捕えられたとして記された物もあります。）その時、村はずれまで見送ってきた人々に（「金目村は自分のいない後に、狢の里になるかも知れないため気をつけなければならない」と言われていた。）留守になる旨を告げ発った。その後孫右衛門からはなんの音沙汰もなく２年の年月が過ぎた、その年の秋のことである。孫右衛門の言う通り、沢山の狢が現われ農作物荒し家畜を襲った。孫右衛門は３年目にようやく村に帰ったが、狢に荒らされ困窮している村を見て自責の念から断食祈願を決し不動院にこもり、家伝の祭文を紐解き一心に祈願した。するとそれから７日目に雷雨が起り、一夜のうちに狢どもはことごとく死んでいった。それから金目村は平穏な里に戻ったがこのことがあって以来孫右衛門は洛の棲息地に鶏は禁物であるというので、村人に鶏を飼うことと鶏肉・鶏卵を食用にすることを断じて禁じた。村の鎮守に鳥居のないのも鳥に因んだ一切のものを嫌うゆえんであるという。

蛆が沢（金目）

金目集落の飲料水の源をなしている沢を蛆が沢（俗にウンジャ沢）といっている。孫右衛門が神通力によって殺した狢の死体には、この沢のあたりに沢山ころがって蛆が湧き、飲料水を汚すので村人は困惑した。その時、孫右衛門はまた不動院にこもり、祭文によって祈願したとろが、それから７日目の朝、村に一羽もいないはずの鶏が鳴き、その夜に金目川の水が逆流して、蛆の湧いた狢の死体をきれいに流し去ってしまった。そうである。

蛆が沢の名はこれに発するものであるし、金目村に鶏の声がすると、それに引続いて何か不思議なことが起こると伝えられているのも、それに起因しているという。

祭文（小渡）

孫右衛門は、祈願に用いた祭文の神通自在なのに驚き、子孫への影響を怖れてその中の二巻だけを残し、他の恐ろしい祭文は庭先の大石の上で焼いてしまった。この大石は、「祭文焼捨の石」といって、今も孫右衛門家の庭に残っている。焼け残った２巻の祭文も不思議な神通力があって、その後もよく人々を災害から救った。旱天の際には他村からも雨乞いに頼まれて、孫右衛門家の主人が、祭文をたずさえて出かけることが近年に至るまであった。又、明治４２年の火事に、当時１１戸の金目集落は６戸が全焼したが、そのとき孫右衛門の主人は、祭文をひも解いて祈願したところ、孫右衛門家の屋根には、たちまち雲が湧き、軒からは雨滴がたり、いくら火が飛んで来ても燃えうつることはなかったという。

禁忌（金目）

金目集落では鶏を嫌う外に、産や死の「穢れ」（けがれ）を忌むことも甚だしく、特に火の混交が嫌われている。「穢れ」のある者に対しては、煙草の火は火鉢に取ったりして別火にして使用させ、お茶や爛酒を飲ませるには、一杯ごとに茶碗や杯を洗うか、又は拭いて使用する。飯などは一度盛ってから他の茶碗に移して食べさせるという。但し、肉親の間ではそうではない。

又、「穢れ」のある家に訪問した時などは、塩で身を清めてから自宅に入るそうである。

電権（いかづち）現神社由来（古田）

天明初年の頃（約１８０余年前）古田木村久右エ門家の三男、寅之助という若者がおりました。ある日、市野沢に仕事にいこうとして、市野沢の堰あたりまで行ったところ、空全体がにわかに曇り閃光がひらめき大音響とともに彼の頭上に落雷した。彼はその場に投げ倒され、気絶したが、やがて正気にかえり起きあがりあたりを見わたしたところ一面が焼け野原になっていました。寅之助のからだにはカスリ傷ひとつもありません。ただ傍らに珍しい石が１つ落ちていました。その後、家に帰りこの事を話した彼は、今更のように落雷の恐ろしさに身が縮むとともに、一命を取りとめたのは、これこそ電神の加護によるものだと信じ、拾った奇石を御神体としてその場（セキ場の上）に祀ったそうである。これが電権（いかづち）の始まりと云われています。

長田の観世音（小渡）

昔、小渡の長五郎という者が、朝早く田の水をかけに行くと、田の中に光るところがあった。何か埋っているに違いないと思い鍬で掘るとカチンと音がして金の観音像が出てきた。

長五郎は、持ち帰って屋敷に安置した。しかしそれから長五郎家には子どもが育たなくなったという。それは観音様の傍で子どもが遊び不躾な振る舞いをするからであろうと云われていた。

寛政１１年（西暦１７９９年）一子が死亡したので、その子どもを葬ると同時に観音様を針生の吉祥寺へ納めた。小渡地区の長田から発見されたので長田の観世音という。以来、観音様が発見されたこの地では、化学肥料似外の肥料は一切入れないで耕作しているそうです。観音像の丈は、１尺２寸で背に「西泉」と鋳物師の名が彫られている。この観音様の御開帳をする時にはどんな晴天の日でも雨が降ると云われている。

船山神社（樋ノ沢）

小国町北部の樋ノ沢の小高い所に船山神社が祀られています。船山神社とは、この神社の祀られているこの場所が船の形をした小高い山の上にあるからだと言う人もいます。

昔、小国郷の平野一帯には、まだまだ多くの水が溜まり、大きな湖であった時代。山の間を広々と続いている湖とまわりには、雄大にそびえ立つ山がありました。その湖水の上を、神様が乗った船が北部の中島に向い漕ぎ進んでいました。ところが船が今の樋の沢付近にさしかかった時に突然の大嵐に遭い、その場に沈んでしまいました。その船には、大事な宝物が積んであったのでした。神様は命からがら湖の岸に泳ぎつきました。一息ついて神様は沈んだ宝物について考えました。「あの重要な宝物を水の底に沈ませておくわけにはいかない」とその船が沈んでいる一帯の水を干すことにしました。それで他の神々の力を貸り、船の沈んでいるまわりに高い土盛を作りました。その結果、神様は宝物を取る事ができました。その後神様はこの苦労して作った土盛の上に神社をたてまつりました。それが現在の船山神社であるといわれています。

杉の下（今市）
今市集落の入口から南方に約１００メートル位離れた所に代神様が祭られています。代神様の近くにはあまり大きくない沼があり、そばに巨大な杉の木があります。この附近には水田もあります。 ある年の６月の朝、今市集落の大地主である人が言った「今年はいつもの年よりも、早く植えて、３日で終さなければいけない。」男達は夜明け早々に田んぼへ出かけた。一日中一休みもしないで、働いたけれども、いっこうに田植えは終らなかった。「主人に叱られるのがこわいから」と言っては、みな一生懸命植えた。それでももう少しというところで西へ日が暮れかかってきた。その時、ある一人が西の方角に向かって、「どうかもう、ひととき（２時間）だけお日様を下さい。」と頼んだ。すると不思議な事にひとときだけ日が照りやっとの事で終った。男達は喜んで主人の所へ帰った。しかし、意地の悪い主人は、「今日１日かかっても終えないのにどういう事だ」と不思議に思った。あくる日、主人は昨日植えた所を見に行った。不思議な事にいくら見てもちゃんと植えてあった。しばらくして、今度は日の照りが足りなく西の空に穂が倒れていった。村人のある一人に頼んで、再び神様に聞いてもらったところ「東の方に大木がある。稲がたおれるのはその大木のせいである。とお答えになりもう一つ、お前達がお日様に頼んで、ひととき日を伸ばしてもらったにもかかわらずその時ばかり喜び、そのあとは何とも思っていない。そのせいでもあるぞ。」と言った。男達は、それからというもの、日の暮れる時分に、いつもお日様に向かって祈った。しかし問題はその巨大な大木である。その巨大な杉の木の為に日光は遮られて近くの水田は西の方に倒れている。そこで村の人々と一緒にこの木を切ることにしました。ある日、村人達といっしょに杉の木を切り始めました。しかし、大きくて木が思う様に切ることが出来ず、太陽が西の空に沈み、あたりがうす暗くなってきましたが、その木を切りたおすことが出来ないので翌日切る事にして、みんな家に帰りました。翌朝早く杉の木を切るために沼の所に行きました。しかし、たしかに昨日途中まで切ったはずの杉の木の切り口がどこにも見あたりません。村人達は驚いてあたりを見まわして見たものの、その木の切口がないのです。この様な事が何回もくり返されるので、村人達は困ってしまいました。こんどは前回よりも多くの村人をつれて行き、一日やっとの事で切り倒しました。木は大きな音をたてて、そばにあった沼の中に倒れ、沈んで影も形も見えなくなってしまいました。今までも木が沈んだと云われている田んぼの中からは時々、木の枝が出てくると伝えられています。そんなことがあり、その附近の水田を以来「杉の下」と呼ぶようになりました。

魔法のつえ（五味沢）

小国町の北部の五味沢村は、昔から米が豊かに実る村でした。春がくるのは遅かったけれど、５月ともなれば、雪がまったくなくなり、山桜を始めとして、いろんな花がいっきに咲き乱れ、人々は、豊作を願いながら、農業に精を出して働き毎年平和に暮していました。

しかし、ある年のことです。どうしたわけか雨が降らず毎日のように日照が続きました。初めはあまり気にしなかった村の人々も、あまりにも雨が降らないので、気になり出しました。水田はからからに乾き、稲は枯れ始め、川の水は日に日に少なくなり、とうとう流れなくなりました。ついには井戸が枯れ始め人々の飲む水さえ欠乏することになりました。村の人々が一滴の水でも大事に使うようになっていた、そんなある日のことです。

ぼろ服を身にまとって、杖を持った一人の老人がどこからともなくやってきました。その老人は歩き疲れから、今にも倒れそうになりながら一人の村人にこう頼んだ。「水をくれ、のどが乾いてのう。」しかし、その頃は村人でさえ水に困っている状態で、まして他人に飲ませる水などはありませんでした。「おじいさん、おじいさん、水なんかありませんよ。」「自分達でさえ飲めないのに、他人になんか飲ませる水はないんでのう。」「勝手に探して飲んでくれ。」とかえって怒られてしまう始末でした。

老人は困り果てました。のどは乾わくし、水は無い。一人で思案しておりました。すると何を考えたのか、その老人は突然立ちあがり自分の持っていた杖をその辺の井戸に持っていき下を覗きこんでおりましたが、次にその杖で「ボン」と井戸を叩き、しばらくそこに立っていたかとおもうと、一滴もなかった水が少しずつ下の方から湧いてくるではありませんか。するとその老人はその水をさも美味そうにのどを「ゴクン、ゴクン」と鳴らしながら一気に飲みました。これを見ていた村人達は大変驚き、そして老人に「どうか私達にも水を恵んで下され。」と頼みました。すると老人はそれを心よく引き受け、この村の人々に水を恵んだそうです。集落の人々は大変喜び、またその老人を尊敬し称えたそうです。

この時、井戸を叩いた杖の跡が今でもその井戸に残っていると云われているそうです。それからというものその井戸は枯れることがなくなったその井戸に水くみ村の人々たちは足繁く通うようになったという事です。

沖庭山権現様（沖庭）

沖庭山には、昔から大石があり神様として人々に信仰されています。

この石は昔、となりの村から飛んできたといわれている石です。この石のある近くにある「雨のざあざあ降る日、１人の村人がキノコを取りにやって来ました。その村人がキノコをたくさん取り、山を下りようとして、ふと気がつくとそこに大きな石を見つけました。「これはこれは、なんと美しい石なんだろう。」と言いながらその石に近づいてよくみると、その石は今まで見たことがないような珍しい石でした。「こんな珍しい石があるならば、この次にキノコを取りに来た時の目印のため、笠をかぶせていこう。」と一人ごとをいいながら、自分のかぶっていた笠をかぶせ意気揚々とキノコを背負い、山を下りていきました。

この人は、この美しい石が昔から沖庭山に祀られている権現様とは知らなかったのです。
村人が家に帰ると、突然目がかすんできて、だんだん見えなくなっていきました。

翌日、その村人の目が見えなくなったといううわさは、あっという間に村中に広がりました。それを聞いた村の人々は、その村人に見舞いにきて、その日の様子を聞きました。目の見えなくなった村人は目の見えなくなるまでの自分の行動や昨日の山での話の一部始終を村の人々に話しました。それを聞いた村人の物知りは「それはきっと沖庭山の権現様にちがいない」「目が見えなくなったのは権現様の石の祟りにちがいない。」と言いました。それを聞いた村人は、昨日のキノコ取りに行って美しい石に笠をかぶせてきた自分の軽はずみな行動を反省し、居ても立ってもいられなくなり「たとえ目が見えなくとも、山に登ってその笠をとろう。」と決心をしたのもつかの間、すぐに仕度をして山に登ったそうです。「権現様、権現様私は何も知らないでしたことなのです。どうぞお許し下さい。」と何度も何度もつぶやきながら夢中で這いながらも登った。あちらこちら、さまよい歩き、ついに昨日の石を手さぐりで見つけることができました。村人は急いで手をのばし、昨日かぶせた笠を取りました。すると不思議なことに少しづつ目が見えてきたそうです。村人は喜び勇んで家に帰りました。しかし、この事があって以来、この村人の親類には、生まれてくる子どもがほとんどヒンガラ（目が見えない）になって生まれてきたと云われています。このいわれがあるので、毎年旧の８月には獅子踊りをやってこの石を祀っているそうです。この石の納められている沖庭山の御本堂の改築の時は、一週間前から魚等の生臭いものを食べず、山に登り水取沢で水を汲み身体を清め神社に登り、法院様２人で、その石を白布で巻き、上から「荒こも」でくるみ、荒なわで村の若者に背負わせて、御本堂の後に有る股木の３本股に上げておくそうです。重さは１７貫目から２０貫目程あるそうで、その石の近くには、甕が２つあり、１つは法印様の甕。そしてもう１つの甕には旧の９月２９日に米を入れておき、翌年の４月頃に見に行き、そこで米の減っている方向が、作が悪くないと考えられています。

大宮、子易神社（大宮）

大宮神社は祭神大己貴命であり、和銅５年遠江国周智郡事任神社（一名小国神社）より当地（一説によると片岩）に勧誘し、「小国一の宮」とした。子易神社は祭神国常立尊、高皇産霊尊、神皇産霊尊、木華開耶姫命であり、もと小国神社と称した。元来、其の時々の領首より神封田５町８反２畝を賜わっていたが、永禄２年伊達家の臣上郡山がこれを廃した。（併し、小国大宮神主代々由緒書には、佐藤伊象守藤原家次（遠藤氏の祖先）が、永禄２年上郡山と心を合わせて大宮の神を再興す。と記してある）慶長三年（西暦１５９８年）上杉家の領土となったとき領主代々の祈願所と定められ、神田を寄進された。明治５年４月小国郷７２ケ村の鎮守に指定され郷社となった大正１０年７月２５日神饌弊帛料供進神社に指定された。

元来、子易とは産児の祈祷に起因するものであり、古くから安産の神として崇敬されてきた。礼祭は８月１８日（旧）である。

子易神社（大宮）

一説によると東置賜都高安村の才の宮の由来より始まるとされており、高安村は山に取り囲まれた奥地なので、昔年貢を納めたことがなかったそうである。文徳天皇の天安年中（西暦８５７年～８５８年）にこの山奥に凄む古狸が都の役人に化けて、これまで久しく年貢を納めなかった代りであるといって、里の娘１１才を限りとし毎年春と秋に一人ずつ人年貢に取った。そのため村には娘が殆どいなくなってしまった。村の人々が嘆き悲しんでいる時、愛宕山の地蔵権現が座頸に姿を変えて現れ、国八代郡の南宮宝菩薩から、三毛犬、四毛犬を借りて悪魔を返除せよと教えてくれた。里人は役人に化けている狸どもを酒盛に招いて、たらふく酒を飲ませ、三毛犬、四毛犬に食い殺させた。しかし２匹の犬も傷を受けたので間もなく死んでしまった。里人は地蔵権現の教えに従って犬の屍をねんごろに林の中に葬り、その塚の上に椿を植え、小祠を建てて、犬の官子易聖真子両大権として村の鎮守に祀った。その祠の傍には庵を作り里の人々が代わる代わる宮守を務めた。それからというものこの宮の守護によって村には子どもがよく育ち、特に難産する者は一人もなくなったという。ある時、行脚の僧がこの庵に立寄ったので、里方のことを占ったところ「古狸の魂魄の念はまだ失せ切らない。この宮の威光によって成仏することが出来ないでいるから益々信仰を厚くしなければならない。」と申された。里人はこの僧の徳を慕って庵主になることを誓い。それから庵の名を林照院とつけた。犬の塚の上に植えた椿の木は年を経て成木となったので、庵主はその枝を切って愛岩山の地蔵権現と、三毛犬、四毛犬の両権現の像を刻み、一つの像は愛岩山に納め、二つの像は鎮守の森に安置した。そして信心怠りなく勤めたので、里人は僧に進めて妻を取らせた。それにより林照坊と号した。林照坊は子が成人し、都へ登って醍醐院で修験の法を学び吉野へも登山し峰中権行も努めようと思いたち、その身の守の本尊、一寸八分の聖真子権現の一体を笈に納め、それを背負い都を目指して旅立った。

その翌年、業を積んだ林照坊が帰国する時の出来事。越後路から大里峠を準えて羽前の小国（南小国）へさしかかった。日が暮れかけていたので谷深い集落に宿を求めた。その夜は激しい雨が降り、翌朝宿を出る時には雨はやんでいたが村はずれまでくると川があり、昨夜の洪水のために橋が流されていた。水は幾分引いていたので浅いところをねらい杖に頼りながら渡ったが、

近くまできた時、石に滑り杖の先についている宝珠を川の中へ落してしまった。その後峠にかかると、にわかに腹が痛んできた。我慢しながらもようやく人里まで下り宿を頼んだ。（その家は遠藤といって、いろいろ親切に介抱してくれた。）しかし病はいよいよ重く悪化をたどるばかり、林照坊は臨終の近づいたことを悟り、遠藤に自分の身の上を語り、自分の死んだ後は、笈の中の犬の宮子易権現を高安村に届けてくれるようにとだけ頼み、昨日川の中に宝珠を失ったことを話し間もなくこの世を後にした。

林照坊が宝珠を失った川をその後「珠宝川」とも「玉川」とも呼ばれていたが、玉川のほうが言いやすいので、後世まで玉川の名が残ったとされている。林照坊が死んでから間もなく遠藤の妻が産気づき、７日ほど痛み産むことができなく苦しんでいた。しかし林照坊との約束を果たすため遠藤はそれから早速、笈仏を高安村に送り届けようと出かけた。山を越えて４里ばかりきて、ある家の軒下に笈を置いて休んでいると、その家の中から人の泣く声が聞えてくる。その訳をたずねると、この家の１９歳になる一人娘が産気づき、７日も痛み続けていたが、ことのほか難産なので心身ともに疲れ果ててしまい、本人は死を待つばかりなのであるという。遠藤はこれを聞いて家に入り主人に仏の由来を話した。すると主人はとても喜び、身を清めて遠藤と共にこの仏に祈った。すると半時もたたないうちに安産し母子共に健康であった。さらに生まれてきた子はたまごのような白子であり、その後ここを白子沢というようになったと伝えられている。

人々は、このような奇持の笈仏を他国に譲るのはまことに惜しいと考え、永くこの山内に留めて、末世までも小国の守神にするようにと遠藤に勧めた。遠藤もそれに同意して、そこから仏を持ち帰り、自分の屋敷の内に祀った。ここの宮に懐妊を祈る者は皆安産するので、その仏の力は近郷、他国までも伝わっていった。と云われている。

産小屋（大宮）

大宮子易両神社に鎮座している大宮の土地は昔から聖地とされており、不浄なことは一切嫌われていた。それ故に出産の時も、隣の集落（増岡）の土地に建ててある産小屋（俗に小屋という）で行なわれている。昔は、ここの産小屋さえ不浄なものとして、常に建てて置くことが許されなかった。産のある度に村中の者が集って一定の場所に囲った粗末な小屋を建てて、産婦が帰るとすぐ取り壊していたが、時の小国警察分署長から従来の産小屋があまりにも不衛生なので常備のものを建てて置く様にという注意によって設けられたのが後の産小屋である。（６畳１間だけであった。）産婦は分娩してからここに２週間過して帰ることになっていたが、子易神社の守護によって難産したり、小屋にいる間に育児が死亡したりすることは、昔から一度もないそうである。ここの産小屋の汚れた火で調理したものは、産婦以外の者は飲食することは禁じられ、少しでも産小屋に入った者は、必ず塩で身を清めてから家に入るそうである。

お使いの蛇（大宮）

大宮子易神社のお使いは蛇であり、その蛇は普通の蛇よりも尾が短く時々境内に姿を見せることがある。蚕が鼠に荒らされるとき、お使いの蛇を借りて守ってもらうことがある。お使いの蛇を借りるには、家を出たら途中一切人と話をしないで神社に行き、お使いを借りたい旨を心の中で申し上げ、手拭いで目隠しをし前に風呂敷を広げ、その中に入ってもらう様にお願いして静かにたたむ。それから日よけをつくり途中口をきかないで家に帰る。蚕室に入ったならば、また目隠しをして風呂敷をひろげ蚕のお守をお願いする。お使いの蛇を借りてきた期間は蚕棚の前に毎朝ご飯を供えなければならない。そうすることで不思議に鼠が来なくなるそうである。蚕があがったならば、借りてきた時と同様にお返し、お礼を申し上げなければならないそうである。

天狗の角力取場（五味沢）

正月の１０日、この日は庄内の天狗、最上の天狗、米沢の天狗が、力くらべをする日とされている。前日から集まった大小無類の天狗どもによって、１０万８千俵の餅がつきあげられ、（１０８煩悩の数が関係と云われる）暗いうちから龍が岳で鳴らす太鼓が鳴りひびく。

あたりの山々は一面雪に覆われているがここだけはきれいに掃き浄められ、純白な砂があたり一面にまき散らされている。そしてこれから一年を支配する大天狗を選ぶ日がやってくる。定刻の１２時になると正面の一段高い所に、遠く鞍馬山から飛んできた天狗が行司として羽根のうちわを持ち控える。四本柱には南部の恐山、伯耆の大山、信州の浅間山、それから筑波山から馳せ参じた天狗達が座を占める。

庄内、最上、米沢の三方の道からこの日の代表に選ばれたおのおのの天狗が修々とあらわれ、凍るような月の下で角力とりをして一番勝ったものが一年間大天狗として君臨できるのである。たまたま、いたずら者が四本の柱の代りにつまれた石を散らかしておいても一夜のうちに元あったようにきちんと積み直されており角力取場はきれいに掃除されているそうです。さらに角力を取る時は必ず土俵の砂上に天狗の羽根あとが波状に付いて、夏になっても消えないそうです。

月夜の晩などに出谷川、見附川などの渓谷から集まってきた小天狗たちが砂原の土俵で遊ぶとされるこの場所は、現在は盤梯朝日国立公園になっています。今でも時々あたり一面に彼らの羽根あとが目撃されているそうです。（谷風の吹上げと峰を越えてくる風との衝突がもたらす作用と考えられています。）

三面の耳さがり（入折戸・折戸）

昔、三面（みおもて）集落の近くに大変恐ろしい山賊が住んでおりました。時々山々のさびしい所に現われては身ぐるみをはぎ取っては逃げ隠れし住んでいました。ひどい時には三面の集落に現われ三面集落の人々を大変困らせていました。集落の人々がいくら抵抗してみたところで相手は恐ろしい山賊。とうていかなう相手ではありません。集落の人達は、どうすることもなく泣き寝入りの生活を送っておりました。

そんなある日、折戸集落に住んでいる小池之助という武士がこの話を耳にしました。小池之助は今でこそこんな山の中に隠れ住んでいるが、平忠盛から血の流れを引く立派な平家の武士でした。「ようし、俺がその悪い山賊を退治してくれよう。」と小池之助は先祖から伝わる大事な刀を持って山賊の住み家に向いました。小池之助は山を探し歩いて、ついに山賊の住み家を見つけることができました。小池之助は山賊の家の前に立ち「こら、善良なる村人をいじめる悪い山賊。平家の血の流れをくむ小池之助が天に代わっておまえ達を退治にきた。」と大声でどなりつけました山賊たちは、この突然の出来事と１人で山賊の住家に向かって来たこの男に驚きました。「なにを。この若者、おれ達を誰と思っている。１人で退治できると思うなら俺たちを退治してみろ。」と槍や刀などの武器を取り小池之助に向ってきました。しかしいくら強い山賊といえど、小池之助は立派な強い武士、かなう訳はありません。小池之助は山賊を全部切り倒しました。そして山賊を退治した証拠にと山賊の耳を切り落とし近くの木にぶらさげてきました。小池之助は集落に帰ってきて「村の衆安心せい。山賊は俺が１人残らず退治してきた。」と山賊退治の一部始終を伝えました。

しかし、集落の人は「あの恐ろしい山賊をまさか？１人で退治できる訳がない。」と誰一人として本気で聞いてくれる人はいませんでした。そこで小池之助は、嘘だと思うなら山賊の住家にいってみろ。俺は山賊を退治した証拠に山賊の耳を切り落とし木にぶらさげてきた。」と言いました。集落の人々はまさかと思いながらも小池之助の言う住処に行ってみると、彼の言う通り本当に耳がぶらさがっていたそうです。

それ以後、その場所をみんなが「耳さがり」と呼ぶようになったと云われています。小池之助はそれ以後集落の人々から尊敬されるようになりました。そして三面集落の人々からは集落を救ってくれた人という事から集落、三面の長として迎え入れられました。そして小池之助は一生そこで暮らしたということです。そしてこの小池之助は現在三面集落の小池家の先祖であるととも云われている。

釜場（岩井沢）

現在の小国高等学校附近は「釜場」といわれているそうですが、この由来について次のようにいわれています。

現在東山段丘という洪積世時代に形成された段丘が小国町の東にあります。この段丘のところを東から西へ流れる大沢川という小さな川があります。この大沢川は現在、㈱コバレント・マテリアル（小国町一の大企業　旧東芝電興）附近を流れていますが、昔は東の方から北の方に流れて、今の小国高等学校のグランドあたりを流れて、横川に合流していたということです。
というのは、高等学校を建てる際、整地をしてみるとある幅で東から北の方へジャリ石や大きな石が無数に出て来たといわれています。そこは非常に水がわきやすく、昔の大沢川はここを流れていたようです。そして、この附近に住んだ人々は、この釜場といわれた地域で共同生活を営み、そこで生活のための物の煮炊きをやっていたのではないかといわれております。小国高等学校を建てるとき、そのジャリ石の間から昔の人々が使用したと思われる「石うす」や生活に使った石鍬や石斧なども多数出てきたそうです。このようなことから「釜場」と呼ばれるようになったのだと伝えられています。

ひょうろう淵（岩井沢）

現在私たちの通っている小国高校の近くを流れる横川の上流に「ひょうろう淵」と呼ばれる、とても深い淵があります。これはそのひょうろう淵に伝わる話です。
昔から、ひょうろう淵は非常に深く、川が急に曲屈するため一流から流れて来た水や瓦礫がこの淵に強くあたって年々少しつつ淵を削り取っていくのでした。
しかし昭和の初め頃（昭和二・三年ごろ）小国地域は平年とはちがった大雨が何日も続いて、人々をたいへん苦しめたことがありました。横川は、毎日少しづつ水かさを増し、ひょうろう淵にあたる荒波はだんだん強くなって表面の岩がくずれました。

そんなある日、村人の一人が偶然ひょぅろう淵を通りかかったとき岩の中に人間の顔をみつけました。恐怖のあまり足が立ちすくんでしまいました。しばらくして我にかえった村人は、青くなって大急ぎで村に帰り村の衆に知らせ、若衆が総出でひょうろう淵に駆けつけました。
そしてよく見てみるとそれは人の顔ではなく粘土で作られた仏様の顔でした。最初に見つけた村人は、憶病だったので人間の間違えたのでした。若衆たちは、それを取り出して静かに洗いました。すると仏様は、だんだんくずれてしまって一個の粘土の固りでしかなくなりました。

農夫と熊（岩井沢）

むかし、二月末に小国の百姓が山道を通る時ナデに逢った。彼は谷底に落ちて気がつくと、穴の中に入っていた。そっと腹ばいになって出ようとすると、何やら毛のようなものに触れた。これは熊だなと思いまた気を失ってしまった。その男がまた目を覚まして穴から出て三月。家の者は大喜び、男が熊に助けられたことが評判になっていた。ある人は「せっかくの熊狩りもしなかったのか。」と残念な口振りで、ぜひつれて行って来れと言うので、その男を案内して行くと、熊は難なくつかまった。ところがその肉を食べたものは腹痛となり、その百姓は数日後死んでしまった。その後も後を追うかのように一人また一人と死んでしまい、その家はつぶれてしまった。

二ノ宮ヶ原（岩井沢）
現在の小国中学校（小国高校と道路をはさんですぐの近くにあります）がある一帯より横川にかけて、この附近を昔から人々は「二ノ宮ケ原」と呼んでいたそうです。 　この「二ノ宮ケ原」についてこんな事が伝えられていります。二ノ宮神社とは、昔、武士たちが戦争をやって勝つと、その戦勝祈願として自分達の神様を祭ったものであるといわれております。そして二ノ宮神社が今の中学校のところに祭られていたと伝えられております。二ノ官神社の本家として一ノ宮神社があります。それが一部の人々は、現在北部にある有名な「大宮神杜」であったと言う人々もいます。 　大宮神社は昨年のレポートで触れた「大宮子易神社」のことで現在は子易神社としての方が有名になっており、二ノ宮神社の本家であるかどうかわかりません。二ノ宮神社があったと伝えられている現在の中学校附近一帯には、神社の土台さえ残っていませんが、当時の小国町は今、城山（県社山と呼ばれている場所）といわれている所に城があって、この小さな小国を守り、そして町の中心に今の緑町附近（現在の小国町では商店街や住宅で賑わっている地域）で「古町」として栄えていたと言われています。江戸時代に栄えていた現在の小坂町一帯はまだ栄えていなかったと言われています。 　この古町といわれた緑町一帯を戦後区の整理中に、昔の人々が使用したと言われるものが多数でてきたそうです。以上の事から考えると小国中学校を中心に昔は町が栄えていたそうです。

百石山（伊佐領）

　小国町伊佐領集落の北東に「百石山」という山があります。
昔この山の頂上の大きな木の上に「大わし」が巣を作っていました。
この「大わし」は、時々山の下にある伊佐領集落や高坂、網木、箱ノロ集落に、舞いおりてきては、家畜を食い殺したり、人々におそいかかったりして、人畜に数えきれないほどの危害を加えていました。
この「大わし」が飛んでくると子供達は家に隠れ、震えあがる始末でした。集落でも何度となくこの「大わし」について相談をしましたが、だれ一人として自分の命をすててまで大わしを退治しようとする者はいませんでした。
この苦しみを耳にしたこの地を治めている殿様は、
「この大わしをただちに射ち落すように。」というおふれを出しました。
しかし「何といわれても自分の命が一番大切だ。」と村人たちは大わしを恐れ、射ち落す者はいませんでした。それを耳にした殿様は、
「そんなあぶない仕事を村人達がしたがらないのは当然だろう。」といいながらも、
「このままでは大変なことになる。大わしが２匹、３匹となったらどうなる事だろう。」
と語し合いました。
　その結果、集落や村人を救うためには、しかたがあるまいと。
　「集落を騒がす大わしを射ち落した者には、知行百石を与えるぞ、誰かいないか。」
という異例のおふれを出しました。これを見たある集落の若者は、「百石も、貰えるならば命をかけてやってもやりがいがある。」と大わしを射ち落す決心をしました。
どうしたら大わしを射ち落せるかと若者は、その方法を一晩中考えました。
　そしてある日のこと、夜のうちから大わしの巣の下にこっそり忍び込み、夜明けに巣から大わしが飛たつ時を狙い、射ち落そうとしました。
著者は夜になるとこっそり山に登りました。そして大わしの巣の下でじっと夜の明けるのを待っていました。まわりの山がうっすらと明るくなり始めたころ突然「バタバタ」という大きな羽の羽ばたきとともに、今まで人や家畜に危害を加えてきた、あの大わしが巣から飛びたちました。
それと同時に、昨夜からじっとかまえていた若者は「今だ！」とばかり手にした鉄砲の引き金を力いっぱい引きました。「ダーン」うっすらと明るくなった山々に鉄砲の音が響き渡りました。
同時に大わしはバッタリと地上に落ちました。そして若者は、その大わしの死がいを背負って喜びいっぱいで山を下りました。
それ以来、伊佐領を始めとした箱ノロ、高坂、網木等の多くの集落は、この大わしの危害から救われたといわれています。
大わしを射ち落した勇敢な若者は、その手柄により知行百石を、受け賜ったといわれています。
そのことがあってから、この若者をたたえると同時に約束通り百石をくれた殿様を永久にたたえようとして、伊佐領の集落の人々は北東にある大わしが住んだ山を「百石山」と呼ぶようになったといわれています。

雨降り地蔵（大石沢）

雨降り地蔵と呼ばれる地蔵様が今でも足野水にあります。この地蔵様は、何か地蔵様のうんと嫌がることをすると雨が降るという言い伝えがあります。

そこで、ある雨のほとんど降らない年、この話を伝え聞いた離れた集落の若い衆がやってきてどうかこの地蔵様を貸してくれ、と言って持って行ったのでした。

自分達の集落まで借りてきたものの、地蔵様の嫌がることなどというのは誰も知らないので、とんと困ってしまいました。

地蔵様の頭をごつんごつんとたたいてみたものの、地蔵様は怒ったり嫌がったりなどしません。そこで、一人の若い衆が、自分のしめていた６尺ふんどしをばらばら解いて、それを地蔵様の足にしっかりとゆわえつけ、ぐいっと逆さに吊るしてしまったのです。

さすがの地蔵棲も、これには少々嫌がったのか、空には雲がわき出し、ポツリポツリと雨が降りはじめました、おかげでその集落の田畑は難をまぬかれたということです。そしてこの地蔵様は、実は佐藤次右エ門信清の子孫で益運という人の魂がはいっているのだということです。

益運は非常に人柄が優れ、どんなことがあっても絶対に腹をたてたり、嫌な顔をしたりなどする人ではありませんでした。その人徳を高く評価され、後に仏道に入ってからは光学寺１７代目の和尚になったということです。

また、その益運の分身として故郷足野水に奉られたのが、この雨降り地蔵だということです。

ふまずの塚（大石沢）
傑堂尚和の修業法は一風変った方法でした。その方法は、自分が偉いと思った和尚について回りその中で自分を磨くという傑堂和尚独特の修業方法でした。ですから傑堂和尚の師というべき人は、何人もいました。 ある時、傑堂和尚が最近お世話になっていた米沢の瑞雪院〔現　米沢市上郷浅川瑞雪院〕の住職が亡くなったので、お参りに行って帰る途中、悪い病気にかかり自分が建てた市野々にある飛泉寺に立寄りこの寺で最期をとげました。傑堂和尚の遺体は、村上の耕雲寺には帰らず飛泉寺に埋葬されました。また傑堂和尚の位牌は瑞雪寺に今でも奉られてあるそうです。 そして傑堂和尚の墓は今でも「ふまずの塚」として、踏んだり蹴ったりすると悪い事がおきるといわれています。

鱒の王様（大石沢）
蝶池の速から少し上った山麓に地元の人はツツミと呼ぶ灌漑用水池があります。この池は水量の豊かな泉を水源にもっています。 昔からここに鱒の王様が棲んでいて、その池は底なしであるといわれていました。鱒の王様は鮭ほどの大きさで、家来を引きつれ水面近くを遊泳することがあり、もしこの光景を見た者がいれば三年以内に死ぬといわれています。鱒の王様が棲んでいるので、古来よりこの池の水は涸れることがなく、万が一若い人が水を干す様なことをすると、王様は水を求めて、必ず大雨を降らせて水量を確保するそうである。この池の所有者であり、田んぼの水源をここに求めている高橋平兵家では、日照りが続いて困る時には池の水を人工的に干して降雨を得ていたそうである。

御行塚（大石沢）
大石沢に御行塚という塚がある。その上には崩壊した砂岩の朽ち果てた石碑が立ってあり、そこにはかろうじて享保との年号が読むことができるそうです。 昔、何処からか一人の御行者が来て、大石沢の下駄屋（今は亡びたそうです）に留り、二百年、又は三百年後経ったら掘様にといって、そこの土中に生きたまま埋ったそうです。大石の渡辺善九郎家では今もこれを奉っているそうです。

市野々村の鬼（市野々）
小国の市野々村に老婆が貧しい家に住み、孫を養っていました。あるとき異変が起きました。なんと大きな角が一本右の額に生えたのです。心配した子供らが角を切ると、次には左の額に角が生えてきました。その夜今度はこれを切り取ったのですが、老婆はそのまま忽然と姿を消してしまいました。翌年村人が朝日山に登ったとき、一本の角がある老婆に会いました。それは飛鳥のように白髪をふりみだしている鬼老婆の姿でありました。天保七年の話と伝えられています

不動様（杉沢）

現在小国町杉沢集落の北側に「滝のいり」という場所があります。そこに不動滝という滝があり、昔その近くに不動様が奉られていました。

昔この神様の本尊が春さきの雪解けの大水のため流されてしまいました。村の人々は、この事に気づいてはいましたが、だれ一人として建て直そうとする者はあらわれませんでした。

それから２・３年過ぎた、ある年のことです。村に突然、得体の知れない病気がはやりだしました。村の人々は最初はくせの悪い風邪でもあろうと思っていました。ところが、その悪い病気が集落中に広まり、また大変くせの悪いのには集落の人々は、気持ちが悪くなってきました。村のお年寄り達は「これは何かの祟りにちがいねえ。」「何かの罰にちがいねえ。」とか「どっかの神様が怒っているにちがいねえ。」などと話をするようになっていきました。そんな中で不安な生活をしているある日、村のひとりがこんな話を持ち出しました。

「いつまでもこんなことが続いたら大変なことになる。今のうちに何とかしなければ。」

そんな話が村人全体の声となり、ついにはみんなで話し合うことになりました。長い相談の結果．集落の物知りが提案しました。それは「神つき」をやろうということです。

（神つきとは、心の正しい人１人神様の前に置き、神主を先頭にみんなでご祈祷する事で神様がその人にのり移り、その人の姿をかりて自分の思っている事を話し、そしてこの場合その人が足を曲げたままピョコンと一尺ぐらいとび上がると神がついたのだといわれているそうです。）

神様の前でご祈祷されていた男がピョコンと飛び上がりました。神がその男に憑いたことで、村人は喜びいさんで

「神様は、何んとおっしゃいましたか。」と聞きました。

するとその男は、いかにも自分が、神様の口調で得意げになって、

「俺はこの集落の近くに住む神様だ。おまえたちに呼ばれたから今ここに来た。」

といいました。そして

「村に悪病が流行っているのは、数年前に山にある不動様が流されたからだ。村の人々がそのことを知っていながら、誰一人として、建て直さなかったからだ。このままにしておくならば、今後ますます病気は広がり、村には悪いことが重なるであろう。」と言いました。

それを言い終わると神の、のり移った男は、そのまま深い眠に入ってしまいました。男が眠りから覚めてから、村の人々が自分のまわりで、落着きなく騒いでいるのを見て不思議にたずねました。村の人々は、今お前がこうこう、こう言ったのでどうするかみんなで騒いでいるのだと教えました。するとその男はびっくりして、

「自分は、そんなこと少しも覚えていない。」「ああ恐ろしや。」

と震えていました。それを見ていた村の人々はこれはやっぱり神様の言葉にまちがいないとばかりに次の日、村の人々は朝早くから数年前流された御本尊を探しました。

一生懸命みんなで探した結果、雪解けで流された御本尊は川の下の方の淵（現在不動様が奉られている所）で見つかりました。村の人々は喜んでその本尊を入れるお堂を建てて、奉ったといわれています。

それが現在の杉沢の不動様だと言い伝えられています。

極楽寺（小倉）

小倉集落から２キロ程山奥に入ると、極楽という家がありました。この家は、正徳時代に菅野峠という所から移ってきたといわれています。以前この家から少し下った所に極楽寺というお寺があり、この寺には何度住職が入っても、入ったきりで出てきた者は誰一人としていませんでした。そのため、村の人からこの寺は不思議な寺と言われ、怪しまれてきました。

そんなある日、一人の若いお坊さんが住職としてこのお寺の中に入りました。その夜小倉の若者がふとした興味心にそそられ、その寺に入りこみました。

そこで若者の見たものは、お坊さんが丁寧に頭を剃っている姿でした。何をするのかとしばらく立たずんでいるとお坊さんの後に、今にも飲みこもうとするばかりに大きな口を開いた大蛇がいました。

これを見た若者は、血の気を失って２キロもある自分の集落に帰り、今までの出来事を一部始終話し、気を失ってしまいました。これを聞いた村人は、驚いてすぐさま鉄の矢やたばこの脂（やに）を手に持ち、大蛇退治に駆けつけました。しかし、駆けつけた時には大蛇もお妨さんもいませんでした。あるのはお妨さんの道具だけでした。

それから極楽寺には、誰も入る人がなくなったといわれています。

今は、その土台石だけが昔の面影を残しています。

かやのみの伊勢参り（黒沢）

黒沢集落のはずれに「かやのみ」という木があります。その木が人間に姿を変え、伊勢参りに行ったという話です。

まだ交通機関が発達していない昔、いつもなら色づく春の季節ふしぎなことに木々の葉は茶色になっていて、いっこうに色づく気配がありませんでした。

村の人々は不思議に思っていましたが、後になってやっと色づきはじめました。やがてその年も暮れ、また春がきました。４、５人の村の男衆が伊勢参りに出かけ、伊勢の宿につき、宿帳をつける時、宿の人が

「去年は黒沢から「おかや」という女の人が一人で伊勢参りにこられましたよ。」と言いました。男達は、びっくりしてしまいました。なぜなら黒沢には、「おかや」という女の人はいないからです。その夜、男達が考えた結果、このような結論に至りました。

「去年の春といえは、ちょうど、かやのみが不思議なことに、何ヶ月も葉に色をつけなかったではないか。そうするとその女というのは、かやのみが、おかやという女に姿を変えて、伊勢様にお参りに来たのではないか。」というものでした

男達は村に帰って来て、集落の人達にその話をしました。それから数年後、かやのみの木のそばの家が火事になりましたが、すぐそばにあった、かやのみの木は焼けずにすんだそうです。その時から、村の人々は「きっと、伊勢参りに行ってきたおかげだ。」というようになりました。

いまでも、黒沢集落のはずれに大きな「かやのみの木」が、立派に立っております。

国蔵様（沼沢）
現在の沼沢の奥に「沼の平」という所があります。ある日この沼の平に国蔵様が自分の住む所を探すため、下から登って来ました。そしてあっち、こっちと住む所を選定していると、山に来ていた一人の村人と偶然に出合いました。いろいろと話をしているうちに村人は 「こんな山奥に住んでも、人々は来ませんよ、それよりすぐそこの川をもう少し下るとなかなかよい場所がありますよ。」と教えました。そういわれた国蔵様は 「なるほど。そうだなあ人のいないところに住んでも仕方がないからなあ」と一人ごとをいいながら川を下ることにしました。そして沼の平の石舟に乗って間瀬川を下り現在の沼沢集落付近まで美しい景色を眺めながら下って行くと小高い山が目にうつりました。国蔵様は 「おお、これはきれいな所だ、あの山に登って下を見たらきっと、美しいにちがいない。」 といいながら石舟を岸につけ、綱を木に結うと、さっそく山に登りました。 「これは何と美しいのだろう。」と頂上で景色にみとれて、つい一泊してしまいました。するとどうしたことか今まで一点の雲もなく晴れわたっていた空が急に暗くなり始めました。国蔵様は 「これは大変だ、きっと大雨になるにちがいない。」と言いながら山をおりようとしていると、急に滝のような雨が降りめ始ました。国蔵様はずぶ濡れになりながらも近くの大きな木の下に雨宿りをして雨が止むのを待ちました。雨が止んだので目的の場所に早く着こうと思い、急いで山をおり先ほどの所に来てみると岸につけたはずの石舟がありません。あわててそこら辺を探したのですがいっこうに見つかりません。というのも先ほどの雨で、川に水が旧に増水し、綱がはずれ石舟は下流の方に流されてしまったのです。その事に気づいた国蔵様は 「うーむ、これは困ったことになったぞ、舟が流されてしまっては、目的地に行けなくなってしまう。」 「だんだん日は暮れてくるし、今晩はあの山の木の下に泊まることにしよう。」 とこの晩は雨宿りをしたところに野宿をすることにしました。そして一晩夜つゆをしのぎながらも過ごしました。 さて次の朝、国蔵様は昨日登った山に再び登ってみました。すると驚いたことに、昨日眺めた風景にも増して美しい山や村を見ることができました。 「これはこれは何と美しいことか。」とすっかりその美しさに感心してしまいました。 「えーい、これから歩いて行くのはめんどうだ、この美しい景色をいつまでも見られるこの山の頂上に社を建てて住むことにしよう。」と社を建て住みついたのが、現在の沼沢地区の国蔵様であるといわれています。またこの時大雨で流された石舟は、あっちにぶつかり、こっちにぶつかりして流されていくうちに、だんだん壊れてしまいましたが、現在の「登りと」（のぼと）という所の川の淵に流されて来たのだと言われています。というのも、今もこの「登りと」の付近には、国蔵様が使ったものと思われる石舟に似た形の石があるのだそうです。そしてこの石にいたずらをして石をぶつけたりすると雨を呼ぶと伝えられているそうです。

国蔵様（沼沢）　その２
沼の平から国蔵様が石舟で間瀬川を下っていき、その途中に景色の良い、住みよい所があったら社を建てるつもでした。そして石舟で下っていき「登り」という所に来ると、国蔵様の乗った石舟が突然ひっくりかえってしまいした。川を泳いで命からがら岸に着いた国蔵様は 「さてどうしょう。」 と一人で考えこんでいると、向うから牛を引いた一人の村人がやってきました。その人は、かがみこんでいる国蔵様を不思議に思い「どうかなさいましたか。」とたずねました。 国蔵様が今までの出来事を話して聞かせると村人は 「それはさぞ、お困りのことでしょう。私が良い場所を知っております。どうですか、一緒に行ってみませんか。」といいました。国蔵様は村人の好意に感謝し、 「それはれは有難い。」 さっそく村人がつれてきた牛の背に乗せてもらい下っていきました。そしていろいろな身の上話しをしながら歩いていくと、国蔵様は案内された場所を大変お気に召し、そこに国蔵様は永住するつもりで「社」を建てました。 　これが現在の沼沢の国蔵様が奉られているところであるといわれています。

坂の由来（叶水）
昔、正平のころ楠公（楠正儀といわれているが家来か血縁の者だったらしい）が騎馬で沼沢の桜峠を越え、叶水の市野々集落に入ろうとして、ちょっとした平地に馬を止め鎧をはずして一休みして集落を見渡していました。（この鎧をはずして休んだ坂が現在の鎧坂と言われています。）ところが北西方向に不動様のお姿が、ありありと現われ、間もなくして消え失せてしまいました。見えた方向に近づいてみるとそこには滝が流れていました。 「あぁ　ありがたいあの滝は「辰己」の向いにかかる珍しい滝だ。不動の滝にまちがいない。」 楠公は集落に入りそこの飛泉寺におちついて一生を終りました。飛泉寺の前庭の入口に、大きな銀杏の木が昔を語る様にすっと立っております。庭の東南の隅に大石を積み重ねた上に墓があり、その段に登って、遊ぶと足にまめができるといわれています。それで、子ども達は絶対遊ばなかったといわれています。 楠の遺物は、菊水の紋章入りの物で、大切にされていましたが、そこの住職が越後の寺に移る際、持ち去り、残った物も大正二年の大火で寺が焼け失せました。

子持峠（叶水）
昔々のこと、物乞いが小国へ越えようとして峠を歩いておりました。頂上附近にさしかかった時、一人の乞食が急に産気づきました。あいにく山の上です。難はあったもののとうとう物乞いは頂上附近にある太さ２メートル程の木の根本に無事子どもを産みました。その時からこの峠を子持峠と呼ばれるようになりました。 し無事子供を産みました。その時からこの峠を子持峠と呼ばれるようになったということです。 また、この峠は現在も下叶水から小国へ越える所にあります。この叶水の登り口のところに大きな松の木が２本あり、夫婦のように寄り添って立っているところから夫婦松といわれています。赤ん坊が泣くとき、その松を燃やしてその煙にあてると泣かなくなるということです。

黒沢峠（黒沢）その２
黒沢峠は、昔から米沢と越後とを結ぶ１３峠の１つに数えられ、重要な交通路とされていました。この峠には約１キロメートル程度ですが、とても悪い道でありました。ある時、殿様がこの峠を見廻りに来るというので、村の人々は「こんな道を殿様に見せてはならない。」 と思い、村人総出で峠の悪い道に石を敷き並べました。５日間もかかったといいます。そのため殿様は快く通ることができました。その後、付近の人はこの石を持ち出して炭焼きのかまなどに使用したりしました。それで現在では残っているものも数が少なく、わずかに残った石も長い歳月のうちに中央がくぼんだ石になっています。またこの峠には大変急な曲がりがあり、そこで昔、目の不自由な人が山道を歩いていた時に、大きな曲がりがある事に気が付かず、まっすぐに歩いていった為、目の前の急な崖にころげ落ち死んでしまいました。それを知った集落のの人達は、その崖の事を、「ざところばし（座頭ころび）」と呼ぶようになりました。

９．大里峠の大蛇伝説（平成２１年度レポート）

峰田 祐輔　舟山 拓朗　渡部 恭兵
安達 桃子　色摩 七海　佐藤しおり

Ⅰ　大蛇伝説に関して詳しくお話を伺う

山形県側からの大里峠登り口である玉川地区にお住まいの渡辺競さんにお話を伺う。

大里峠の大蛇（小国側の言い伝え）
昔、越後女川村の今の蛇喰（じゃばみ）に忠蔵という猟人がおった。忠蔵は奥山の阿古屋谷という所で、木天蓼（またたび）を燻し、その香りを慕ってくる大蛇を鉄砲で撃ち獲って生計をたてていた。大蛇の肉は三年以上漬れば立派な食料になるのであった。 ある日、忠蔵の妻のお里乃が家人の留守に夫の戒めを犯して、大蛇の塩漬の味を見ようと三年経たないうちに桶から少し出して食べてみた。するととても美味しくてやめられず、遂に桶一桶食べ尽してしまった。そのうちにひどく喉が渇いてきたので、流しに行きひしゃくで、水を飲んだがいくら飲んでも飲み足りないので、外に出て堀の流れに口をつけて水が涸れる程飲んだ。それでもまだまだ渇きがとまらないので、ついにお里乃は大川に這入って息もつかずに水を飲み始めた。それを見つけた村人は、お里乃が気が狂ったというので大騒ぎになった。 そのうち空が俄かに雲ってきて、大雨風が起り、黒雲が舞下がってお里乃の体を包んだかと思ったと思うと、お里乃は蛇体になって雲に乗り、天上遥かに飛び去って行った。忠蔵はその後人々に暇を乞い、髪を剃って巡礼となって旅に出た。お里乃は関谷と小国との境の大里峠に棲みついた。それからは、時々人里に出て農作物を荒したり家畜を取ったりした。又、山に働いている樵夫や、峠を越える者等が大蛇に毒気を吹きかけられて体が煙のように消えてしまった等というので、近郷の物は誰一人として恐れない者はいなかった。 こうなっては神様に頼る外ないと、関谷の者は老人も若人も鎮守の前に集って、七日七夜の祈願を行った。満月の夜のことである。小国の方から大里峠を越える一人の盲の法師があった。この法師は柏崎の生まれで、蔵の市という者であった。山路で疲れたので、頂の辺りまで来て岩に腰を下して休んでいたが、何時の間にか眼ってしまった。目を覚した時はもう真夜中の頃であった。法師は余り淋しくなったので背負って来た琵琶を取り出して弾き始めた。その美しい音色は静かな山に響きわたった。しばらく弾いていると、法師の前にうら若い声がした。「なんと美しい琵琶の音でしょう。私はさっきから聞き入っていました。」意外なことに法師は驚いて、その女を、「何者であるか。」と尋ねると、「私はこの山に住んでいる大蛇です。普通は岩穴に隠れていますが、身を現せば幾つもの峰を巻き、谷という谷を埋め尽してしまいます。今はこの山も狭くなったので近いうちに荒川を堰止め関谷郷は勿論小国郷までも泥の湖にして住もうと思っています。あなたがもしこの里の人でしたら早く里の外に移りなさい。私は何より好きな琵琶を聞かせてもらったので御礼に教えてあげたのですが、このことは里人に行って決して話してはなりません。若し言うことにそむくようなことがあったらあなたの命はないでしょう。」と言った。その時法師は又訪ねた。「あなたは今何よりも琵琶が好きだといいましたが一番嫌いなものは何ですか。」「鉄が一番嫌いです。蛇の身に鉄ほど毒なものはありません。」と言って女はどこへともなく去ってしまった。法師は、我が身一つより多くの里人を助けなければならないと、山を下って村長に昨日のことを語り、大蛇退治の方法まで教え又鎮守の前で姿を消してしまった。そ

の後には、携えていた琵琶と杖だけが残されていた。そこで村長は四里四方に御布令を出して、鍋釜といわず鉄気のものは何でも残らず持参させ、俄に鍛冶屋を建てて鉄の杭を沢山作らせた。それを村の屈強な者にそれを持たせて大里峠に登り、山中にそれを打込んだ。大蛇は一番の毒である鉄の杭を刺されたので、地を震わし、山を鳴らして苦しみ出し、七日七夜苦しみ続けたが。ついに息を絶えてその振動が静まった。再び山に登って見ると、大蛇の死骸は大里峠の山を７回半まいていたという。人々は山に火をつけてその死骸を焼いた。大内淵は尾打淵から変化したものであり、大蛇が死ぬ時に苦しんで尾を打振ったために、掘られて淵になったものだという。里人はこの災害から救われたのも偏にあの法師のおかげによるものと感謝し、琵琶と杖を法師の御しるしとして関谷村も鎮守に合祀し、蔵の市の字を取って大蔵神社と称した。殺された大蛇はその後しばしば大里峠を通る者に祟り、突然大嵐を起こしたり、山鳴りをさせたりするので、峠の上に石碑を建てて大里大明神社として祀りその霊を慰めた。大里峠を掘ると今でも蛇骨が出るそうであり、それは傷薬になると言われている。

一方関川側の言い伝えはこのようなものでした。

大里峠の大蛇（関川側の言い伝え）

　女川村の蛇喰村（じゃばみ）にお里という女が居りました。子どもはなく、夫は猟師をして生活をつないでいた。ある日夫は大蛇を撃ちとってその肉を甕（かめ）に味噌漬けにし、当分の間この中を見てもいけないし、食べてもいけないとお里に注意し地中深く埋めてしまいました。３年経てば立派な食べ物になるからです。ところがお里はその中身が何であるか夫から知らされてはいませんでした。見るな、食べるなと言はれれば見たくなるのが人情です。夫の留守に、あれほどかたく注意されたにもかかわらず、見たさについ地中から掘り起し中をしらべると肉の味噌漬だった。香りもよいので一切焼いて食べてみた。ところが、今迄食べたことがなかったほどのすばらしい肉の味だったのです。気づいてみるとかめの半分くらいもなくなっていました。だがのどがかわきしようがありません。小堀に口をつっこみ飲みましたが、これで沢山にはなりませんでした。すぐ近くの荒川に行きがぶがぶのみました。ふと我にかえり水面にうつった自分の姿を見て驚いてしまいました。自分が蛇に変わっていたのです。お里は家に帰ることができなくなり、大蛇となって、今の蛇くずれを上り大里峠付近の山に横たわりました。７つの山をかこむ位の大きな長い体になってしまいました。今の大里峠に住みついたわけです。ある夜、盲の法師が小国の方から大里峠を越えようとのぼってきました。頂上付近の木の側（木の穴のあいた所）に腰をかけ一休みしました。さびしまぎれにシャミをひきはじめました。真夜中になって、きれいな声の女が近づいて話しかけました。「あまりシャミが上手なので聞きに参りました」と、法師といろいろな話しをし、いつか自分の身の上話をしていました。最後に他言はならぬとかたくいいわたし、もし他言したら貴方の命はないばかりか、この辺一帯を水の海にしてしまうと言って立去りました。やがて法師は下関の渡辺三ヱ門方に立寄り、その話しをつたえました。そこで大蛇退治をする相談になり、かじ屋敷で鉄棒をつくり、これを山に打ち込み大里の大蛇を退治しました。法師も死んでしまいました。法師のシャミと杖は大蔵神社に本尊様となりまつられている。付近では蛇骨（蛇石）と呼ばれるが石膏石が採取できるそうです。蛇石はあかぎれの薬になるといわれています。米沢方面の人々には効きが良く、関谷方面の人々には大蛇を殺した祟りで効用がないと言われています。

以上の言い伝えには所々相違点が見られます。特に気になったのは、蛇を塩漬けにした部分です。関川村（新潟県側）では味噌漬けとなっています。調べていくうちに本町地区にこんな話があることがわかりました。　　　　　　　　　　　　（小国郷・本町地区の伝説集）より

小国の村夫

草刈りに行った小国の村夫は、あっちの山こっちの山と歩き回って、ふと一本の細道を歩いていくと道の真中に松の木のようなものがあったので、近寄ってみると、毒蛇で背には黒い銅銭の模様は確認出たが、頭と尻尾は、藪の中なので長さは分からなかった。３～４尺の木を鎌で切って「えい、この憎い奴」と力一杯に叩くと藪の中から頭をもたげ、その頭は祭獅子ほどあった。両耳が高く突き出て、目には金がたたえてあるようで、口からは盛んに毒気を吐き出していた。彼はいまこそと頭を力一杯叩いてやろうとしたが、その頭を見てすっかり気が抜け、どうせ蛇のほうが早いに決まっている。こうなれば、と棒を持ち直して打ってかかり、ぐったりとしたところを大石でとどめをさしたときに、越後から山師がやって来て、これを見て見世物にするといって塩漬けにして持っていった。

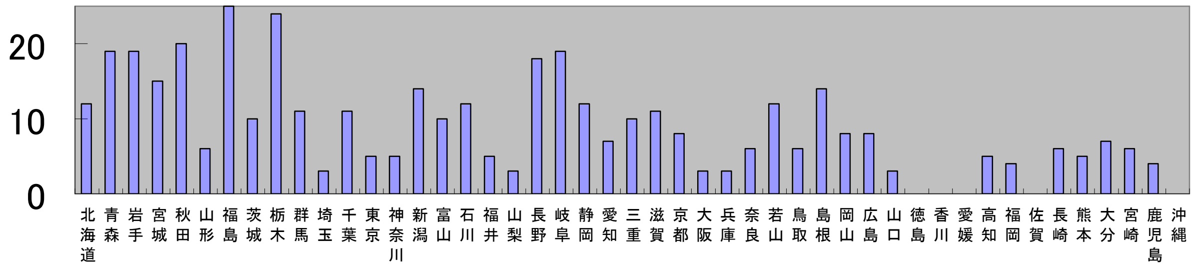
保存する場合、やはり塩漬けや味噌漬けを思い浮かびましたが、特に海岸を持つ羽越では塩が身近で、四方を山に囲まれた小国では豆から作る味噌が主流と思われたのですが、逆になっているのは疑問でした。詳しく聞いてみると小国でも味噌漬けと聞いている人もいて言い伝えそのものが不確かでした。当時は村の外に行く機会が少なく（特に大里峠は関所もある羽越国境でもあり容易に行けなかったこともあり）隣村の情報も乏しく、互いの隣村のこうだろうという思いを互いが話していたのではないかと考えたものの、もう少し詳しく調べる必要があると感じました。

左上　：渡辺競さんにお聞きする
中央上：岩穴の内部
右上　：物語を話す渡辺競さん
下　：玉川太郎が投げた石の前で

Ⅱ　蛇と名の付く土地

蛇喰村（じゃばみ）という地名が登場しました。蛇はあまり好かれない動物なので名前としてはあまり使われないような感じをあり、全国でどの位あるものか調べ表にしました。

（地図で見る日本地名索引より）



結果は意外に多く、特に東北地方に多いことがわかりました。

では、なぜこのように東北地方に多いのか考えてみました。

・　山林が多く蛇が実際に多い。

・　蛇を崇拝し敬う文化がある。

・　蛇行といわれるように林道や大きな川など、地域に曲がりくねっている目立つものがある。

などの意見が出ました。

実際にその名前の由来を調べてみると他に

・　地滑りした地肌が蛇の鱗のような見た目であることから、地滑りを起こすような急斜面を持つ土地には（蛇・じゃ）が付く傾向があることが分かりました。

確かに、山菜や山の動物が物語に多く登場する背景には山の存在があるものと考えられます。では、その数々の物語が、山を持つ土地柄に影響よるものとすると、地元にそびえる飯豊山そのものにも昔話があるかもしれない。と思い調べた結果、山岳信仰にまつわる話しは特に多いことがわかりました。　（飯豊山の山岳信仰より一部）

飯豊山にまつわる話
神代の頃、天照皇大神が天上を散歩し下界の風物を楽しんでいる時、かねてから豊葦原に（中の国）があると聞いた事を思い出し小手をかざして眺めて見たところ、それはそれは立派な国があるのでした。さっそくその国に保食神をつかわして、神の国から飯を出させて国を開きました。これが飯出、飯豊のはじまりと言われています。この神様は食物の祖神であって、主福神とも食稲魂神とも、また宇賀神とも御膳持若宇賀売命とも稲荷大明神ともいっております。飯豊山を中心にした土地は、米の多い国つまり米の沢と言うので、後の人々は米沢の国と名づけたそうです。 またこんな話もあります 昔、箱の口集落の猟人と、飯豊町高峰集落の猟人が飯豊山に猟に行きその美景と神秘さに心を引かれその地に神を祭ることにした。これをきっかけとして、飯豊山は山岳宗教の地として栄え、多くの参拝登山者が登った。この山は、女人禁制の霊山であり。飯豊山に参拝登山する人は、必ず２１日間、毎朝水垢離をすることになっていた。（水垢離【みずごり】とは、朝きれいな川又は泉に行き、水を浴び身体を清める事）精進料理を食べ２１日間は禁欲生活をつつしまなければなりません。そして２１日間努めた者だけが、飯豊の御山に登ることが許されたと言われている。

地区に伝わる話しでは

箱の口の人と飯豊山
箱の口集落の人が、御山に登山するときは、御山を開いた人が箱の口の人という事から、２１日間に及ぶ水垢離と禁欲生活がたった７日間で済み、かつ、精進料理はするが登山前には必ず、鰊（ニシン）の煮た物を食べる事になっていたという。 それは高い山に登る時には、体力をつけて登れと特別に神様からお告げがあり、箱の口集落だけの人達が、神様から許されていたという。 又、登山時に箱の口集落の人々がその一行に加われば絶対山は荒れないと言われていた。その他、箱の口集落の人が登山する時には必ず家に酒を作って登ったという。 そして、その人が登っているうちに家にいる人がその酒をあけてみると、不思議に、絶対この酒は失敗しないと言う。集落の人達はこれも農作神様のおかげだと言っていたそうである。 箱の口集落の人々が御山に登る時、必ず米を背負って行った。一行の中で疲れや、病気のため、倒れる者がいると、その人の頭に米をかける。その人はたちまち元気になり、一行に加わって登山できたという。

まとめ

地元には有名な霊峰飯豊（いいで）山系がそびえており、その山は（飯が豊か）の名の通り稲作には欠かせない保水の役割を果たし農業水の安定した供給を担ってくれる、昔からかけがえのない存在であったのでしょう。さらに、ダムもなかった当時は、雨が続き山の持つ保水能力を超えた時、その大きな山の抱える保水量は洪水という形で現れ、家や小屋を容易に飲みこみ、牛や鶏といった家畜が鳴きながら流されいく。そんな光景を目の当たりにした時、底知れぬ恐怖心があったのではないでしょうか。水面に浮き、流される様々なものが鱗のように見え、水かさが倍にも増し泥水となり、蛇行しながら荒れ狂い流れるその光景を蛇の移動のように例えたのではないかと思いました。

恐怖の話や感動する話、面白い話というのは良くも悪くも心に残ります。そして私達もそうですが、そんな話はどうしても人に話したくなるものです。しかも、より面白く、より怖く聞いてもらうためにいろいろ背景が加えられるはずです。大筋の話があり、それがその土地その土地で脚色されていったと思われます。

一方“大人との約束を守らないと○○になる、子どもたちだけで川で遊ぶと○○に襲われる”などという、子どもへの戒めや、注意をひき教え諭す為のシンボルとする意味もあったのかもしれません。結果、広大で自然溢れる山の麓の村では、豊かな生活・健全な家庭が営まれており、家族の手伝いをしながら、また囲炉裏を囲むなどして物語を話すことで世代の違う子どもや孫とのコミュニケーションもあった理想の家族像が確立していたのではないかと思いました。

ストーリーを持たせることで文字として残さなくとも、話し（言葉）として伝えていくことができる。その上「教えられ、教える」ということを意識させないまま自然に伝わるというプロセスを持った、口承文化とは家族や地域の思いやりが詰まった素晴らしい伝承方法だと感じました。

Ⅲ　紙芝居作成

これまで調べてきた物語を実際に読み聞かせをして、実演を披露したいと話し合いました。しかし、私たちは後藤さんのように１人で何役も演じられない。また、長い原稿もスムーズに話せない、等の意見がでて、【語り】ではなく【紙芝居】を作成する事にしました。

当初パソコンを使って「デジタル紙芝居」と称し、挑戦するつもりでしたが、初心者の私達が手探りで始めから行うには時間がなさ過ぎるという理由で通常の紙芝居で表現する事にしました。

（参考：名古屋柳城短期大学・こども文化と紙芝居プロジェクト実行委員会）

① 紙芝居を作る

ⅰ. 脚本（テーマを絞る）

作りたいテーマを絞る・登場人物の会話を考える・演じやすいストーリーにする。

ⅱ. コマ絵（展開のダミー作り）

紙芝居の展開のダミー作りをする＝「箱がき」・コマ絵で見て流れを検討する。

ⅲ. ひな形

（画面の）抜きの効果を検討する。

ⅳ. 試演

ひな型の紙芝居を演じて見てもらい、感想を聞く。

Ⅴ. 本書き

紙芝居のサイズの紙に本書きする。

② 紙芝居を演じる

ⅰ. 下読み

作品の組み立て方や、登場人物の性格や出来事などを掴む。

ⅱ. 声（せりふ・語り・擬音）

言い方次第で登場人物の心の動きや状況を観る人が感じるようにする手法を学ぶ。

・嬉しい時（やや高めの声で明るく）　楽しい時　（明るくはずむように）

・怒っている時　（強く早口）　　　　悲しい時　（弱く・ゆっくり）　など

ⅲ. 間（ドラマを生かす）

・期待させる間・・気持ちを誘い込む。

・余韻を残す間・・情感を漂わせる。

ⅳ. 抜く（動かす）

情景やテンポに応じて（普通・ゆっくり・はやく・さっと・途中でとめる）など

まとめ

様々な紙芝居の手法を学ぶことが出来ました。幼稚園時代よく見た記憶がある紙芝居がこれほど奥深いとは思いもしませんでした。しかし計画する段階で時間がかかり思い通りに進めることが出来ませんでした。その間幼稚園が夏休みに入り、結果都合が合わず実演できませんでした。

Ⅳ　現地調査

①関連深いもの

ⅰ．越後街道（新潟では米沢街道と呼ぶ）

置賜（山形県）と越後（新潟県）を跨ぐ政治産業道・生活道として利用されていた。以前は小国からのルートは（小国～古渡～田代峠～ハッロ～沼）だったが
この道が出来たことにより（小国～足野水～玉川～大里峠～沼）にルートが変更される。

この街道は峠が多く１３もの峠を有していた為、１３峠と呼ばれている。明治１７年ごろ県令三島通庸によって小国新道が開設されたことにより人々の生活から遠ざかり荒廃していった。

当時物流は米沢からは、たばこ・青そ・小豆・ぜんまい・わらび・栗などを移出し、越後からは乾物や塩魚、珍しいものでは石油などが移入されていた。

またイギリスの旅行家イザベラバード女史は、この越後街道を下越方面から置賜盆地へ通過した。当時の様子は著書「日本奥地紀行」の中で紹介されている。

ⅱ．大里（おおり）峠

大永元年（１５２１年）に伊達植宗が開いた羽越国境の峠。その後、越後街道が整備されることになる。大里峠は標高が４８７メートルで宇津峠に次ぐ難所とされ新潟と山形の県境に位置し、当時、その道中には【助け】と呼ばれる宿屋兼茶屋が営まれていた。その跡地が今でも存在する。

また、明治７年には畑集落から銅鉱が発見され明治３５年に採鉱精錬が開始される。戦争によって銅の需要が急激に増え昭和９年には 300 人程が働いたが終戦を境に閉山となった。

山頂には大蛇伝説に基づいている地蔵堂があり大里大名神が合祀されている。大里峠という名前の由来は多く存在するが、大蛇伝説に関する一説では、大蛇さえ尾を折っていくほどの山道という意味から（尾折る→尾折り→おおり→大里）となったと言われている。

ⅲ．渡部邸

国の指定重要文化財とされている渡部邸は、財政難に苦しんでいた米沢藩に融資、幕末まで総額１０万両以上を用立て、急迫の同藩財政を救った豪農であり豪商の大庄屋である。全盛期には７５人の使用人がいたといい、1000 町歩（約 1000 ヘクタール）の山林を経営し、700 町歩（約 700 ヘクタール）の水田から約１万俵の小作米を収納したと伝えられる。

ⅳ．大里峠と渡部邸

大里峠には大里沢川に沿って古道がある。長雨時にはぬかるみも多くでき、荷の運搬等に支障をきたしたため、この普請は渡部本家にとって積年の計画であった。（大里峠以降の山形県側の一部の峠は米沢藩が藩の豪商や在郷有力者に人夫を供出させ敷石工事を実施した。）工事は 1851 年に始められ道幅６尺を３間に広げ、崩れた部分を切り開き、掘込み、道の左右に水流しの細掘を付けた。また長さ４尺・厚さ５寸の切石を 2360 枚を敷き詰めたこの事業に当時約 5000 人が携わった。とされている。

②　現地を歩く

ⅰ.玉川太郎の投げた石と山賊が隠れた岩穴

２００９年６月　２日　渡辺競さんに案内をしていただきました。

ⅱ.渡部邸

２００９年６月２３日

見学時には「平成の大修理工事」が行われており、床が外され土間がむき出しでした。大里峠の大蛇を退治しようと村人が集合し、鉄の杭を立てる計画を練ったと言われている母屋を見学し、ここの大黒柱はじめ各柱、天井の梁材は、ケヤキの巨木良材で組まれていることを教えてもらい、今回の工事で大黒柱の床下の部分が継ぎ足しされていたことが分かり関係者の方も驚いたことをお聞きしました。これから畳が敷き詰められると床下は一切見る事が出来なくなるということで本当にタイミングが良かったと思いました。普段は立入禁止の区間である２階から見下ろす、江戸時代中期京都より遠州流庭師を招き構築されたといわれる庭園は、現在の庭園と比べても豪華で、数々の草木が整然と植えられ、それらは丁寧に剪定されていました。藩にまで融資することのできる豪商と呼ばれた人たちの生活を顧みることが出来、今の時代に生まれていなかったらここには一生足を踏み入れることが出来なかっただろうと痛感しました。

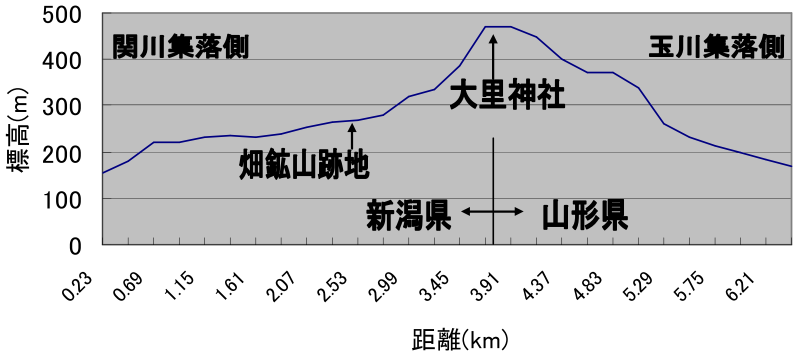
行　程：学校～小国駅～越後片貝～ 畑鉱山跡地～大里峠～大里神社～玉川集落～学校

ⅲ.大里峠

２００９年７月３０日

渡辺さんの案内で大里峠を歩きました。昔は山賊が隠れていた事を聞いた事もあり、うっそうと草木が茂る山道は少し不気味でした。途中、山ゆりが数多く咲き乱れている箇所や当時栄えていた畑鉱山の朽ち果てた外壁など。ここが生活道であった事を感じながらみんなと歩きました。ここはイザベラバードも歩いた道であることを聞き、どんな思いでこの風景を眺めていたのかと考えたりしました。結構険しいところもあり、ここが唯一の道とはいえ盲目であった、大蛇伝説に出てきたお坊さんが本当にここを歩けたのかとも思いました。旅をするそのお坊さんも実は、好奇心旺盛な冒険家だったのでしょう。頂上には事前に調べた通り神社があり、中を覗くとお地蔵様がそなえられていました。その前掛けは新しく、掛け替えてくれる人がいる事がわかり、その思いに少し嬉しくなりました。小雨の降る中でしたが皆で声を掛け合い、最後まで諦めず踏破することができました。

今回歩いた
大里峠の高度差表



Ⅵ. 調査を終えて

毎年、夏に関川村では「たいしたもん蛇（じゃ）祭り」ということでギネスブックにも認定されている、わら細工の大蛇をかついで練り歩く祭りが行われます。（今年は８月２８日～２９日）実は地元ではその大蛇が洪水から守ってくれたということになっており、多大な損害を蒙った羽越水害（８月２８日）の日にちなみ、その大蛇の全長を８２．８メートルとしその教訓を忘れないようにしているそうです。

この大蛇、①今回調べた大里峠の大蛇と関係しているのか？②大蛇になった【おりの】の野望、大きな湖を造ろうとした事と、この洪水の話はつながっているのか？というところまで知りたかったのですが、そこまで及びませんでした。今後、その関係性も明らかにしたいと思いました。

今回の調査を通して蛇に関する話が多いという理由は、その容姿・動きが不気味であったがゆえに印象深く、また、何か神聖な存在を感じさせる部分があることが要因ではないかと思いました。好きや嫌いはともかくとして、当時人は今以上に生活していく中で動物や自然（山の恵み）はとても身近な存在であったことがわかりました。環境整備がきちんとされている現在では野生動物は、昔ほど多く見られなくなったとお聞きします。とても残念なことです。

小国は野生の動物が数多く存在する自然に恵まれた環境だと思います。しかしこれは人間のエゴが少しあるのかもしれないと感じました。それは、人間の生活の利便性を優先させた結果、動物たちの生活空間を限定してしまい、棲みかを追い出された動物達が今度は、温暖化による気候の変動でエサ場としていた場所を、今再び追い出され、エサを求め人間の生活範囲まで侵入しトラブルをおこす。そしてそんな場合、必ず一方的に動物が侵入者とされ非難されてしまうからです。動物たちにとっては過酷な状況です。今回調べた話にも動物達が数多く登場しました。どの種も欠けてはなりません。そんな大切なこの生態系をこのまま維持し、後世に言い伝えられるように環境問題にも強い関心を示さなければいけないと感じました。

最後に、調査を初める前は、私達が居なくなっても人間が存在する以上、伝承文化は生き続けるものだ。と、さも他人ごとのように感じていたのですが、しかし、自分も実は中継人であり、人の思いやる気持ちがないと、簡単に消えてしまう事もある、本当はか弱い側面を持つ存在であることに気がつきました。

私たちができる事とは何か？正直、今はまだ分かりませんが、今回調べていく中で学んだことを基盤とし、探求し続けていくことからまずは始めてみようと思いました。

今回の調査にご協力を頂いた関係者の皆様　ありがとうございました。

（平成２１年度レポートより）

10. 小国町の峠街道（平成２２年度レポート）

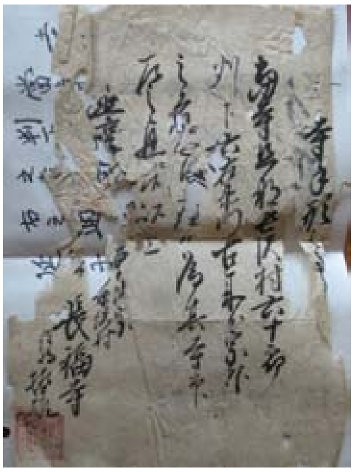
船山　澪　舟山香菜子　小関真奈　齋藤麻未　伊藤悠飛

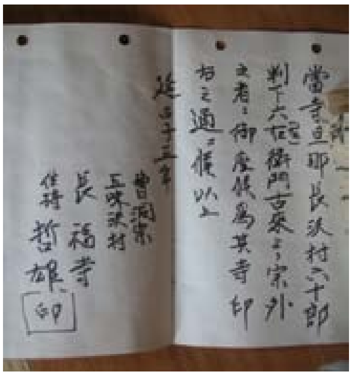
Ⅰ　北部の街道

１柳生戸街道（やなぎよど）

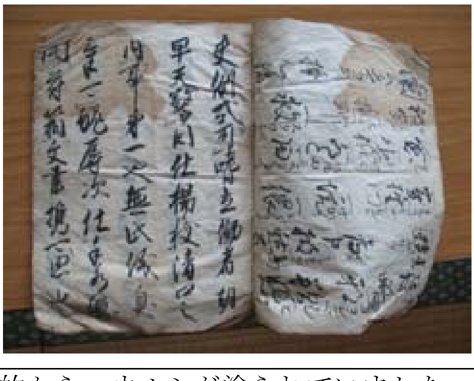
今年学校のＰＴＡ会長をなされている髙橋義彦さんが北部地区にお住まいということで北部の歴史に詳しい安部文雄さんをご紹介していただきました。安部さんは昔から北部の長沢にお住まいで、家の土から見つかった刀を始め歴史的遺産を所有されている方でした。お話を伺う際に当日は安部さんのお知り合いである、小国の歴史を調べられている増田剛雄さんにも参加していただき塩の道について北部地区のコミュニティセンターで詳しくお話しを伺いました。

北部地区の歴史の聞き取り風景





安部文雄さん宅に代々伝わる古文書を見せていただきました。
関所を越えるに必要であった、江戸時代の寺手形（左）とその訳（中）
そこには北部地区の寺の住職をされていた方の名前が記載されていました。



なお古文書の表紙には紙の補強や虫除けという目的から、ウルシが塗られていました。
北部の五味沢地区はウルシが多く取れ会津塗（福島県）と時期を同じくしてウルシを施した木地づくりが盛んであったことをお聞きしました。一時期、途絶えてしまったのですが、地元の方のはたらきかけで、地区には「白い森木工館」と呼ばれる木工体験ができる施設ができました。

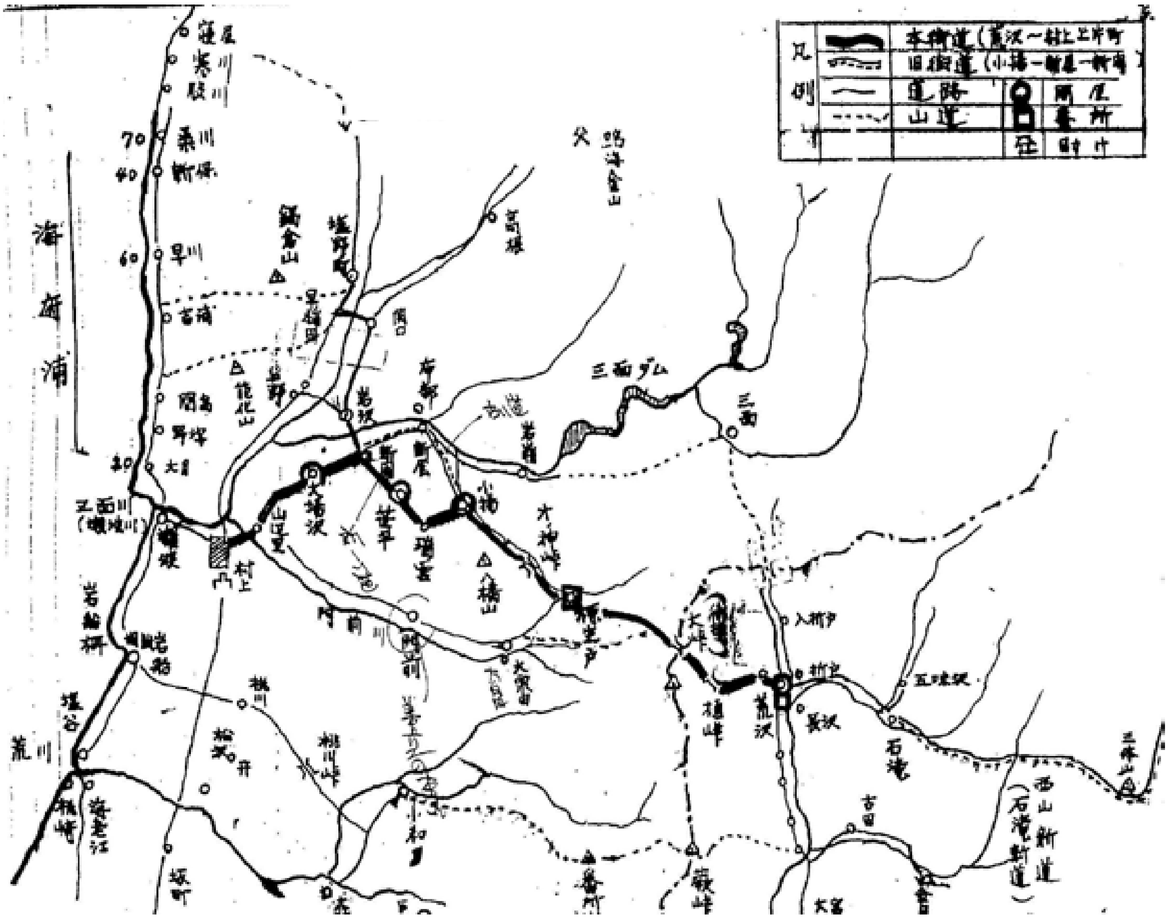
小国を経由する主な街道（柳生戸街道（左上）石滝新道（右上）越後街道（下））

山形県の交通史　より

柳生戸街道（新潟県村上－笹平－小揚－柳生戸－大峠－相平－小国町荒沢）

柳生戸街道は俗に「塩の道」と呼ばれていました。「塩の道」とは新潟県村上から塩や海産物、山形県小国側からは米沢藩から引き継いだ煙草などの交流があったことからこの名がついたといわれています

六ヶ字地区塩の道保存協議会資料より



県境に位置し戦前には往来が途絶えたこの柳生戸街道を調べるために、平成２年に小国町・朝日村の方々が集まって「いにしえの道・柳生戸保存協議会」を設立、町内の渡部徳太郎教育長を講師に招き「塩の道サミット」と称し村人が集まり勉強会も開催し、調査団（小国町側踏査団）も結成し調査を行い、その後は定期的に修復活動を行っているそうです。

柳生戸街道付近の絵図

番所	慶安３年（西暦１６５０年）には 玉川・上荒沢など１２か所あった
助け（救助小屋・避難小屋）	相平と呼ばれる場所に設けられ 季節的に主に冬に利用された。スノー小屋
問屋	江戸時代、宿場で人馬の継立をした事務所 牛宿・旅人宿を兼ねるものも多かった。
大峠	標高６５９メートル「お境」と呼ばれていた （国境ではなく・地形的見地から）
道陸神（どうろくじん）・道祖神	交通不便な時代、旅人の安全を守る神。 村端・分かれ道・橋などに祀られる。

いつ造られたかは定かではありませんが、江戸時代荷役を行った場所として荒沢の地名があることから

「荷改ヲ行ツタ番所ハ十二ヶ所デ玉川上荒沢ノ名ガミエル。」（慶安３年　上杉綱勝の時）

３６０年ほど前には交通の要所で村上藩と米沢藩の物資を結ぶ交易ルートではなかったかと推測されています。

峠道はまったくの山道で険しい場所では「１７曲がり」と呼ぶ坂があります。人が通るだけなら曲がりはこんなに必要はありませんが馬を連れて歩く為（馬だけでなく牛も通っていた記録がある）に多く設けられ傾斜を緩くしているということでした。標準的な荷の持ち方は背中に一俵、両脇に一俵ずつの計３俵分の荷を持ち、峠を行き来していたそうです。樋ノ峠と呼ばれる山には道陸神（どうろくじん）が祀られてあり、山に入る際そこに１本の木の葉を置き、帰りにそれを回収する。現在何人が峠を通っているのか？無事下山したのか？などがわかる仕組みになっていて、いわば現代版、登山者名簿的な役割も果たしていたそうです。その他途中には馬や牛がのどを潤すための水をためていた直径５～６メートルほどの穴があったそうです。

新潟県との交流があった名残として今も益田・原田・斉藤家の一族が残っているといわれ、問屋という屋号のもつ家は、そこで品物を取り次いだ事にちなんで名付けられたそうです。さらに当時の村の仏壇のほとんどは村上で作られたもので、街道を人の背に乗って運ばれてきたといわれています。

現在の塩の道街道小国側登り口。行く途中には「熊出没注意」の看板を多く目にしました。

廃道となった原因は「米坂線」が今の場所に引かれたことが影響していると考える方が多く（塩の道ルートに旧国鉄（現ＪＲ新潟坂町駅⇔山形米沢駅線）を通す計画もあった）開通後、目に見える形で人の交流を含む物の流れが大きく変わったそうです。「道路も沿線に発達し塩の道はその役割を終えてしまった。」とお聞きして少し悲しい気持ちになりました。もし鉄道がここを通っていたなら、それに沿って車道ができ、民家や商店が増え、人の動線が変わり、現在より良くなっているのか、悪くなっているのかは想像がつきませんが、今の小国町は大きく変わりずいぶん違ったものになっていた事でしょう。クレオパトラの鼻の高さの話の様に町づくりの基盤となる土地の整備というものは、次世代に渡り住人の生活に大きな影響を及ぼすという事実。土地改良という公共事業を進めるには発展・町おこしなどのメリットと、その管理・維持、そして今は地球への負担も考慮し将来を見据えた考え方が必要だと強く感じました。

柳生戸で運んだとされている物資

米沢方面へ運ばれる荷を「上り荷」、越後方面へ運ばれる荷を「下り荷」と呼んだ。

・上り荷は　塩、鉄、肴（魚）類、茶などの海産物。

・下り荷は　青苧、たばこ、ローソク、灰荷　などであった。

塩	・日常的な必需品である塩は当時作るのが非常に難しいものであった。 ・製塩の際、火を燃すに使用する大量の木材は、山から刈り、川を堰き止め、水量を増させた川に流し瀬波の方へ運んだ。 ・海府浦の製塩法は独特で釣釜式と呼ばれるものであった。 ・慶応２年の塩の税金（瀬波郡絵巻）より 製塩所／桑　川：７０俵、新　保：３０俵、早　川：６０俵、大　月：２０俵（税　金）
鉄 （御用鉄）	・大部分は越後街道（１３峠）を輸送した（天保５年の文書）がこれ以前は柳生戸街道（大峠）も利用された。 ・鉄は、米沢藩では専売制で、他の諸藩と同様、自由販売は認められなかった。「御用荷物」として厳重に取り扱われた。米沢城下と小国に藩の鍛冶屋が置かれ、農具や刃物が作られた。
魚 （秋味）	・乾魚・塩魚に加工し村上からの他出の８割を米沢領へ輸入、幕末の米沢藩の台所を潤したとされている。
茶 （村上茶）	・村上茶は茶の北限といわれていた。 ・起源　村上上町徳光屋土田覚左エ門　元和元年（西暦１６２０年）伊勢参宮に行き宇治の茶の木を見て種子を持ち帰ったといわれている。 ・（宝永元年（西暦１７０４年）９月２２日の書付）より米沢領内へ輸入。

製塩所	桑　川	新　保	早　川	大　月
税　金	７０俵	３０俵	６０俵	２０俵

青苧 （苧麻・からむし）	・庶民の衣料の原料として古くから栽培される。 ・下長井地方　特に白鷹地区（箕和田・萩野・十王・畔藤）が盛んであった。
たばこ	・米沢にたばこが伝わったのは慶長１５年（西暦１６０５年）とされる。 ・当初は医療効果があるとされた。 ・鷹山公の国産奨励（米沢里人談）
灰荷	・織物の染料の際、使用する。 ・新潟は山辺里織（さべりおり）山北科布（さんぼくしなぬの）五泉平（ごせんひら）など織物が有名で良質な水と生糸となる繭の生産に恵まれている。

数年に１度峠の下刈りが行われ、今年は実施年であることをお聞きし、７月下旬に行われる下刈り日にあわせ私たちも参加させていただこうと準備をしていましたが、今年は例年以上に熊の被害が多く、多数目撃もされていることから私達には危険と判断し断念しました。残念でしたが機会を見つけ、いつかみんなで歩こうと話し合いました。塩の道からはルートが外れるのですが三面にはダムがあり、そこまでは未舗装ながらも小国側から車で行くことができるとの事でした。

２　西山街道（西山新道・また小国では石滝新道と呼ぶ場合がある）

小国から朝日連峰を挟んだ東側に位置する長井市があります。そこはかつて最上川の舟運で栄えた町でありました。

慶応２年（西暦１８６６年）この年、幕末の世情不安に追い討ちをかけるような凶作であり、物価が高騰していました。

> 「諸品ますます昇り、新米一俵１９貫５百文ぐらい。中折（なかおり）１帖４５０文。品物によっては４倍より１０倍ぐらい。値段を聞いてためいきをつき、目玉をきらめかし、ただそっとしばらく立ち見るばかりなり。」　「歳々風雨物直咄集」より

そんな中、酒田（庄内）から左沢（あてらざわ）まで最上川の航行権を握る酒田の商人達は、足元を見るかのように船賃の値上げを要求しました。

> 増銭として１００両相当の品に４両２分（４．５％）の手数料　「長井市史」より

それに対し、長井の商人は怒り心頭、別ルートを模索したとされています。

物資を越後の瀬波港へ降ろして、そこから陸路で長井（小出）に輸送する。そして将来は山形や仙台方面への貨物輸送の中継ぎ基地にしようという案を出しました。「小国まで行けば瀬波まで柳生戸街道（塩の道）があり、長井（小出）からは明神平（野川の奥）までも道はある。あとは明神平から小国（石滝）までの道を開拓すればよい。」と、長井の商人たちは自費で切り拓きました。

手続きに藩の許可（幕府の承認）を得る際、当時の幕府としては幕府の危急存亡が目の前の問題であったためか、幕府は「好きな所へ、好きなように作れという異例の返答であった。」とされています。（ただ投げやりではなく、藩からも協力は得ていたようです。）

> ただ、会談所（六老の詰所）・御金蔵（一藩の現金の出納及び管理にあたる）・御役所（役所役と称し奉公の下にあって藩全体の庶政を司る）に対し、三ヶ村（下長井・小出・成田）より願い出た開鑿という大業に対して各所協力して時折出勤して、万端手落ちなく。と指示し小国役屋にある蔵米の払米１００俵のうち、９７表（米代と駄賃分を合わせ１８５１貫３５文に相当）を新開人足の夫食分として与え、さらに１０月には出勤役人の賄料４１８貫２９０文と御手当銭２５０貫文を金蔵より小出村の元方に支払う。
>
> 「長井市史」より

米沢藩にとっても、経済的・軍事的な重要性があったということでしょうか。

> ・工事は慶応３年（１８６７年）（雪解け後の４月着工）５月～８月
> ・総工費３１４５４貫文余りそれでもなお２５４貫文余の現金が残った
> ・工事人夫（土工）述べ１５２００人　村方人夫（百姓）約４０００人
>
> 助け小屋の解体中に下敷きになり亡くなったものもいた。その時香典として金三両が送られたとの記録がありました。（時価にして米一俵とされています。）
>
> 「新道御普請諸入料、金銭受払総目録」より

また、この時、山形城下きっての豪商で山形藩の御用達商人をも兼ねる長谷川吉郎次が新道開削に元手を出すという話もあったが、他国より元手を受け取っては、将来に必ず禍根を残すということで、これを断った。と記している。「歳々風雨物直咄集」より

新道は小出を起点として全行程約６４キロそのうち、改修すべき区間は「入野川－明神平－折草－蛙沼－姥獄－三体の腰（三体山）－二本木－三体裏－丸山－篠平－金目川－石滝山－石滝川石滝元村－五味沢－荒沢」でおよそ２４キロにも及んだ。

入野川から明神平までは山道の手直し・石滝村から荒沢までは従来の道の曲がりを直し、幅を広げる。一部改修工事のような箇所もあった為「古道相開」と記されているものもある

初めに開削工事の基地となる夫陣小屋や新開小屋が、折草・婆獄・笹平・金目川・石滝村の５か所に作られ、最上方面からは新開頭として６人が迎えられた。

工事の人足は下長井と小国方面から、すべて有償で集められ、従事した作業の難易によって日料の代銭が与えられた。

また要所に荷物をつけた牛の交換ができるように「牛除場（うしよけば）」（待避所）を５５か所、橋は新たに８か所架けられ、「助け（救急小屋）」も三か所（二本木・金目川・石滝山）設置され、無事新道は開通した。

下長井川柳の第三世を継いだ緑庵加藤雅外の書いた「西山新道細見」が次の絵図です

（武田清五郎氏（小出）・佐々木嘉兵ヱ氏（成田）蔵）より

西山街道の鳥瞰絵図１（石滝山（右）～五味沢（左）までの道のり）次頁との続き絵を２分割

西山街道の鳥瞰絵図２（五味沢（右）～荒沢（左）までの道のり）

西山街道の鳥瞰絵図３（長井側から小国側を望む　三体山（上）～入野川（下）の道のり）

西山街道の鳥瞰絵図４（小国側から長井側を望む　二本木（右上）～金目山（下）の道のり）

「新道は宮・小出から平山村に至り、入野川から急坂を明神平（この間１里）に登り、ここで中村あるいは大平からの道に合し、明神平から下り坂を折草におち、再び登り坂を蛙沼の脇を通って、三体山の裏側にある二本木（明神平・蛙沼　間１里、蛙沼・二本木　間１６丁）に出て二本木から丸森・丸山・篠平・中平・逢平を下って金目川の橋（二本木・金目川橋　間２里半３丁）に金目川の橋からの登り道を行き金目山を越えて石滝山（金目川橋・石滝山間２２丁）に出て、下り道を石滝川の橋（石滝山・石滝川橋　間３４丁）に至り、ここから平地で石滝・五味沢・五味沢川橋・太鼓沢・焼山を通り荒沢の関所（石滝川橋・荒沢間２里）に着く。荒沢からは樋の峠を越え柳生戸を通り村上まで９里の道のり」と記録されています。

しかし完成から２ヵ月後の慶応３年１０月、時の将軍徳川慶喜は大政を朝廷に奉還し、徳川幕府は終わりを告げる。

年を越した明治元年（西暦１８６８年）戊辰（つちのえたつ）の年、薩摩・長州を中心とする官軍は正月３日の鳥羽・伏見の戦い旧幕軍の討伐に乗り出し、ついに戊辰戦争となり東日本全体を巻き込んでいきました。４月に江戸城を無血開城、５月に幕府方の残党を上野の山で壊滅させた官軍は、新政府の威信をかけ、奥羽列藩同盟を結び、異を唱える新潟を含む東北諸藩に差し向けました。もはや賊軍となった東北諸藩に力はありません。

そんな時、村上方面に進出していた米沢藩の敗走の報とともに、ある噂が流れた。「官軍の総大将、西郷隆盛が、西山新道から攻めてくる。」 人々は慌てて行く手を遮るため、土手を築き、西山街道に架かる橋を落とし、大木を切り、道をふさぎ官軍の来襲に備えました。

明治元年８月２８日、米沢藩は降伏した。結局官軍は西山新道を通らず、越後街道（十三峠）を通って米沢に入ったそうである。

米沢藩は奥羽越列藩同盟を形成する雄藩として、北越に軍兵を派遣して官軍と対峙したが戦いに利なく大敗し退却せざるを得なかった。８月１１日官軍は村上や関方面に進出し、その先鋒は沼の手前にある榎木峠まで迫っていた。翌日１２日には榎木峠において両軍の間に合戦が行われたが、米沢藩はここでも敗れ、さらに後退し国境の大里峠に最後の守備陣地を構築した。

更に「歳々風雨物直咄集」の著者である新野伊三太氏はこの時、金目川の番兵を勤めていた。このことを次のように記録しています。

２２日には、総督千坂高雅が金目川に宿して、金目川の番兵に酒４升を与え、新道通りを巡回して諸陣地の番兵を激励。また２５日には世子茂憲が小国玉川から金目川に廻ってきて、新道の番兵を励ましている。世子一行はその日、平山村の天神寺に宿泊する予定であったが米沢からの早駕籠に接し、急ぎ明神平から大平を通って萩生村（現飯豊町）に下り、夜通しで米沢に向かった。

これは官軍からの降伏勧告書が米沢藩の手に渡されたことによるものではないかと推測されています。

明治に入ってからは宇津峠の開削を始めとする新越後街道の開通により西山街道は存在価値がなくなり、実用に供さることもなく、雑草の生い茂る山野に戻りました。それでも明治から大正にかけてはかろうじて道形をたどり新道を石滝方面に向かうこともできたそうですが、大正の末頃からは通る人もいないまま荒廃していったそうです。

この西山街道がもし明治の時代に十分利用されて縦貫道路としての面目を保つことができたのなら、小国だけではなく長井の町並みも変わっていたかもしれません。

Ⅱ　物資の輸送

１陸の輸送

当時の物資もしくは人を輸送する陸の経路と川の経路を探ってみました。

長井の商人は左沢周りの舟運を主に利用していた。その他に積荷を新潟・村上で陸揚げし小国経由（越後街道）で運ぶ方法もとられていたが、この道は牛馬駄送の上では、道幅が狭く、数多くの峠（十三峠と呼ばれるゆえん）などの難所が続き、大量の荷物を運送するとき際は不便で輸送費も決して安くなかったといいます。当時の輸送費はいくらだったのか調べてみました。

運べる量		
伝馬（てんま）	４０貫目	幕府領主の公用。無賃。
本馬（ほんま）	３６貫目 ～４０貫	公用及び諸大名が、定賃銀で使用する馬。 主として荷を付けて運ぶ馬。
軽尻 （からじり）		人が乗って荷を付けないもの。５貫目までの荷は許された。 人を乗せないときは、本馬の半分２０貫目までの荷。
乗懸 （のりかけ）		人が乗って荷物を付けたもの。 荷物は２０貫目まで。賃銭は本馬に同じ。
人足（背負子）		人が背負い運ぶ。荷物は５貫目（約１９ｋｇ）まで。超えれば目方に応じて払う。
慶長６年（西暦１６０１年）の定書より、伝馬荷物は１駄３０貫目、駄賃荷物は１駄４０貫目。 寛永２年（西暦１６２５年）には伝馬も駄賃馬も１駄４０貫文と定め、長く駄送の基準となる。		
※　当時、荷を運ぶ馬を【駄馬】といい、運賃を取って輸送する駄馬を【駄賃馬】と呼び、それを職業とする人を【駄賃馬稼】と呼びました。また、【伝馬】とは幕府領主の公用をこなすために宿駅で馬を乗り継ぐ馬のことを指しました。		
※　通貨と質量の単位に当時「貫」を使用し、その際、単位を区別にするために質量単位は【貫目】・通貨単位は【貫文】としていた。（明治時代に１貫目は３，７５ｋｇと定義）		

以下は越後・米沢間輸送の際、当時主要道であった越後街道（十三峠）の記録です。

宿と宿の間の賃銭は、それぞれ定められていました。

延享３年の覚書（井上清右ェ門）より

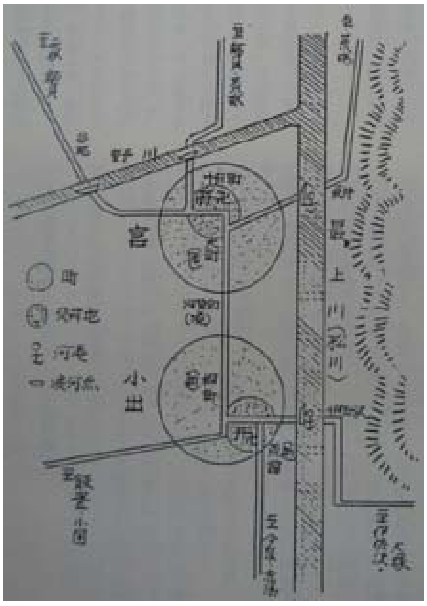
区　間		米沢 ～ 上小松	～松原	～ 手ノ子	～沼沢	手ノ子 ～ 白子沢	沼沢 ～ 市野々	白子沢 ～ 市野々	～小国	～玉川
距　離		３里 １２丁	１里 １９丁	３０丁	２里 ２０丁	３里	１里 ３０丁	１里 １４丁	２里 ２３丁	２里 ６丁
駄賃（文）	本馬	１３８	６８	３２	１７５	１９３	１３３	１１５	１５５	１６４
	軽尻	９２	４５	２２	１１６	１２９	８９	７５	１０３	１１０
	人足	６９	３４	１１	５９	６５	４４	３８	５２	５５
※　駄馬輸送の困難な冬季は、背負子（しょいこ）による以外なかったとされています。										

米沢から小国まで本馬で４０貫目（１５０ｋｇ）の荷物を運ぶとすると（網掛け部の和）７０１文となる。文政年間（１８１８～１８２９）の記録で１文が約１２円。８、４１２円　となる。

２川の輸送（舟運）

最上川上流の舟運（左図）は、元禄年間の舟路開削で発達しました。左沢（あてらざわ）もその一つで、そこには米沢舟屋敷（陣屋）をおきました。米沢藩の領内である最上川（当時は松川と呼びました）にも同じように陣屋・宮陣屋を設けました。糠野目（現高畠町）には陣屋はありませんが、米沢盆地内で川船が発着できるようにと整備はされました。なぜならそこは山形・上山方面に通じる米沢街道と交る場所で、米沢から松川舟運を利用するには最も近い所。という理由からです。しかし、水量の豊富な時期は限られていたため荷物の揚げおろしだけで川岸場商人の発達はほとんど見られなかったといわれています。

一方、松川の川岸として最も栄えたのは長井の宮・小出の舟場でありました（右図）。ここを流れる松川は、飯豊山から流れる白川と朝日山系の野川が合流し当時から水量も豊かだった事が影響し宮・小出は物理的にも経済的にも長井盆地の中心となったため、早くから長井を中心に６本の主要道が造られました。そこを起点として放射状に出ているその交通体系は現在も変わっておらずバス路線もこれによって編成されています。



・長井（最上川渡河）東山山麓経由　荒砥
・長井（野川渡河）成田　鮎貝（最上川渡河）荒砥
・長井（野川渡河）勧進代　鮎貝
・長井（最上川渡河）伊佐沢（最上川渡河）大塚
・長井（白川渡舟）今泉（最上川渡舟）赤湯
・長井　平野　飯豊　小国

当時たいていの物資は、荒砥舟場で積み荷を降ろし、翌日宮舟場で酒田からの送荷や、荒砥方面からの委託品を積んで帰村したといわれています。その後明治以降は道路の改修・新設、荷車の出現で明治２０年代に高畠・南陽方面からわずかの建築用石材運搬が主となり荷船は姿を消していきました。

明治１２年の舟運の賃銭　（山形県史）より

渡しの名	川の名	区間	用幅	渡銭（人・馬）
荒砥	松川	石那～鮎貝	４０間	６銭・８銭
小出下	松川	小出～森	３５間	５銭・７銭
小出上	松川	小出～伊佐領	４５間	５銭・７銭

調べていくにつれ、当然のことなのですが、今と変わらず昔もサービスに応じての対価が変動し、その中で身分相応の生活をしていたということが実感でき、そこで商売する商人と客との値切りなどの掛け合いもあったのかもしれないと考えると想像が膨らみ、とても楽しいものでした。

天明後の米一俵の価格表

「米に換算すると、」という表記が頻繁に出てきます。感覚を掴むために時代の価格を表にまとめてみました。新野伊三太「物資咄集」を参考に、明治以降のレートと記事を追加しました。

天明元年		金１７銭	１３年		金２０銭
２年		金１６銭	１４年		金１８銭
３年	天明の大飢饉	金２２銭	文政元年		金１６銭
４年		金２０銭	２年		金１３銭
５年		金１８銭	３年		金１２銭
６年	大雨洪水	金２２銭	４年		金１３銭
７年		金１７銭	５年		金１４銭
８年		金１６銭	６年		金２１銭
寛政元年		金１５銭	７年		金２６銭
２年		金１２銭	８年		金１８銭
３年		金１５銭	９年		金１６銭
４年		金１５銭	１０年		金１９銭
５年		金１５銭	１１年	越後地震	金３６銭
６年		金１６銭	１２年	江戸大火	金３９銭
７年		金１８銭	天保元年		金３０銭
８年		金１７銭	２年	総人口２７２０万	金３０銭
９年		金１５銭	３年	全国飢饉始まる	金３８銭
１０年		金１５銭	４年	天保の大飢饉	金２５銭
１１年		金１５銭	５年		金３０銭
１２年		金２６銭	６年		金３７銭
享和元年		金１７銭	７年	諸国飢饉	金６０銭
２年		金１６銭	８年	大塩平八郎の乱	金２８銭
３年		金１６銭	９年	佐渡百姓騒動	金３４銭
文化元年		金１２銭	１０年		金３６銭
２年		金１５銭	１１年		金２８銭
３年		金１４銭	１２年		金３０銭
４年		金２１銭	１３年		金３５銭
５年		金１４銭	１４年		金２５銭
６年		金２０銭	弘化元年		金２９銭
７年		金１０銭	２年	米騒動	金５０銭
８年		金１４銭	３年		金３５銭
９年		金１４銭	４年		金３８銭
１０年		金２１銭	嘉永元年		金３５銭
１１年		金１６銭	２年		金４７銭
１２年		金１６銭	３年		金６７銭

４年		金４６銭	２２年	山県内閣	２円
５年		金４６銭	２３年	教育勅語	２円
６年	ペリー来航	金４７銭	２４年	松方内閣	３円６４銭
安政元年		金４０銭	２５年	伊藤内閣	２円２８銭
２年		金２８銭	２６年		３円６６銭
３年		金３２銭	２７年	日清戦争	３円６６銭
４年		金５１銭	２８年		４円
５年		金５５銭	２９年	松方内閣	３円７２銭
６年		金６７銭	３０年	伊藤内閣	４円１６銭
万延元年	桜田門外の変	金７９銭	３１年	大隈・山県内閣	３円２８銭
文久元年		金６５銭	３２年		４円
２年		金５６銭	３３年	伊藤内閣	３円７６銭
元治元年		金７８銭	３４年	桂内閣	３円７６銭
慶應元年		１円４２銭	３５年		４円９６銭
２年		１円９４銭	３６年		４円３６銭
３年	江戸幕府滅亡	１円４６銭	３７年	日露戦争	４円３６銭
明治元年		１円６９銭	３８年		５円２８銭
２年		３円４３銭	３９年	西園寺内閣	５円２８銭
３年		１円８７銭	４０年		４円７２銭
４年		１円１２銭	４１年	桂内閣	４円９２銭
５年	初の鉄道開通	８０銭	４２年		４円
６年	地租改正	１円２０銭	４３年		５円３６銭
７年		１円８７銭	４４年	西園寺内閣	６円１６銭
８年		２円　５銭	大正元年	桂内閣	８円３２銭
９年		１円１８銭	２年	山本内閣	８円３２銭
１０年	西南の役	１円３４銭	３年	大隈内閣	７円２８銭
１１年		１円９２銭	４年		４円３７銭
１２年		２円６４銭	５年	寺内内閣	５円５２銭
１３年		４円８０銭	６年		６円
１４年		３円２８銭	７年	原内閣	８円４８銭
１５年	日本銀行創立	２円　８銭	８年	戦争米騒動	１０円６０銭
１６年		１円２５銭	９年	人口５５００万人	２０円
１７年		１円８４銭	１０年	高橋内閣	１４円２０銭
１８年	内閣制度始まる	１円７３銭	１１年	山本内閣	１０円２０銭
１９年		１円５５銭	１２年	関東大震災	１０円４０銭
２０年		１円４６銭	１３年	清浦内閣	１５円３０銭
２１年	町村制施行	１円４２銭	１４年	加藤内閣	１３円６０銭

昭和元年	若槻内閣	１２円７０銭
２年	田中内閣	１０円８５銭
３年	金融恐慌	１０円６０銭
４年	浜口内閣	１０円４０銭
５年		６円２８銭
６年	若槻・犬養内閣	６円５０銭
７年	満州事変	８円２０銭
８年	５・１５事件	１０円８０銭
９年	岡田内閣	１４円８０銭
１０年		１０円９０銭
１１年	広田内閣	１１円８０銭
１２年	林・近江内閣	１２円９０銭
１３年		１３円４２銭
１４年	平沼・阿部内閣	１６円３５銭
１５年	米内・近衛内閣	１６円３０銭
１６年	大東亜戦争	１６円５０銭
１７年		１６円９０銭
１８年		１８円４２銭
１９年	小磯内閣	１８円８０銭
２０年	鈴木内閣　終戦	６０円
２１年	吉田・片山内閣	２２０円
２２年	芦田内閣	７００円
２３年	吉田内閣	１４８７円
２４年		１７２５円
２５年		２０６４円
２６年		２８１２円
２７年		３０００円
２８年	鳩山内閣	３２８０円
２９年		３６４８円
３０年		３９０２円
３１年		３９９５円
３２年		３８５０円
３３年		３９６０円
３４年		３９６６円
３５年		４１１７円
３６年		４２８９円
３７年		４８８２円

３８年		５０３０円
３９年	新潟地震	５７７５円
４０年		６３０８円
４１年		７０２０円
４２年		７６７７円
４３年		８２０８円
４４年	自主流通米制度	８２１８円
４５年	減反騒動	８２１８円
４６年		８６３１円
４７年	田中内閣	９０３０円
４８年		１０３９０円
４９年		１３７０２円
５０年	三木内閣	１５６１２円
５１年		１６６１３円
５２年	福田内閣	１７０８６円
５３年		１７１７６円
５４年	大平内閣	１７１７６円
５５年	鈴木内閣	１７５３６円
５６年		１７７５６円
５７年	中曽根内閣	１７９５１円
５８年	日本海中部地震	１８２６６円
５９年		１８６６８円
６０年		１８６６８円
６１年		１８６６８円
６２年		１７５５７円
６３年	竹下内閣	１６７４３円
平成元年	海部内閣	１６７４３円
２年		１６５００円
３年	宮沢内閣	１６３９２円

２００４年に食糧法が改正され政府米以外はすべて民間流通米となりました。日本は外国からのお米に高い税金をかけ、外国輸入されたお米を売れにくくしています。これを「関税」といい、２００４年には４９０％の関税が適用されたということでした。

私たちの口に馴染んだかけがえのない日本のお米を守る為、安全でおいしいお米を作る努力をされている農家の方々を助けるような仕組み作りをこれからも努力していってほしいと思いました。

街道の高度差表を書く

実際に現地を歩くことが出来なくなりましたので、せめて高度差表をつくり街道を実感したいと思いました。　以前山岳部顧問をされていた先生にお聞きしました。（机上登山と言っておられました。）

ⅰ 実際の道（歩く場所）を地図上で確認する。

ⅱ その行程を直線に近い形で細かく区切り、番号をつける。

ⅲ その行程の地図上の距離をギルビメーター（地図用メジャー）で読み取り、表に記入する。

ⅳ その行程の標高を地図上から読み取り、表に記入する。

ⅴ 実際の距離を公式に当てはめ計算し、表に記入する。

ⅵ グラフ化する

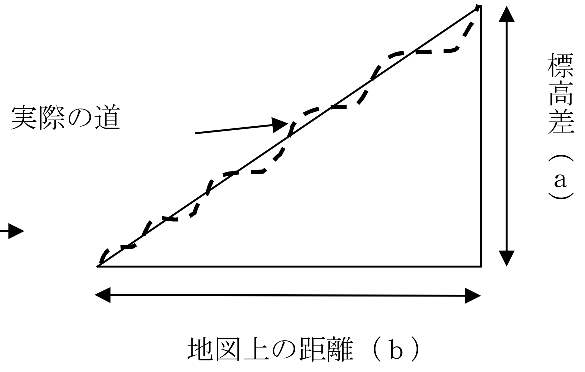
【ポイント】

・ 地図上の距離には高さが含まれていない為、標高差がある本来の道では地図上の距離よりも長くなるため、地図上の距離と標高差の数値を計算し実際の距離を出す必要がある。

・ 細分化するほど正確さが増す。アップダウンがあればそこでも区切る。

・ 地図上の距離は同じ標高での移動距離しかあらわしていない為「※」の計算が必要。

・ ２５０００分の１であれば１実線１０メートルの間隔である。



※

「地図上に距離」を底辺に
「標高」を高さにした三角形を作る
斜辺上の距離を求めるには
ピタゴラスの定理を当てはめる。
実際の道はでこぼこしているので
直線距離よりもいくぶん長くなる
これを（経験上）約１．２倍とみる。

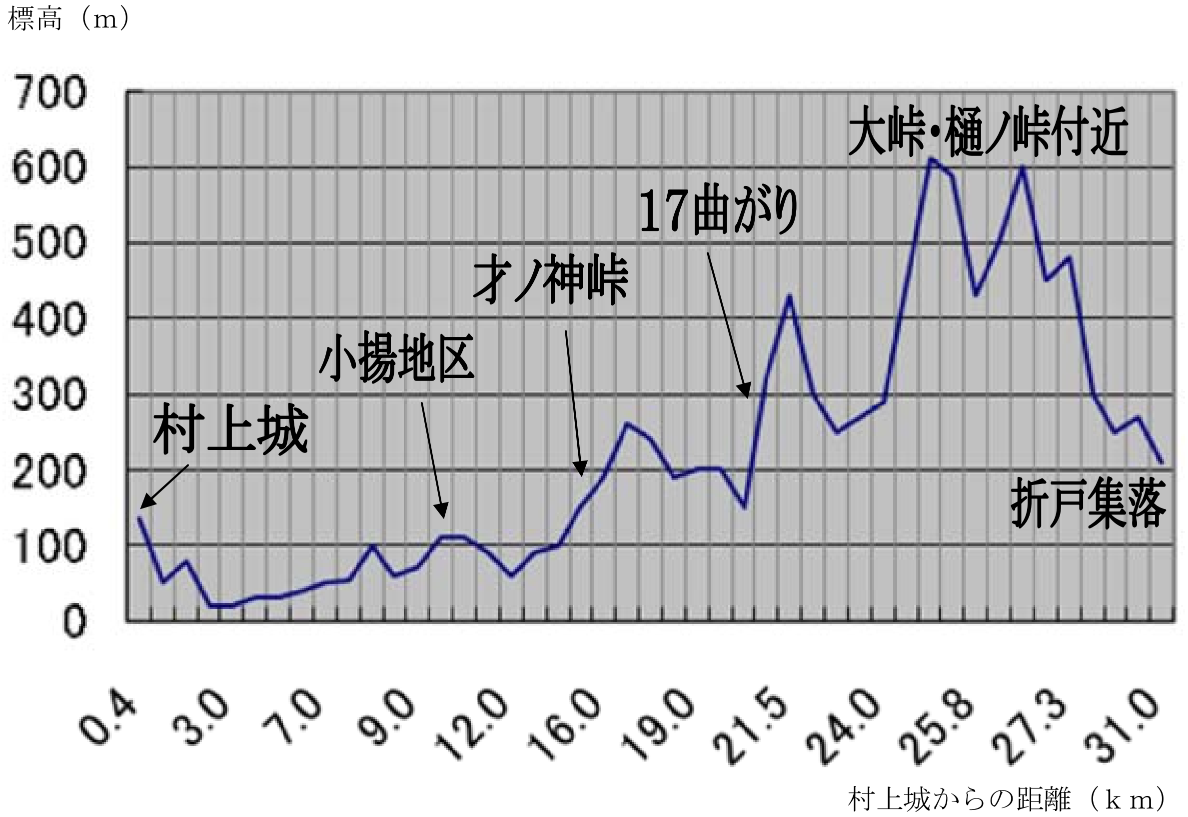
$$実際の道（距離）=\sqrt{標高差(a)^2+地図上の距離(b)^2}\times 1.2$$

これで算出した各区間の値を足す。

		ＡＢ間	ＢＣ間	ＣＤ間	ＤＥ間	ＥＦ間	ＦＧ間	ＧＨ間	ＨＩ間
標高差									
地図上の距離									
実際の距離									

この表を元に用紙にグラフ化する。

今回の作成にあたり使用した地図は国土地理院発行の（２５０００分の１）です。昔は国家の威信をかけて日本全土の地図作り事業をしていた事を聞き驚きました。この地図４３４２枚に３次元の日本全土が描かれていることになり、これを解読できれば国土全体の情報が得られることを知りとても感動しました。人間の努力というものは形になると想像を越える気がしました。



地図には所々しか登山道がないため、「大峠を北に見る、烏帽子山を南に見る。荒川や綱木川に沿って」などという言葉だけの歴史書と絵図を参考に抜けているルートを探しました。なるべくアップダウンのないように山の谷の部分を縫うように道が開かれていました。しかしどうしても迂廻路が見つからない場合にでも、極力高い山に登ることのないように道が造られていたような感じを受けました。また、この辺りは山が深く急な場所が多いにも関わらず「助け」や「問屋」があったとされる場所は、落石や雪崩がありそうな急坂は避けられ、辺りが広くて平坦な場所に設置されていたことがわかりました。

絵図を手掛かりに地図からルートを探し、協力して高度差表をつくりました。

Ⅲ　調査を終えて

当時小国町は羽前小国郷と呼ばれ集落は細分化されていたことなど、地元に生まれ今まで生活してきたにもかかわらず、知らなかったことが多いことに驚きました。さらに昔物語から調べていく上で、小国の風習や習慣などの発見もあり、知る楽しみを感じながら学習を進めることができました。屋号や地名など、その土地で特化した部分をモチーフに自然や生活に関しての名が多くつけられていました。北部地区に限り地名のルーツを調べましたが、生活環境に沿ったその名前のつけ方は特に興味を持った部分です。しかしどれも断定されたものではなく「知らない内にそういわれていた。」などというものが多数であり、ルーツをたどるということは、回数、期間ともに長期にわたる取材が必要な事を知りました。ルーツに関してはもっと多くの発見ができるように、お聞きできる方がご健在のうちに調べ続けていきたいと思いました。

聞き書きで良かった点は、昨年の反省をいかし、お聞きする人を探す際にその地区の家の屋号を参考にした事です。それによってスムーズに取材を進めることができました。しかしその反面反省点も出ました。それはＩＣレコーダーを使い一言も漏らさず記録するまでは良かったのですが文字に起こす作業で時間がかかり過ぎその後の計画が遅れていった事です。それはしっかりとした役割分担をしていなかったという事が原因でした。

街道については、藩を越えての経済・文化の大動脈であったこともあり、小国側から探るだけでは正確なものとはいえないと教えていただき、それぞれ村上・長井など地元の図書館に出向き史料を参考にできたことは良かったと思いました。ただ、舟運に関して言えば、酒田からの最上川舟運や、米沢藩（置賜）領内などの舟運の取り扱いに関してなどを調べる際も参考となる文献や歴史書が膨大にあり、進むにつれて次第にテーマからかけ離れてしまう事も多々ありました。始めは数名でチェックしていたのですが、後半は時間の関係もあり個人で担当することが多く確認作業が疎かになり、気がつけば違う方向に進み過ぎていたというものです。レポートのまとめ方の難しさを改めて感じました。

塩の道や西山街道からはその時代の人々の生活に密着していた事を学びました。人々に必要とされ、望まれていたからこそ、このような大事業も協力を得られ成し遂げられたと感じました。見学してきた塩の道の入り口は、我々には単なる田んぼ道にしか見えなかったのですが、当時街道開拓にたずさわった多くの方々の尽力があり、そんな方々の子孫である私たちが今こうしてこの土地で生活をしているということを考えると、とても不思議な感じがしました。私たちは平成時代しか生きていません。授業で習ってはいてもそんな歴史事項は実感がわきませんでした。しかし今回の学習で明治・大正、そして飛躍的に経済が発展したといわれる昭和の背景を知ることができ、さらにその時代の歴史録はこの小国にもしっかりと刻まれていることが分かったことで、地元への愛着が一層深くなりました。日本史からみれば小さな歴史かもしれませんが私たちの住む、この自然豊かな小国町の古くて新しい発見ができて満足しています。これから先も誇りを持って「好きな故郷」と呼べる魅力あふれる小国町になるように私達も学習を重ね、新しい歴史を創り、そして昔の歴史を守っていかなければならないと強く思いました。

調査にご協力をいただいた関係者の皆様　大変ありがとうございました。

（平成２２年度レポートより）

平成２３年９月１２日発行

「小国町の言い伝え集」

製　作　平成２３年度　地域文化研究班

班　長　齋藤　香穂

副班長　塚原奈々枝

班　員　小川　奈美　渡部　志ノ　渡邊宗一郎　今　　眞人　鈴木　拓磨　鈴木　拓弥

平成２２年度　地域文化研究班

班　長　舩山　　澪

副班長　舟山香菜子

班　員　小関　真奈　齋藤　麻未　伊藤　悠飛

平成２１年度　地域文化研究班

班　長　峰田 祐輔

副班長　安達 桃子

班　員　舟山 拓朗　渡部 恭兵　色摩 七海　佐藤しおり

顧　問　阪野保憲先生